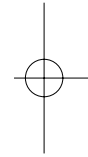
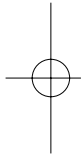
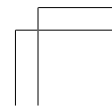
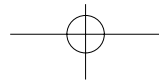
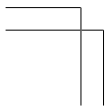


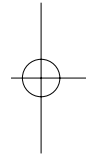
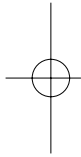
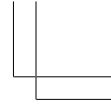
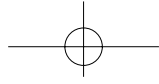
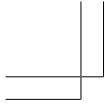
3

## Eternity LineII

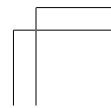
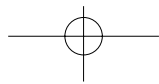
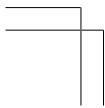


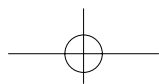
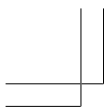
kifumido



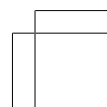
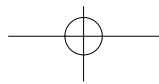
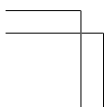
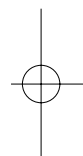
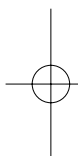


本文：桐月  
カバーイラスト：バハムーチョ





この作品は、「TYPE-MOON 製作である『Fate/stay night』の世界観、キャラクターを使用した二次創作作品です。  
本書の内容は全てフィクションであり、登場する人物・団体などは全て架空のもので



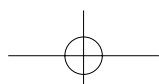
## 目次

—Next prologue Episode—

…347

プロローグ	…	8
五章 鮮血神殿 I	…	14
六章 鮮血神殿 II	…	14
Interlude / 7 Silent ASSASSIN II	…	14
Interlude / 8 ある場所で	…	14
七章 その真実	…	17
Interlude / 9 Lancer	…	7
Interlude / 9 Black Embryo	…	9
八章 Interlude / 10 英雄王 II	…	27
Interlude / 11 悪夢、そして	…	10
	…	24
	…	12



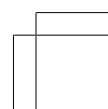
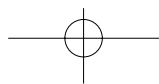
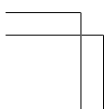
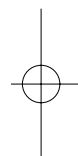
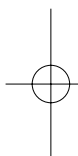


—— 帰りたい、と彼女は泣いた。

いつか果せぬ望郷は、彷徨い歩き身を焦がす。

ここは遠い異国の果て。全ての神々の集う国。  
人々はここを楽園の国だと囁きあう。

しかし、生まれ育った世界の果てのあの国こそが、  
彼女が望んだ、ただ一つの理想郷——。



## prologue

——二月八日 午後十四時十分三十秒。

ぼんやりと視線を落とした先で、左手首に巻かれた時計が秒針を刻んでいる。

六限目の始まった階下は静まり返っており、この一角のみ話す声が響いている。

「クッ……ッ！ 衛宮め……調子にのって……ッ!!」

叩き付けるように携帯電話を切ると、間桐慎二は神経質に親指の爪を噛んだ。

苛立ちを含んだ声に、蹴られたふくらはぎがずきずきと痛む。

しかし、その事に桜は何の感情も浮かばなかった。

兄の苛立ちをぶつけられるのにも慣れていたし、こんな痛みでは人は死なない。それこそ、衛宮士郎が行う魔術の鍛錬に比べれば何のどれほどのものか。

——もう、やめて。

衛宮士郎ともう一度戦うことになる、兄にも彼にもきつと良いことにならない。

それが桜には良く分かっている。

——兄さんは知らないんだ。

今、衛宮家にはセイバーのほかにキャスターも存在している。

先日、遠坂凛が衛宮家で二戦交えた時にはセイバーに加勢する様子は無かったようではあるが、それもいつまでのことか分からない。

近くにライダーの姿は見えない。——否、気配はするものの目で見る事は叶わない。

事が起こるまで霊体化して慎二の側に控え、影に潜む蛇が如く、深く静かに沈黙を保っている。

桜は朝、遠坂凛と一緒に登校している。

その時彼女は自分のサーヴァントに、桜のことも気にかけておいてと命じていた。

今はまだ、ライダーが実体化していないために、学校の付近に潜んでいるであろうアーチャーの目から逃れている。

ライダーが戦うのは、衛宮士郎が到着した時——。その時に遠坂凛が黙していることなどありはしない。

「兄さん……乱暴なことほしないでください」

「——ちっ。お前誰に言ってるんだよ。僕に命令するなよ……!! さっきからウルサイんだよ。衛宮と話をするって言ったら、お前喜んでただろう……?」

「先輩には酷いことしないで……」

慎二の顔が歪む。

唾棄するかのごとく顔をゆがめた後、一転して満面の笑みになる。

——それが、彼の持つ歪みを見せ付けられているようで、桜には痛々しかった。

「なにそれ？ 酷いことなんてする訳ないだろう？ 被害者はこの僕なんだよ！ あつちが凶

暴なサーヴァント連れてるんだから、仕方ないだろ。ちよつとは物事を考えろよ……！！ お

前みたいなグズが足を引っ張るから、遠坂も僕に協力しなんだ——よ……ッ！」

言葉尻に被せるように、腹部に爪先を叩き込む。

「っ、うう……」

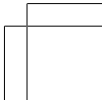
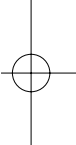
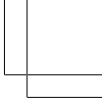
そのままずるずると踊場の壁をついた桜には目もくれず、慎二はカツカツと音を立てて階下をうかがい、一段飛ばしで上にあがる。

やがて、頭をかきむしるようにして頭を抱えると乱雑に最上段へと座り込んだ。ぶつぶつとポケットの中の物を遊び、時が過ぎるのを待っている。

兄の持つ暗い衝動を見て桜はずきりと胸が痛んだ。

胸と足とお腹と——心と身体の痛みを堪えながら、腕の時計を再び見た。長針は十五分を指し示している。

衛宮家から学校まで、三十分の距離にある。



彼の性格を考えるときつと急いでくるに違いない——ならば後、二十分ほどでここにたどり着くだろう。

——先輩……来ないでください……。

目の前で兄と彼が争う所など見たくない。

それは紛れもない桜の本心。

心の底から湧き立つ願いでもある。

このように乱暴に扱われようと、その思いは揺るがない。

——だというのに、

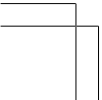
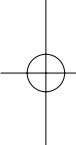

「……私のために……来てくれる……」

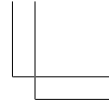
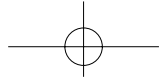
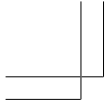
彼の自己犠牲とも見える行動に、喜びを覚えてしまうのは何故だろう。

胸の内を、ざわざわと、蠢く仔犬が存在している。

血液の中を動く彼らは、桜の悦びを吸い上げて活力を増していく。

どくどくと心臓を打つ鼓動が増す。

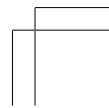
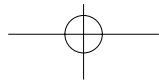
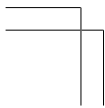
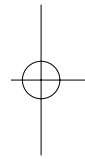
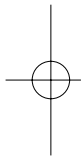




俯いた髪の毛に隠れて、彼女は知らずに笑みを浮かべる。

日の差し込む階段にうずくまり、彼を待つ。

ぞろり——と、床に落ちた桜の影が波打ったことに、その場にいた誰も——ライダーでさえ——気がつかなかった。





正直に言うならば、協力してくれるのは有り難い。

「シロウ」

セイバーの声に、延ばしかけていた腕が止まる。

彼女はじつと俺を見詰めている。

その眼差しには逡巡も非難の色もない。

数日暮らしてみte思ったが、セイバーとキャスターの相性はあまり良いとはいえないさそうだ。彼女達は互いに憎みあつてはいないだろうが、苦手意識とでも言うのか、どうにもギクシヤクした部分が残っている。

もちろんキャスターがやつていた事をセイバーが許せないのは承知している。俺もそれを許すとか認めるつもりなんてこれっぽっちもなかった。

ただ——共に暮らしてきて他人を信じられないキャスターに対し、俺はどうにか行動していたって思った。それは魔術を習う事だったり、普段通りの生活を送る事だったり様々だ。

キャスターが起こした過去を無くすなんて出来ない。

出来ないが、彼女の善意を否定するには俺たちは深く関りすぎていた。

だから、これからのことを考え冷静に判断しなくちゃいけない。

優先事項を間違えてはいけない。今きつと苦しんでいるのは桜だ。

セイバーに一つ頷き返した。



それで彼女は僅かに目を閉じる。思考は僅か。

「シロウの判断に従います」

キャスターに向き直る。

「——聞きたいことがある」

「なにかしら？」

彼女が手を貸してくれるというのは、素直に嬉しい。

キャスターがここに居る事は慎一とライダーの知らない事実だ。ライダーがセイバーに注意を払うなら、さらにキャスターの存在は伏兵になる。

それに彼女が持つ魔術なら、いざという時に桜を安全に連れ出す事もできるだろう。

だけど、助けになるからといって差し出された彼女の手を取ってしまってもいいのだろうか？ それを俺は考えなくてはならない。

先ほどキャスターは俺に訪ねた。

強大な力に翻弄される人間を前に俺はどうするのか——と。  
だから俺も聞かなくっちゃいけない。

彼女自身のことを。

俺に手を貸してくれることの意味を——。

「……アンタは聖杯を諦めたと言い、俺たちはそれを受け入れた。——俺に聖杯をどうこうするつもりはないし、もし手に入るのならセイバーにあげるつもりで戦っている」

「ライダーと戦うことは聖杯戦争に再び参加するってことだ。サーヴァントであることを放棄して戦いを止めるなら、どんな理由があっても——例え善意で協力してくれるんであっても、再び戦いに赴いちやダメなんだと思う。自衛のためならば……それはあるいは仕方ないことなのかもしれないけど……」

でもこれは違う。  
俺は慎二の待ち受ける陣地に攻め込むつもりだし、防衛じゃなく攻撃のために行くつもりなのだ。

「だからもう一度聞きたい。——アンタは、再び聖杯戦争に参戦するつもりなのか？」

「そんなこと——」

キヤスターの返事は簡潔極まりない。

あつげにとられた俺はよほど間抜けな顔をしていたのだろうか。キヤスターのローブから覗く口元が笑みの形になっている。

セイバーは肩をすくめている。

「わかった」

だからセイバーとも瞬時に視線を交わし、互いに頷く。

既に彼女を信用するかどうかなんて次元は通り越している。あの夜——柳洞寺で激突するセイバーを止めた時は、ただセイバーに俺のワガママにしたがつてもらっていた形だった。

この時はキャスターとの間の信頼関係など微塵もなかった。

俺もセイバーも彼女を警戒していたし、それはキャスターにしても同様だろう。

それから、セイバーと俺の奇妙な同居生活にもう一人住人が加わり、僅か数日ではあるが寝食を共にした。

——思えばたった三日間に様々な出来事があった。

遠坂との決別。

イリヤとの邂逅。

セイバーとアーチャーの激突。

いまだ膠着しつづける聖杯戦争——。

そんな中、住人が一人増えた屋敷は少しずつそれが日常になるうとしていた。

だから、今さら信用できるとか出来ないとか、これはそういう話ではないのだ。

キャスターが俺に覚悟を求めたように、俺もキャスターの善意とその先を受け止めなくてはならない。

電話を切ってから既に五分が経過している。

家から学校までの距離なんて、慎二にだって分かっている——きっと遅れたら、そのとばっちは桜に向うだろう。

ここからは急いでも二十分は掛かってしまう……時間が無い。

彼女が手を差し出した。

そして続ける。

「しかし、幾つか条件を出させてもらいます。今度は魔術師としての私が、自らの力を揮うための最低条件です。——先の問に対するサーヴァントの返答だと思ってもらっても構わない」

今度のこと、先ほどはキャスターという個人の感情に基づいてという意味か。

人としての自分と、魔術師としての意見をきつちり分けるあたり、在り方まで魔術師として固定化された彼女らしいと思う。

もちろんそれに対する是非はない。俺は領いた。

「わかった」

「魔術を行使する以上、消耗を抑えるためにマスターとして契約してもらいます。——しかし、貴方が聖杯を手にする為に他のサーヴァントを追い落とすための協力は致しません」

「……ずいぶん都合のいい条件だな。キャスター」

セイバーの目が冷たく光る。

ともすれば、この世界に現界するための礎として俺を利用し、サーヴァントとしての協力はせず、しかし俺たちが勝者になった暁は、自らも聖杯を得る権利を有すると主張しているようなものだからだ。

キャスターはいいえ、と首を振った。

「聖杯に興味がないことには変わりはありません。が、しかし無用な魔力を消耗するのも本意ではありません。そして、我が身を削ることで貴方に献身を示そうとも思いません」

今のキャスターは主のいないサーヴァントだ。

単独固有のスキルを持たないキャスターが存在しつづけるためには、自身の魔力のみで肉体を構成せねばならない。

つまり、今の状態で俺を助ける為に魔術を使うのは、文字通り身を削るに等しい。

理知的に計算し尽くし、一切魔力を無駄に使わないという、魔術師として昔気質らしいキャスターにとって当然の要求だろう。

「わかった。他にはないのか？」

「後は先の返答が全てです」

どうするのか？ と俺を促す。

答えなんて最初から決まってる。

「それで構わない。よろしく頼む」

「シロウいいのですか……!?!」

セイバーはこの戦いの後——慎二とやりあった後のことを言っている。

この後、セイバーを盾にできる格好となったキャスターは、漁夫の利を狙うならば絶好のポジションが取れる。

そして、俺たちを出し抜くなどせずとも、このまま勝ち進めばキャスターもその権利が得られるのだから、聖杯を求めて戦うセイバーが危惧するのも当然だろう。

——ついでに、俺なんかが思いつく葛藤は既にキャスターも見越しているに決まっている。

「ああ」

セイバーに向け、はつきりと頷いた。

そして彼女の差し出した手を——話してる間、一度も下げられなかった手を握った。

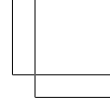
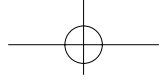
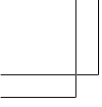
「貴方を今から仮の主と認め、契約を行います。我が力望むならば我が名を呼びなさい」

だから答えを受けた以上、迷っている時間も必要もない。

「聖杯の誓約に従いマスターとして頼む。桜を助けるために、手を貸してくれ。キャスター」

「キャスターの名において承諾いたしました。目的を果すまで衛宮士郎に協力し共に行動します」

徹底して命令を聞くと言わない——言外にも仮の主だと主張している辺りが彼女らしい。もちろんそれに対する不満なんてない。



「……よろしく」

この瞬間、俺たちの間に協力関係が出来上がった。

準備も慌しく家を出る。

セイバーはなにやら複雑な表情をしていたが、表立って反対はしてこない。俺を信頼して判断を任せてくれたのか、この僅かばかりの同居生活でキヤスターに対する印象が変わったためなのか——それはセイバーにも分かかっていないのかもしれない。

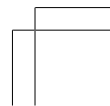
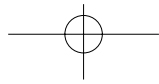
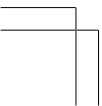
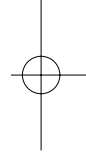
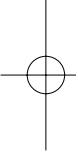
——彼女自身、キヤスターには何かしら思うところがある。それはいざれ何らかの形で表に出てくるだろう。

しかし今、桜を助けないという想いは俺と同じに違いない。

門を潜りながら、ふと玄関を振り返る。

先ほどのやり取りが脳裏をよぎった。

俺の問いかけに対するキヤスターの返事は簡単だった。



「そんなこと、考えてもみませんでした。ただ、貴方がここで殺されたら私は住む所がなくなってしまうわ」

冗談混じりのその言葉は、共に暮らして初めて聞いた言葉だった。

§

「学校に結界を張ってあるらしい……。慎二はセイバーが来たらライダーにはすぐ分かると言っていた」

時間がないので、打ち合わせは道すがら行う。

幾つかの基本方針と作戦はここに着くまでに決めており、セイバーもキャスターも既に武装している。今は彼女達の目立つ外見を、キャスターの魔術で見えないように誤魔化している。

道すがらの警戒のためではなく、学校の近くで魔術を使ってライダーや遠坂に察知される危険を冒すよりは、予めかけておいた方が安全という理由だ。

慎二はセイバーを連れてくるなど言っていた。どうする？ と問うと、これはセイバーに



もキャスターにも断固反対された。

そこで結界に入る前の打ち合わせが必要になる。

「シロウが単独でライダーに挑んでも殺されるだけです。私の力はきつと必要になる」

そうだ。俺ではサーヴァントに勝つことは出来ない。

それは既に思い知っていた。

「……ああ。ライダーに殺されるのが目的じゃない。桜を助けないと。……でもどうする？」

セイバーと同時に突入はできない。慎二が桜に何をするかわからない」

「サクラをなんとかライダーとそのマスターから離してください。もしくは、ライダーを二人から離すのもいい。そうすれば後は私が何とかします」

「助かる」

最後の方針が決まった。

スロープ状になっている坂を登ると、丘の途中に立つ穂群原学園と校門が見える。

「……この結界内はライダーの庭です。あの門を潜ると、サーヴァントは感知されるでしょう」

「キャスターは結界のこと、知ってたのか？」

「当然です。私のマスターもここにいたのですから」

その葛木宗一郎も今は居ない。が、既に下調べは万全ということか。

「でもそれならどうして、その時解除しておかなかったんだ？ 結界の張られた場所に  
通わせておくなんて危ないだろ」

「坊や……」

盛大な溜息が聞こえた。

それで、俺は自分の失言を悟った。

「……すまん。わざわざ結界の解除なんてしたら、そこにマスターがいるってバレるよな。  
遠坂もそれが理由で解除しなかったのか」

先日の屋上——遠坂とまだ協力関係にあった時の会話を思い出した。

そう……あれはまだ柳洞寺に向う前のこと。サーヴァントがいる柳洞寺とそのマスターを  
調査しようとして、一成に聞き込みに行こうとした俺を遠坂は止めた。

マスターを探る者はマスターに他ならない。ならばこちらから相手にヒントを与えては  
いけない——と。

ならばこそ、結界が張られていたとしても慌てて行動を起こしたら、その所在が知れてし  
まう。

葛木は聖杯戦争には乗り気ではなかったようだし、その行動を妨げないキャスターが葛木  
との接点を他者に悟られてはいけなかったのだろう。

「私にとってそれも理由の一つではありますが、あのお嬢さんは結界を何とかしようとした

ようね」

「……そうなのかな？」

でも無理でしょうとキャスターは言った。

「この結界は既に完成してるし、驚くほど強力です。人間の魔力では文字通り焼け石に水でしょう」

「そっか……。キャスターの方は大丈夫なのかな？」

「詳しく説明をしてもいいのですが、時間がないのではなくて？」

「———そうだな。話は後に。今は桜を助けることに集中する」

校門に向かい一歩踏み出す。

「では迂回して建物の裏の林に待機します。突入は十分後に。……任せていいのかな？ キャスター」

「ええ。今の彼は私にとってもマスターです。彼の方針は尊重します」

「その言葉、信じよう」

セイバーが頷いて、姿を消す。

慎二とライダーが警戒しているのはセイバーだけだ。だから彼女が裏手に回り俺とキャスターが正面から突入する。

——しかし、同時に入ってはライダーの警戒を促すだけだ。

桜の無事を確認するまで、慎二達には油断していて貰った方がいい。キャスターを見る。

彼女の顔をみて俺はそのまま校門をくぐり――敷地に一歩足を踏み入れた。

数日前にも、ここを通って違和感に囚われたことがあった。

そうか……あれが結界の気配か。

今はまだ発動していないらしいこの結界だが、圧倒的な存在感を持ってその姿を知らしめている。

敷地全体をすっぽり包み込むほどの異界は、ライダーの庭だ。

あの慎二が自信たっぷりに他のサーヴァントを感知できると言っていたのは、誇張でも何でもない。

――この先はサーヴァント同士の戦いになる。

「……そんなことに、桜を巻き込んでられないよな」  
慎二を見つけて桜を取り返す。

その後は、遠坂を見つけて一発ポカリとやらせてもらおう。

遠坂が異変に気付いているかどうかは分からない。――が、他人が何とかしてくれるなんて期待はもっていない。今は俺たちで何とかする。

校舎に入る前に、あたりを警戒してぐるりと一度見渡した。彼女の姿隠しの魔術かそれとも行動を開始したのか、正門前のキャスターは既に姿を消していた。

## §

正面から校舎に入った。時間は六時間目が終わった辺りで、廊下は部活動に赴く生徒やまだ教室に残っていた生徒が通り過ぎる。

靴箱のあるロビーに公衆電話がある。慎二はここか、あるいは携帯電話でも使ってきたのだろう。

——が、今は通り過ぎる生徒が居るだけで、目当ての姿は見つからない。

「居ない……か」

——四十二……四十三……四十四……四十五……。

内心で秒を数え続ける。

セイバーが突入するまで後八分。

それまでに慎二を見つけて、アイツの注意をひきつけなくてはならない。

「クソ。考える。慎二はどこにいる……？」

ケンカ別れして疎遠になり、今は決定的に別離したとは言え、五年も付き合ってきた友人だった。

慎二の考えくらい分らないでどうする——？

こんな場合、アイツならどうするだろう。

結界の張られた基点を陣取る？

……それはいかにも魔術師らしい。が、慎二はわざわざ俺に電話までして呼び出した。そんな無駄な行動、魔術師なら絶対に起こさない。

それに、その場に慎二がいると厄介なことになる。どうする？ と考えたが、俺はその可能性を捨てる事にした。

結界の基点は一階だ。授業が終わっても部活動などで人通りの激しい位置に、サーヴァントを連れた慎二が居座ってる可能性は非常に低い。

なら、間桐慎二はどうするか？

「……上か？」

アイツもライダーを他人に見られたり、取りまきの女の子に見つかって色々と騒がれたりしたくないだろう。

なら、できるだけ人目のつかない場所に行くに違いない。

学校に俺を呼び出し、サーヴァントを呼び出し、なおかつ人の居ない場所——。  
そんな都合のいい場所は一つしかない。  
そこは、俺と遠坂も人目につかないために話し合いに使った場所。  
つまりは、屋上に他ならない。

「はあ——はあ……はあ……」  
階段を駆け上がり、屋上の前にたどり着く。  
息が僅かに乱れたが、この先にいるサーヴァントのことを想像し、鼓動が何時もより心拍数を上げている。

——落ち着け、肺に空気を取り戻せ。  
両手を鉄の扉にかける。  
階段を全力疾走して僅かに到着までの時間を稼いだ。——セイバーが来るまで、後七分。  
早く着けばそれだけ桜が慎二のとばっちりを受ける時間が減る。だからここまで一分一秒を急いできた。

でも、これからは違う。  
一分一秒を引き伸ばし、俺たちが生きて帰れるだけの時間を作る。

最後に時計を見て、時刻を確認した。

「よし」

セイバーたちが来る間、何とか持たせてみせる……！  
決意と共に押し開く。

ギギギ——と、重い音を立てて光が入り——。

はたして、慎二はそこにいた。

「やっと来たんだ。待ちくたびれちゃったよ」

桜を脇に従え、慎二はその首に手をかけている。

俯いた顔は見えないが、泣いているようにも見えた。

——瞬間、押さえ込んでいた怒りで目の前が赤くなる。

「——瞬間、押さえ込んでいた怒りで目の前が赤くなる。」

「——瞬間、押さえ込んでいた怒りで目の前が赤くなる。」

打ち合わせも何もかも忘れた。  
ただアイツをぶん殴ってやりたい——そんな思考に侵食され、慎二しか目に入らない。

ガチンッ!! と頭の中で撃鉄が振り下ろされた。

瞬間、身体の中身が入れ替わる。

キャスターの言う魔術回路を立ち上げるスイッチと、自分自身を観察するもう一人の自分が冷静に告げる。



それはこんなにも簡単で、今までのように一時間かけて擬似神経を埋め込んでいたのが何だったのかと思うほど呆気ない変化。

体内を巡る力が、握りしめた拳に力を与える。

「おっと、間違えるなよ。おまえの相手は僕じゃない。ちゃんと用意してるんだからさ」  
「……………」

俺と慎二の間に、黒い影が立ちふさがる。

長い髪と、長身の女サーヴァント——ライダーがそこにいた。

彼女の表情は動かない。

——以前に見た時にも思った。あれは自動的に動く人形だ。

セイバーやキャスター、またはアーチャーのように喜怒哀楽の感情で左右される生き物ではない。マスターの命令を聞くだけの、出来のいい飼犬だ。

その彼女に、人質に対する是非のような人間的な問答は届かないだろう。

今もライダーは眼帯に覆われた顔を、ただ真っ直ぐこちらに向けている。

狂ったような笑いを浮かべる慎二よりも、無機質な表情を浮かべているライダーの方が不気味だった。

「賢明な判断です。それ以上前に出ると、マスターは彼女を傷つけます」  
ギリギリと奥歯を噛み締める。

もう少し……時間を稼がないといけない。

学校に入る前にセイバーとキャスターと三人で決めた段取りがあった。

だけど、そんなコト慎二の姿を見たときに忘れた。

「やあ衛宮。ホントに一人で来たんだ。おまえのことだから、ああ言えばちゃんと一人で来ると思っていたよ」

何が嬉しいのか、今まで見たこともないくらい慎二は上機嫌だ。

その清々しいまでの笑みに、俺を抑えていた理性が軋みを上げた。

——なんで、慎二はそんな笑顔を浮かべられる。

左手は桜の首に回されている。絞められてはいないようだが、俯いた表情は見えない。

残る右手に——だらりと下げられた手の中に、チラチラと金属が光っている。

「……なんだよそれ」

なんでそんなことしてんだよ……ッ！

桜は慎二の妹だ。

妹を人質に取るなんて言語道断だ。誰が許したって俺が許すもんか！

でも慎二がやってるのはそれだけじゃあない。なんで、兄が妹を人質にとってナイフまで持ち出してるんだよ——！！

何で妹に、兄が刃物なんて向けてるんだよ。

怒りで目の前が白くなる。

桜は慎二の家族だろ……!!

十年前の火事を思い出せ。あの炎を思い出せ——!

母親は俺を外に逃がしたせいで逃げ遅れた。

父親は母さんを助けにいつて家ごと潰された。

切嗣に助けられるまで、猛火の中を彷徨い歩いた。大勢の人が死んだ。大勢の人を見殺しにした……ッ!

誰も助けられない俺。

見殺しにしかできない俺。

家族を助けられなかった俺……!!

俺が助けられなかった人に、コイツはなんでナイフなんて向けてるんだ……ッ!

セイバーが来るまで時間を稼ぐ——ただそれだけの役割だったはずなのに、今すぐ慎二を

ぶちのめしたくて仕方がない。

中間にいる黒いサーヴァントの姿も目に入らない。

「オマエ……ッ! 本気でやってんのか慎二——!!」

「……はあ? 当然だろ。本気だからオマエに最後の切り札使ってるんじゃないか。この状況でなにいきがつてるんだよ」

「ふらふらと夢遊病者みたいだと思った。さつきから奥歯がガチガチと鳴りっぱなしだ。堪えきれない怒りで、顎の筋肉が抑えられない。」

そんな些末な部分のことなんて気にしてられない。

震えは腕と足まで伝わり、全身の筋肉が今すぐ慎二をブチのめせと訴える。

「あはっ！ あはははっ！ なんだよそれ、ブルっちゃってるのかよ。あーっははははは」

そのけたたましい雑音を止めようと、一歩足を踏み出し――。

「……わからない人ですね。貴方は一人で何をしに来たのですか？ 貴方では私に敵わない。」

怒りに震え、戦う意志があるのならば一人で来るべきではなかった――

その言葉は、水をぶっ掛けられたように冷たく響いた。

それはどこまでも冷たく、冷静に告げられた死刑宣告に他ならない。

ただの人間はサーヴァントには敵わないという事実を指摘し、マスターに向ける戦意をそぐ一言だ。

「ただどあまりに冷酷無慈悲な言葉は、水をかけるなんて野暮なことをする以上に、相手をもどこまでも打ちのめす。」

結果、彼女のおかげで暴走しかかっていた理性の手綱を取り戻した。

……ライダーの言い分は最もだ。

……俺ではサーヴァントには敵わない。

慎二をぶちのめすのが目的じゃない。

桜を、助けるんだ……！

そんな簡単なことすら忘れていた。

これじゃ、キヤスターに坊や呼ばわりされても、怒るなんて出来はしない。

「そうだ……。一人で来るべきじゃなかった」

「馬鹿だな。今さら気付いたってもう遅いよ。——あー、でも良かったなあ桜。コイツはオ

マエが大事だから、のこのこ一人でやってきたんだ。嬉しいか？ 嬉しいだろう？ ……

ちっ。ほら、嬉しいっていえよ」

桜は俯いたまま顔を上げない。自分の足で立っているから意識がないなんて事はない。

だとするなら、黙したままなのも、俯いたままなのも桜の意志だ。その表情は髪の毛に隠

れて見えないが、きつと悲しい顔をしているに決まってる。

慎二は決して良い兄だとは言えないが、それでも桜は慎二のことを兄として立てていた。

どんなひどい扱いを受けても慕っていたんだ。

その兄に人質にされるなんて、悲しんでないはずがない。

それ以外の理由なんて——と考え一つのことを気がついた。

「……桜に、話したのか？」

「——はあ？」

「桜に、聖杯戦争のことを話したのかって聞いてるんだ……ッ」

慎二はその瞬間、あつげに取られた顔をした。

「あ、あははっ！——そうか、そういうコトかあっ！……ああ、なら安心しろよ。全部一から十まで話してやったよ！僕たちがマスターだってことも、今まで殺しあつてきたことも全部！」

「……………っ！」

「なんだよ、隠しておきたかったのか？バアカ、そんなのバレるに決まってるじゃんか。それに、こいつ、おまえが何か隠してるの気付いていたぜ。でも結局聞けなかったっさ！

お前に邪険にされたんだろ？あーあ。可哀想になあ」

——もうここにはこないでくれ。

——しばらく近寄らないでくれ。

アレから僅か二日しか経っていないというのに、どこか他人のような遠い記憶に見えた。

確かに、桜を遠ざけたのは俺だ。遠坂に桜のことを任せ、責任を押し付けて、これでもう

無関係なんだって勝手に安心してた。

そんなの何の解決にもなっていないというのに……!!

慎二がマスターなんだってとつくに分かっていたんだから、キッチンと解決しないといけなかったのに……!!

「……くっ」

思わず悔恨が洩れる。

慎二はそれに気を良くしたのか――。

「ほら、今なら衛宮は何だって答えてくれるぞ? 聞いてみろよ。私のことが嫌いになったんですか――って。今まで尽くして来たのはなんだったんですか――ってさ。あはははははははっ!」

桜にナイフをあて、顔をあげさせようとする。

それでも顔を背け俯いたまま桜は歯を食いしばっていた。

「せっかくの機会を与えてやったのに……。これだからグズは嫌いなんだよ」

桜は何も語らない。

慎二に罵倒されようとも、俯いたままだ。

聖杯戦争のことを桜に知られた……。こうして、近しい人が次々と巻き込まれていくのだろうか……?」

……？ 何かおかしい。

僅かな引っかかりだった。あの出来事がなければ絶対気付かないくらいの違和感。それがなければ、慎二の言葉を鵜呑みにしていたらうつつくらい。

それは、桜が聖杯戦争のことを知ったのはいつだろう？ ということ。

少なくとも、俺が来るまでの僅かな間じゃない。

そう……。それはつい先日のこと。

アーチャーと戦った僅かその後——飛翔するキャスターと、困惑する桜の姿があそこにあった。

『貴女、漆黒のサーヴァントは？』

『え、ライ、ダー……？』

知っていた。

桜はずっと前から、聖杯戦争のことも俺たちのことも知っていた。

それがいつからは分からないが、知っていてずっと黙っていてくれたんだ。



多分、俺の負担とならないための桜の優しさ……。  
反応の無い桜に飽きたのか、慎二の声が変化する。  
明確な嘲笑が入った。

兄にそんな事を言われて傷つかないはずがない。  
慎二が手にしたちっぽけなナイフなんかより、鋭利に心を抉っている。  
それなのに、黙ってただ一人で傷を抱えて耐えている。  
俺にはその俯いた姿が、

「あーあ。何黙ってるんだよ。全ッ然つまらないよ。衛宮がお前のこと嫌ってるのかどうか、  
薄汚い間桐の女だつて知られてショックを受けてるのかとか、ちゃんと自分の口で訊けつて  
いってるんだよ！」

「慎二……………ッ！」

謝り続けているようで、これ以上は耐えられなかった。

「約束通り一人で来たんだ。桜を放せ」

「おいおい。約束なんてしてないだろ？ したのは命令。一人でくれば桜に手出ししないっ  
て言っただけじゃないか」

「お前……桜を解放するって言っただろ」

「しつこいねお前も。そんなの知らないよ。衛宮のときが僕に約束とか言うんだつたら、録

音でもしとけて。ま、実際にやったらそれはそれで面白いけど。衛宮くんってば盗聴が趣味なの？とか。あはははははっ！」

「ギリ——と噛み締めた奥歯が鳴る。

こんなのは、既に分かっていた。

あの夜、ライダーのマスターとして戦う慎二を見ていた。

だから慎二に対する失望なんてない。悲しいなんて思っちゃいない。でも——。

それでも、桜は慎二のことを兄だと思っていたんだ——！

俺に慎二が何か言うのは、我慢できる。我慢してみせる。

しかし、桜に聞かせるために俺を騙ってる慎二の姿は、見せたくなかった。

「……どうすればいいんだ？ 土下座でもすればいいのか？」

「はあ？ 今さら頭なんて下げられたって嬉しくもなんともないっての。いい加減ケリつけたくて呼び出したんだからさ」

「ケリ……？」

「そうだよ。そろそろ衛宮にも退場して欲しいからさ、ここらで僕の力を遠坂にも見せ付けておかないとね」

「お前と、戦えばいいのか？」

それは慎二としては殊勝な申し出だ。だけど、

「とことん馬鹿だな。この僕がなんで自ら殴りあいなんてつまらないことしなくっちゃいけないのさ。相手をするのはコイツ」

ライダーが一步前に入る。

「ここは闘技場だ衛宮。四方をフェンスに囲まれたおあつらえむきの場所だろう？ お前は奴隷のように挑んで殺されて来い」

そして漆黒の彼女に向け、

「やっちゃえよライダー。ただし、一気に終わらせるなんて優しいことするんじゃない。そんなんじゃ、僕の気が晴れないからな」

「了解しました」

俺の前に立つ長身に威圧される。

—— 以前みた奇妙な鎖の短剣は無く、ライダーは無手になっている。なるほど、確かに手加減はしてくれるらしい。

「ふざけるな」

確かに武器はもっていないが、そんなの全然変わらない。

サーヴァント相手に生身で立ち向かえなんて、死刑宣告を受けてるのとどこが違う。「楽ませてくれよ。衛宮。すぐ倒されたりしたら承知しないからな」

セイバーの突入はいった？ キャスターは？

屋上に入ってから、時刻を確認する余裕が無い。

アレでいて慎二は目ざとい。ライダーにおいては結界まで張ってるくらいだ……多分言うまでも無いだろう。時間を気にするそぶりを悟られ、セイバーのことを疑われては、人質の桜に慎二は何をするのか分からない。

だから、後は彼女達を信じて生き残ることに徹する。

素手のライダーでも、サーヴァントなら俺をぶち抜くくらいのパワーはあるかもしれない。

——が、慎二は長引かせると言った。

それだけが、俺の命を繋ぐ細い蜘蛛の糸だ。

あるいは、ライダーは生身ではセイバーに遠く及ばないサーヴァントだ。以前の時もそして今も、彼女から感じる威圧感はそのままで強いものじゃない。そんな状態でさらに制限が掛かっているなら、もしかしたら何とかなるかもしれない……。

「っ!?」

俺の思考の隙間を縫うようにして、ライダーの姿が霞んだ。

いや、彼女は目の前にいる——ただ、余りにも素早い移動に距離感を忘れた。そのため、

まるでライダーの姿がブレたかのように錯覚させた。

予告ナシに踏み込まれた。

そして彼女は無造作に腕を振り上げ――。

「グッ！」

ドゴツと、掘削機を砂場にたたきつけたような音をして、腕のガードごとふつとばされた。

……くそ、わざとガードの上から狙いやがった。

慎二の指示通り、長引かせるつもりなのだろう。

向き合った時に既に服を強化していたが、それでもハンマー並みの衝撃を受けた腕は、一発で痺れを訴えている。

何とかできるかもなんて、思い上がりに過ぎないと思いはらされた。

――くそ、攻撃なんて無理だ……！！

たった一発で悟らされた。下手に攻撃して無防備な所に喰らえばそれで終わっちゃう……！！

本来の力の何分の一も出してないくせに、生身じゃ話にならないほどキツイ一撃だった。強化して鉄板並みの硬さになってる服でも、重く伝わる衝撃は緩和できない。

――俺の未熟な「強化」ではなく、キャスターの術ならあるいはさらにダメージを軽く出

来たかもしれない。

でも、キャスターの術を身に纏って察知されるかもしれない危険は冒せなかった。

だから、後数分——あるいは数秒、いずれ訪れる勝機を待つ——！

§

「ライダーの正体はメドゥーサです」

学校に向う途中、唐突にキャスターは切り出した。

「メドゥーサ……？ ギリシアの英雄。ゴルゴン三姉妹が末の蛇姫か……！」

俺だって良く知っているくらい、有名な英霊だ。

蛇の髪を持ち、見る者を石化させた恐ろしいギリシアの怪物——それがメドゥーサ。

伝え聞く恐ろしい容貌とあのライダーの姿とは似ても似つかないが、伝説には誇張が付き物だということだろうか。

ただ、語り継がれる能力は決して軽んじていいものではない。

セイバーには遠く及ばなかったが、隠し持っている宝具はきつと彼女を象徴するものに違いない。

「見る者を石化させる、魔眼か……？ 伝説だとそうだったよな。英雄、ペルセウスは魔眼を

恐れ、鏡の盾でメドゥーサの姿を直視せずに、首を切り落としたって」

「しかし彼女のクラスは騎乗兵です。ならば最大の攻撃はそれを象徴する宝具に違いありません」

「宝具を複数持っている英霊か」

それは非常に厄介だ。

先日のセイバーとアーチャーの激突を思い出す。

セイバーは全ての能力においてアーチャーを圧倒していたが、それでも最終的に俺たちは負けた。

桜のおかげで首の皮一枚繋がったが、そんなのタナボタで転がり込んできただけだ。

ヤツがセイバーの風王結界の竜巻を吹き飛ばした攻撃は、自分の宝具を自爆させるような無茶苦茶な使い方——あの攻撃でヤツは持っていた宝具を一つ確実に破壊しきっているだろうに、躊躇無く繰り返し出してきやがった。

だとするならば、いまだ正体の分からないアーチャーも宝具を複数所持しているタイプだろう。

宝具は英雄を象徴する強力な概念武装だ。

それを暴走させ自爆させれば、中にこめられた魔力は絶大に吹き荒れ、ありえない攻撃力を生み出す。

ヤツのそうした一撃は、直撃を食らえば原型を止めないほど破壊し尽くされる。そんな使い方をされた宝具はどんな物であつても、危険極まりない威力を秘めた強力な爆弾のようなものだ。

でも本来は自爆なんて使い方をする英霊が居るはずもない。

宝具を複数所持しているというのは、それだけで英雄の格を示しているが、どれもこれも英雄だった頃の自分を象徴する、いわば身体の一部のようなものだ。

幾ら破壊力があるからって、自己の象徴たる宝具を一回きりの使い捨てにするようなやり方なんて選べるはずもない。

その点でアーチャーは、それを実行できるという他に例をみない性質のみならず正体の不明さまでもが他の追隨を許さず群を抜いてる事になる。

それに彼女の宝具が魔眼なら自爆させるような無茶苦茶は出来ないだろうが、それでも切り札が複数あるというのは非常に強く、そして敵対する側には脅威になる。

ライダーも生身の激突ではセイバーと比肩しうるほどではなかったが、いざ宝具を使われたらそれは分からない。

「……宝具を使う前に倒せってことか」

重ねてライダーは学校に結界まで張っている。魔術も使ってくるかもしれない。

「それが最上です。……ですから、作戦を立てるならそれに適したものでなくてはならない」



「宝具を使う暇も与えず、できれば反撃すら食らわずに倒せる手段……ライダーを失えば慎二は無力化するだろうから、遠坂の時とは違ってマスターの方は放っておいていい。でも正面から行くと逆上した慎二が桜に何をするか分からない……キャスターに先行してもらって引き離してもらおう？ でもダメだ、誰であろうとサーヴァントが来たらきつと即座に結界を使う……」

全てを満たす、そんな都合のいい作戦があるだろうか？

——いや、ある。囷に適した人物がいて、攻撃力を持った者がいて、なおかつ敵に知られていない伏兵がいる。条件は整いすぎている。ならば、選ばない理由の方が存在しない。「まずは俺が囷になる……時間を稼いでライダーを引き付けるか慎二の気をそらすから、そこを叩いてくれ」

二人とも分かっていたのだろう。

危険であるとセイバーに反対されたが、成功する確率は圧倒的だ。幾つかのやり取りの後、最終的に同意してくれた。

§

「グ、ギ……ッ！」

既に噛み締めた歯の軋む音か、身体が軋む音なのか判別がつかない。相変わらずライダーは素手で俺をいたぶっている。

一撃一撃が早く、そして重い。

どこが手加減してるとだっけくらい、素手で身体を引き裂かれそう――。

でもそれは幻想だ。

まだ俺は死んでいない。

それこそが、彼女が手加減している証拠に他ならない。

けど少し足元がふらついた。

「ほらガンバレよ。女相手にちゃんと手加減して貰ってるんだから、楽なもんだろ？ でもすぐには倒れるなよ。僕が満足する前に気絶なんてしたら、足りない分は桜に支払ってもらいな」

「く――そ、お前ふざけんなよ……。サーヴァント相手に生身だの倒れるなって。お前何がしたいんだ」

「そんなの決まってるだろ……。この僕は、お前がぶちのめされる姿を見て満足したいんだよ――っ!!」

慎二の激昂と共に、止まっていたライダーの姿が跳ねる。

殴られつづけた両腕は既に使い物にならない。

痛みに意識が飛びそうになり、魔術の維持が困難になってきた。

「っ——」

それでも顔のガードを緩めるわけにはいかない。

全力で魔術を編み上げ、身に付けてる物を片っ端から強化してダメージを減らす。でも、剥き出しのままの顔を殴られたらそこで終わる。

強化してなお感覚がなくなっていく両腕を見れば一目瞭然だ。もし強化が切れた生身の身体を全力で殴られてもしたら、腕だろうと足だろうと付け根から吹っ飛んでいるに違いない。

「——ハ」

そんなの手加減されてる今だって何も変わらない。

服だけじゃ足りない。無防備な身体も少しでも硬くしないと、どこを殴られたって変わりはしない。

ドゴ——ツと、素手で殴られたとは思えない一撃にたたらを踏む。

ライダーの腕は玄翁と一緒に、堅い木を削るように、一撃一撃で身体を支える何かが削り取られていく。

——顔と、頭だけは……。

セイバーが反対するのも分かる。俺一人でライダーを引き付けるなんて無茶もいい所だ。作戦の勝算は確かに高いが、油断すると俺から先にあっさり逝きそうだ。

「あ——っ——」

ライダーは無機質な、まるで機械じみた動作で攻撃を繰り返して来る。

ガード外すとか隙間を狙うみたいな打撃の技なんて、人間相手には不要とばかりに使ってこない。

それどころか、相手の防御とか隙とか、そんなことに気を止めている様子すらない。

ただ、目の前のサンドバックを無造作に殴ってるに過ぎない。一定の動きをするだけの機械を前に——。

「ッ——」

俺も動かなくなってきた両手を上げ、ただ頭をガードするだけに専念した。

ライダーの拳は見えない。見て防ぐなんて元から出来ないのだ。反撃する機会は必ず来る。だから、そのためにも意識だけは失うわけにはいかない、顔と頭は防がないと……!!。

ガードだけを上げ、他の部位は無防備に付む俺をみてライダーはどう思ったのだろうか。頭だけは——と守った両腕にくる衝撃がない。

「っぐ——」

代わりに守りのない胴体を狙い始めた。

一発一発がハンマーのような重い攻撃に、喰らうたびに後ろに後ろにと後退させられる。

——ここは屋上だ。あまり後に下がるとそれはそれでマズいことになる。

胴体を貫くような一撃は、体内に重いダメージを残す。

それが狙いなのか、頭を狙ってはすぐ終わってしまうからか、押し込んでいくような一撃に自然と足が後退していく。

直後——。

「っ、あ」

抵抗しない人形に飽きたのか、抉りこむようなボディブローが腹に深々と食い込んだ。

呼吸が完全に止まる。

肺が圧迫されて、意識が遠のく。

膝から力が抜けた、そのまま前のライダーに向かって倒れこむ——。

「こ、んのお——ッ！」

全力で目の前にあつた腕——俺の意識を刈り取ろうとしたライダーの腕に縋り、落ちそうになる膝を止めた。

「あはッ。ははは！ いいぞ衛宮。ゴキブリみたいなしぶとさだ！」

慎二は笑っている。

——いつの間にか慎二や桜と距離が開いてしまった。  
後退しつづけた俺は扉付近にいた慎二達から遠く離れ、屋上のフェンスまでもう少しの位置まできてしまっていた。

今のは効いた。酸素の循環を止められた頭が今もクラクラしている。  
「まあ、結構楽しかったけどそろそろ飽きてきたな」

慎二はそろそろキメるらしい。

距離が離れて少し聞き取り辛い。

後ろのフェンスまでは五メートルも無いだろう。そして、そのフェンスの高さは二メートルはありそうな高い物だ。よじ登って逃げ出すなんて間に合わない。

それに、ここから地上までは十五メートルの高さに相当する。

集中が途切れたのか、どうでもいいことを考えつつづける。

こんな所まで追い込まれて、何ができるのかを思考する。

慎二はまだ何か喋っている。

そこに――。

「セイバーが結界に入りました。外壁を登ってきます」

「――え？」

「シンジは気付いていません……我慢強い貴方達の勝ちです」

ライダーの声が耳に入る。言ってる意味がわからない。

いや、それは俺の待ち望んだ内容で、だから言われなくても望ましい結果ではあるんだけど、それをライダーが教えてくれる理由がわからない。

何を——？ と聞き返す間もなくライダーが横に一步動いた。

手を振り解くのではなく、本当にただ位置をずらしただけ。

「いやあ、面白い余興だったよ衛宮。そろそろ本題に入りたいんだけど、今日呼び出した理由分かるか？」

「理由？」

「そうそう。僕はお前が学校に来るのをずっと待っていたのに、全然来ないんだもんな……。危うく主賓を逃す所だったよ」

「——何の話だ？」

確か電話口でもそう言っていた。

「お前に僕の力を見せてやるってことだよ——！ライダー。ブラッドフォートだ。それっから思う存分吸い取ってやれ」

「——え、兄——さん——!？」

桜がハ——と顔をあげる。

意味は良く分からないが、その言葉は酷く危険な感じがした。

—その中にいる者全てを溶解させる—。

キヤスターの声が甦る。

「……まさかっ」

そんなの待ってられるか……ッ！

なんとか慎二に駆け寄ろうとするが、膝がガクガクと笑って一歩も動いてくれない。

—このままじゃ、マズイことになる。

予感が急げ急げと騒ぎ立ててるが、全然言う事を聞いてくれない。彼女だけに任せてしまう

には無責任だ。俺の目の前にいる慎二をなんとかすればいいだけなのに——！

桜を助けるため、ただの時間稼ぎに徹していたことを失策だったかと瞬間悔やんだ。

しかし、

「おい。どうしたんだよ」

ライダーは黙したままだ。

—と、



「命令だ。答えろ」

慎二が苛立ちをぶつける。

猟犬には似つかわしくない、しぶしぶといった調子でライダーは答えた。

「今は使えません」

「……はあ？　なんだよそれ。このボンコツが。お前自分の道具も使えないっていうのかよ……！」

「……………」

間に合った……のか？

それとも理由が？

よく分からないが、ただ助かったんだということが理解できた。

「……なんなんだよ。このグズを気にしてるなんて、そんなつまらないこと言い出すんじゃないだろうな……？」

「くそ——くそくそくそ——！　つまらないよ。思いつきり興奮めな気分だよ……！　ほら、休憩は終わりだ。第二ラウンド開始だ。今度はもつと派手にいけ」

慎二の声と共に、ライダーは俺が掴んだ腕を振り払う。

今の言葉が嘘のように、黒い装束のサーヴァントは機械じみた動きで攻撃を再開した。

ガゴンと、骨が外れそうな勢いで後ろに押された。的確に急所を外し、フェンスにじりじりと押されていく。まるで助走をつけるように、後退する速度が上がっていった。

「——！」  
殴られた所の痛みは感じない——既に麻痺しているため、ただドカドカと押される衝撃しかわからない。

「そうだ……そのまま落としちゃえ！」

殴られる痛みは感じないが、既に溜まりに溜まったダメージが身体の中から痛みを上げる。ライダーは慎二の言うように、的確に俺を殺さず手加減して身体を壊しに掛かっている。

ドン——と、両手で思いっきり突き飛ばされた。

「もう時間切れのようです」

懐に入り込んだライダーが、俺の膝ほどの高さから見上げて言う。

その声に感情は見えない。

——が、それで知った。

今まで俺を殺さなかったのは慎二の意志じゃない。

手加減しろと命令されていたが、それだけじゃ絶対じゃない。

顔を狙わなかったのも、わざとガードの上から攻撃したのも、セイバーの接近を告げたの

も、フェンスの側まで追い込まれたのも、角度を調整したのも――。思考は一瞬。後は慣れたもう一つの手順を弾丸として送り込んだ。それに一番安心できる事がある。

彼女との距離なんて、もう俺にもわかつてる……！！

「――兄さ――、やめ――！！」

桜の絶叫が響き渡った。

絶望に彩られた声であっても、慎二は止める気配がない。

本来ならこのまま地面に落とされて終わりだろう――。

だけど、

「お前のせいで興さめしたんだ。きつちり殺して挽回しろライダー！」

ライダーの言葉の意味が、アイツには理解できなかったようだ。

再度の命令が響き渡る。

サーヴァントはそれに逆らえない。

瞬間、眼帯越しに俺を見やり、当然のようにライダーは攻撃に移った。直後竜巻のように身体を捻じる。

まるで倒立するかのように真っ直ぐ伸ばされた足が、今までとは比較にならない速度と威力で俺の胸を突き上げた。

息が完全に止まった。

身体が宙に舞っている。

ライダーの身体能力なら、人間を数メートル吹っ飛ばすなんて造作も無い。

フェンスの高さは二メートル。だから、それ以上の高度に突き上げられれば後は自然の物理法則が俺を支配する。

このまま十五メートルを落下して死ぬ。

……そもそも、人間の身体を吹っ飛ばすほどの一撃だ。本来なら胴体と下半身が亡き別れ  
していた所でおかしくない。

吹っ飛ばす前に風穴が開いてたつて不思議じゃないほど、致命的な一撃だった。

でも生きている。

生きて、こうして空へと吹っ飛んでいる。

あれだけ予告されて、タイミングを合わせられれば誰だって跳べる。

ただ真上に跳ぶだけでいいんだから、楽な仕事だ。

それに判断に迷いは無かった。

慎二の命令で手加減されたんじゃない、

ライダー自らの意志で、俺を殺さなかったんだから――。

「でも悪い」

せつかくの厚意だけれど、そのまま素直に受け取れない。  
俺の役目はまだ終わってないから、せめてもう一仕事しないと彼女達に顔向けできない。  
それにマスターの命令が届いていないなんてことはありえない。ライダーの意志で遅らせ  
たのか彼女が間に合ったのか分からないが、このままにしておくけない。

「投影——開始」

肺に残った最後の酸素を使い切る。

上がりつばなしたった撃鉄が振り下ろされた。

ガギン！ と叩きつけるような火花が散り、瞬時に回路が活性化する。

イメージしたのは、目の前のサーヴァントが持っていた武器——そう、鎖。

長さは五メートルあればいい。頑強であるなら越した事はない。

短剣の有無は問わない。

ただ俺の身体と繋いだ糸が一瞬でも存在していればそれでいい。

回路は驚くほどスムーズに設計図を流し込み、当り前のように魔術回路が活性化する。

無様に吹っ飛ばされ、見苦しく伸ばされた手の先と——。

「な」  
驚愕はライダーの物。

機械じみた彼女が漏らした、驚きという名の感情の発露。

その光景をライダーはどう見たのだろう——虚空<sup>ソラ</sup>から瞬時に生み出され、巻きついた鎖に拘束される自分の姿を。

しかし、いくらライダーの蹴りの衝撃とはいえ、二人分の体重を支え二メートルものフェンスを乗り越える威力はない。

不意を突かれた彼女は倒れるに止まり、体勢を崩しガシヤンとフェンスに叩きつけられる。投影により生み出された偽りの鎖はあっさり千切れ、俺の身体は大して勢いも殺さないまま屋上の外へと投げ出された。

弧を描いて跳ぶ体は、もうすぐ頂点に届く。

フェンスはとつくに乗り越えている。

後はこのまま十五メートルの下まで落ちるだけ。

この高さで勢いから落ちれば、どう足掻いたって助からない。

落下が始まる前の一瞬、屋上の様子が見て取れた。

慎二と桜は屋上の真ん中あたりにいる。ライダーはフェンスの位置から動いていない。

人間でも全力疾走したら数秒と掛からない位置だ。

でもその距離を慎二が逃げるには、地平線より長すぎる。

俺がポロポロになって稼げた時間なんて数秒にしかない僅かな物。

鎖を引きちぎったライダーが駆けつけても、もって五、六秒がいいだろう。

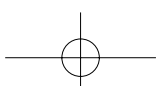
しかし、彼女を前に五秒の時間なんて永遠に等しいくらい長すぎる――。

ならばライダーは障害にならない。

だから後はお姫様を助けて大団円。

動き方を忘れていた肺に、むせながら無理やり空気を吸い込む。

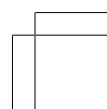
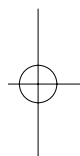
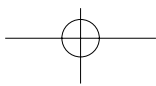
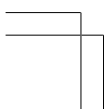
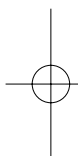
エンディングに向けて号令を下すべく、焼け付く肺を総動員して全力で叫んだ。



「セイバー!! 後は、頼んだ……!!」  
「お任せ下さい。我が主」

彼女が伸ばした腕に抱きかかえられる。

地上への落下が始まっていた身体は、校舎の壁を蹴って、駆け上ってきたセイバーに受け止められていた。



——目を瞑り外界を遮断し、内面にしばし漂う。  
突入まで残り一分を切っている。

このような策、無謀としか言いようが無い。その上キャスターの手まで借りるという——  
正直呆れた。

ただど断れなかった。

彼が危険に晒されるとも、共に戦う主として大丈夫だと信じたのだ。

思えば不思議な主だった。

聖杯戦争が始まり数度の戦いを経て、始めて会った時の頼りなさが抜けていく。そのくせ  
芯の部分は驚くほど普通の人間なのだから。

だから仕方ないではないか。

この状況に領きはしたがセイバー自身も呆れている。

思えばあの夜——柳洞寺でキャスターに止めを刺せなかった時点から何かがおかしくなっ  
てしまったのだろう。

サーヴァントはヒトではない。



それに掛ける情けは無用であり、特にキャスターは街の人々から精気を吸い上げていた事実がある。

そのようなもの……許容する事など出来はしない。  
——そこに彼女の持つ悔恨が隠れている。

犠牲は最小限に、戦果を最大に出す——どの誰が、そんな方法が優れているのだと思っ  
てしまったのか。

だからセイバーは聖杯を求めて戦いつづける。それが自身に託した誓いゆえに。

その目的から言うなら、この戦いは回り道だと思っている。——それに、キャスターとい  
う戦力を得たならば、彼女の力を用いても正面よりライダーを撃破するのが常道である。

感情とは裏腹にセイバーは自軍の戦力を正しく分析している。

ならばこそ、十二の大戦をことごとく戦い抜いてこられた事実がある——しかし、今は一  
介の騎士でありサーヴァントの身。感情と冷徹は相反したまま内包されている。

それ故、迷いが生じている。主の無謀な策にも乗ってしまっている。  
だから………仕方ないではないか。

あの愚直なマスターの願いを叶えてあげたいと、  
技術こそ未熟ではあるが、常に前を向いて歩み続ける彼を助けたいと。

自分の力量を知って頼れる騎士であると信頼しつつも、時折ただの少女として視線を向け

る彼の力になりたいのだと、一度でも思ってしまったのだから——。  
不思議な少年である。そして——ふと、あの魔術師も彼のそんな部分に惹かれたのかと  
思った。

目を開ける。

後、呼吸五つ——それで、彼の元に向う。

どのような場所、どのような障害があろうとも、最短距離で到達すると聖緑の瞳に宿して  
いる。

S

着地と同時にセイバーは地を蹴った。

片腕に抱えられたままの俺は、めまぐるしく回る視界と遠心力に振り回される。

「えっ」

今の状況が理解できないのか、慎二は間抜け面をして不思議に声を上げている。

瞬きほどの時間に距離がゼロとなり、セイバーは空いてる左手で慎二のナイフを弾き飛ば  
した。

「え……え？」

そのままくると甲冑を翻す。俺を放り出すと同時に――。

「離れなさい！」

キツイ後ろ回し蹴りを、ノータイムで慎二の胴体に叩き込んだ。

「グ――ホッ」

蹴られた慎二の身体が、まるで消えたか錯覚するほどの速度。

バアーンと凄まじい音が鳴り響き、屋上と校舎を繋ぐの鉄の扉に叩きつけられたのが分かった。

セイバーはそれを横目に確認し、剣を構えてライダーの追撃に入った。

彼女に捲きついた鎖はとつくの昔に千切れ跳んでいる。ただの魔力に戻った偽りの鎖はその痕跡も残さず塵に代わり、戒めより解き放たれたライダーの両手には、真なる彼女の武器である鎖の短剣が握られている。

セイバーを向え撃つ姿と速度は、俺を相手にしていた時の比ではない。

――だがこの戦いの結末はもうわかっている。

ライダーではセイバーに勝つことはできない。

「いつつ……結構乱暴だな。セイバーも」

そしてライダーもだ。人間一人を蹴り飛ばしてパスするなんて、絶対普通の思考回路じゃない。

セイバーとの距離が近付いたためか、あちこちに響く捻挫や打撲が癒されていくのが感じられた。——あの不思議な治癒能力は、今も変わらず健在らしい。うずくまったままの桜に声をかける。

「……桜は大丈夫か？ 辛い思いさせて、悪かった」

ぶんぶんと頭を振りおすおすといった様子で口を開いた。

「そんな——私なんて、全然——。先輩こそ……なんて——酷い——」

目立った怪我が無いことに安堵して、セイバーの向った先を見る。

同時に、ギンギンギンと立て続けに金属を弾く音がした。

以前とは逆だ。

あの夜は攻勢をかけるライダーを、待ち構えていたセイバーが両断したが、今度は違う。

ライダーは凄まじいまでの速度で後退し、攻撃を弾いているが、セイバーの猛追はそれに留まらない。ライダーがその身体能力に任せて直角と直線を織り交ぜジグザグに後退する。目で追いきれない程速さを増し、ただ漆黒の姿と翻った紫色の長い髪の毛が尾を引いて、黒

い流星のようだ。

それを追撃するセイバーは白銀の鎧が光を照り返し、白い流星となって追いつがる。フェイントを重ねて直角に逃げるライダーを、小細工は無用とばかりに地面を蹴って切りつける。

一撃ごと昼なお分かる火花が散る度に、ライダーは後ろに後ろにと弾かれる。たまたまフェンスを蹴って空に逃げる彼女を、

「!!」

ドンと、ここまで聞こえる強い踏み込みで、弾丸のように跳躍するセイバーが切り上げた。屋上の一部にヒビが入っている——いかに強い跳躍と威力なのかで分かる。

真下から迫り来る流星の前に、ライダーは短剣を十字に重ねて防御する。——しかし、ガギンツ とひととき大きい音を立て、半ばまで切り飛ばされた短剣と共に防御が爆ぜる。

勢いを止めないセイバーは彼女のことを追い越し——。

体ごと回転させるように振り下ろす不可視の刃が、横薙ぎにライダーの身体を切り裂いた。

凄惨な光景に桜が目を背けた。

鮮血の道筋を作り、背中からライダーは屋上へと叩き付けられた。

「無事ですか？ シロウ」

降り立ったセイバーは倒れ伏す彼女に目もくれず、こちらへと歩いてきた。

「ああ……なんとかな。助かったよ」

「私の進路と偶然重ならなければ、今ごろどうなっていたことか……。これだから、無茶な作戦だと言ったんです」

呆れたように肩をすくめる。

「ただセイバーは一つ間違っている。

先ほどのことを思い出す。ライダーに殺意は無かった。それどころか、俺の企みを見抜いてなお協力してくれたように思う。

「きっとセイバーが来ないなら、それはそれで別の結果になっていたに違いない。

慎二はただの人間でももちろんセイバーに敵うはずもない。だからセイバーに吹っ飛ばされたことは可笑しくも何ともない必然だが、あの時慎二はありえない程に油断していた。

絶対的な勝利を確信し、それこそ人質にとった桜の存在すら忘れていた。

その隙を作ったのは、何も俺一人の手柄じゃない。

「……いや、偶然って訳でもないらしい」

「それはどういふ」

話は後だと、片手をあげて制した。

何も桜の前で言う事でもないだろう。

「ク——ソッ！　なんだよ……なんなんだよオマエ！　衛宮！　なんでサーヴァント連れてきてるんだよ……ッ！」

「……慎二」

脳震盪を起こしたのか、ドアノブにすがるようにしてフラフラとしている。

血走った眼で俺達を睨みつけ、顔を歪めて激昂している——慎二にとっては騙された気分なんだろうけど、同情は出来なかった。

それを見るセイバーの目は冷たい。

「シロウは一人で赴いたはずだが？　後から私が追いついても、何も約定を破ったことにはなるまい」

「……ふざ……けるな——、僕が一人で来いっていったら、令呪でもなんでも使って置いてこいよ——ッ！　クソ——クソクソクソクソ——！！　これだから衛宮なんて信用できない——ッ！！」

「我が主を罵倒できる立場だと思えないが」

セイバーが一步前が出る。

「悪いな慎二」

身体の痛みはだいぶ楽になっていた。

力をいれて立ち上がる。まだ少し痛みはあったが、先ほどではない。むしろ、麻痺してい

た部分が甦ったため忘れていた痛みを思い出した感じだ。

「な、なんだ衛宮——。卑怯なことしたって認めるのかよ」

ゆっくりと横に振る。

少し悲しくなった。

元友人と戦うことがじゃない。慎二はそんなことも教わらなかったのだ。

「なんと言われても、マスター相手に手加減は出来ない」

魔術師であるなら死を覚悟すること、俺のような半人前だって知ってる事をコイツは知りもしなかったのだ——。

慎二に向けて一歩踏み出す。

俺の表情をどう受け取ったのか、慎二は何をするよりも早く、

「——ヒッ」

縫り付いていたノブをガチャガチャと回し、校舎に逃げ込もうとする。

「待て——！」

せめて一言、桜に謝らせないと気がすまない。

「ただど止める必要すらなかった。慎二が取り付いていた扉が、バーンっ！ と豪快な音を立てて中から勢いよく開かれた。」

額をしたたかに痛打した慎二が、ゴロゴロと転がって止まる。



「うわ……アレ、すごく痛いぞ……」

「いい様です。あの程度の痛み、シロウの味わったモノに比べれば僅かにしか過ぎません」  
校舎の中から悠々と出てくる赤いコート姿の女生徒。

それは俺たちの良く知ってる姿で、屋上の状態を見回し呆気に取られたように言った。  
「へえ……、もう終わっちゃったんだ」

額を抑えた慎二が、ずるずると離れていく。

屋上と校舎を繋ぐ扉の奥には、アーチャーを従えた遠坂凛の姿があった。

切り裂かれたライダーはうずくまっている。

消滅しない所を見ると、急所はギリギリ避けたいらしい——でも、あの出血量だ。セイバー  
やキャスターのように自分で治癒するか、マスターに癒されない限りサーヴァントだって戦  
闘不能だ。

「衛宮くんは全部持ってかれちゃったか……。それはさて置き——どうしてくれようかしら  
ね」

ボタンと鉄の扉が閉まり、遠坂はその前に腕組みして道をふさいだ。

屋上から出る唯一の逃げ道はふさがれた。ライダーが傷つき倒れた以上、彼女により地面

に跳ぶことは出来ないだろう。

ましてや慎二が一人で逃げるのは無理だ。ここから地上まで十五メートルの高さがある。運が良くて両足骨折。打ち所が悪ければ即死だ。

「と、遠坂まで……なんで……!」

狼狽する慎二に、遠坂はことさら溜息までついてみせた。

「桜に手を出した以上、私が黙ってるはずないでしょう? ——ああ、それと衛宮くんとは何でもないから勘違いしないでね。……ほら、こっちまで怖い目で見てるでしょ」

セイバーは油断なく剣を構え、遠坂を見ている。

その眼光は鋭く、油断なく彼女とアーチャーを伺っている。

「——ふざけるな」

「っ」

「ふざけるなよ! ——なんでどいつもコイツも桜、桜、桜桜桜桜あ——ッ!! ——こんなグズどくだっていいだろう!? 僕はマスターになったんだよ。……信じられない。なんで遠坂までコイツに拘るんだよ。何もせず、ただ黙ってみてるしか出来ないグズ野郎じゃないか! ——おまえが気にかけるなら、こんなグズじゃなくてマスターになった僕じゃなきゃいけないじゃないか……っ!」

「……そう。じゃあご自慢のサーヴァントに戦わせたなら？ 見たところ心臓も頭も潰されて  
いない。貴方が一人前のマスターなら今すぐにも治して戦わせなさい」

相手になるからかかって来いと、言外に挑発している。

「く——そ、この……言わせておけば……っ！」

俺たちからさらに距離を取ると、慎二は一冊の本を取り出した。

「あれは……」

公園で燃えたはずの、慎二の令呪——！

まだあったのか……。

「遠坂も衛宮も関係無い。まとめて喰ってしまえ！」

それが使い方なのか、本を握りしめてライダーに命じる。

返事は無い。

ライダーはうずくまったまま動かない。

彼女の身体は真紅に染まり、足元の血溜まりは今も版図を広げている。

「……やめろ」

「うるさい——！……うるさいうるさいうるさい——！……くそ——なんでだよ。なんで——！」

いま本当に助けが必要なのは慎二ではなくライダーだ。このまま治癒されることなく命令  
を重ねては、死期を早めるだけではない。

「やめろ！ それ以上やるとライダーが死ぬ……！ もう無理だ、諦めろ慎二——！」  
「うるさいっ！ コイツらがそんな簡単に死んでたまるか！ おまえは黙ってグズの面倒でも見てろ！ くそ、魔力が足りないっていうなら自分で吸い上げろ……っ！ ブラッドフォートだよ。ライダー……っ！」

遠坂の顔色が変わる。ハ——とあたりを見渡すが、いまだ目立った変化は訪れない。

慎二は命令を緩めない。

令呪の効果か、紫電に包まれたままのライダーが僅かに身体を起こす。

——が、それだけ。

何の効果も起こらず、立ち上がることもできずにいる。

一秒、二秒と立つが何の変化も訪れない。今のライダーは一刻を争う死に体だ。魔術を使うなんて出来ないだろう。

それは必然のことだったが、慎二にはそれが分からない。

苛立ち混じりの声が響く。

「……なんでだよおおおおッ!!」

「……………」

進退窮まったとはこのことだろうか。

慎二は血走った眼で周囲を見渡す。

空に、屋上に、地平線にとめまぐるしく視点を動かす。

何の変化も訪れないのが不思議だというほどに。

「足掻く人間は嫌いではありませんが、それも度を過ぎると見苦しいもの。——大人しく令呪を渡した方がよいのではなくて？」

空から声が降ってくる。

給水塔の上から高みの見物をする姿がある。

象徴たるフードを降ろし、杖を片手に持ったキャスターの姿があった。

## §

校舎に入る少し前。

「一度発動したら、結果内の全ての者を溶解させるでしょう」

「溶解……だと？」

「ええ。人間そのものを溶かし、血肉ごと魔力として取り込むための広域結界——それがあそこに仕掛けられています」

「……アイツ、そんな危険な物を使ったのか——！」

存在を第三者に知らしめる結界など三流だとキャスターは言う。  
だが、それと同時にあまりに強大な優れた結界は、姿を隠す必要すらないという。  
「それそのものが一つの世界を形作る。そこまで巨大なモノならば、誰にも知られずに魔力を吸うという結界とは、用途そのものが違うということ。作られた世界はただそこに存在し、異界に足を踏み入れるものを捕食するだけ」

「そんなもの、どうにかなるのか？」

聞いてるだけで物騒なシロモノだ。

俺なんかでは方法も分からない。それに対しキャスターは、

「どうすることもできません」

何とも頼りがいのある言葉をかけてくれた。

「……」

相手の手の内が分かっているのに、解除することもできないのはもどかしい。

「既に完成した魔術という式を、作られる前に戻すことはできません。別の魔術や上位概念で術式ごと打ち消すか、より大きな力で破壊し尽くすしかないでしょう。——ただ、発動を遅らせることはできます」

「……わかった。キャスターにはそつちを任せるよ。その間にこつちでライダーをどうにかしよう」

彼女は少し驚いた顔をした。

「簡単に言うのですね」

「なんでも。こういうのは本職に任せておけば安心だろ？」

「そういう意味ではないのですけど。……セイバー、彼の無茶無謀はいつもこういうのかしら？」

「——キャスターの知る通りだ」

なんとも酷い言われようだが、慎二の所に一人で行くことだろうか？

それを必ずしも納得しきっていないのか、セイバーの口ぶりは苦い。

「だけど、なんて言われてもこれが一番確率高いと思うんだから、後には引かないぞ」

「……わかりました。ですが他にも気がかりなことがあるので、念をいれて二三手を打ってみます」

それが、僅か数十分前のこと——。

§

「そっか——。衛宮くん。貴方本格的にキャスターを手を組んだのね」

遠坂の目に殺気が混じる。

今までは桜に手をだした慎二と、ライダーにしか注意がなかった。

セイバーの敵愾心を受けて警戒してはいただろうが、正面切って叩き潰そうとはしていなかった——つまり敵として認識していなかったことになる。

が、今は違うだろう。

遠坂の中でどこまでリンク付けされてるかは分からないが、少なくとも警戒の対象に入ったらしい。

「……なんだよ、なんでなんだよ——！ お前ら揃いも揃って——！ 立てよライダー！ 立って、こいつらを皆殺しにしろ——！！」

バチバチと紫電は音を立ててライダーの身体を包み込む。

——あのままじゃまずい。

ライダーに立ち上がる力はない。

このままじゃ慎二によって殺されちまう——。

「もう止める慎二」

拳を握る。

ぶん殴ってでも止めようと前に出る。

慎二に辿り付くより早く、



「だめ……っ！ 兄さん、もうそれ以上は……止めてください……!!」

桜の叫びが響き渡った。

「……桜？」

身体を抑え、うなされるように声を上げる桜と、

「な……桜。お前……!?!」

あの夜のように、慎二の本がひとりで燃え尽きていた。  
直後……。

「!」

ゴウ——と吹きさらしの屋上に風が渦巻く。

それは瀕死だったはずのライダーと——俺のすぐ側の桜から吹いていた。

「嘘……。これが、ライダー……?」

遠坂が身構える。アーチャーが一步前に出て、立ち上がるサーヴァントを睨みつけた。  
彼女は両の足で立っている。

セイバーに切られた傷がない——完全に癒えている。

遠坂の驚愕は、そのまま俺たちと共通になる。

「なんだ……これ……!」

あの夜と、そしてさっきまでのライダーはただのサーヴァントだった。敏捷こそあったものの全ての能力でセイバーに劣っていた。向き合って肌に突き刺さるような威圧感もなく、秘められた魔力も人間を遥かに超えているが、今まで遭遇したどのサーヴァントにも見劣りする。だけど――。

「これは、違う……！」

セイバーが油断なく剣を構える。

先ほどとまったく別の存在だと感じ取っているのか、無造作に立つだけの彼女に、慎重に間合いを測っている。

「シロウッ」

「!?」

ライダーが跳んだ。

方向は――俺！

何の助けにもならないと知りながら、慌ててしやがむ。

しかし、予想したような攻撃は来ない。

ライダーは俺を飛び越すと、桜を連れてさらに距離を取った。

入り口のアーチャーとも、俺の側のセイバーとも、給水塔のキャスターとも離れた位置に一足で降り立つ。

そこに最も近いのは……。

「な、なんだよ——。誰が桜を連れて来いって命令したよ」

「私は誰の命も受けていません。サーヴァントとして主を守っただけです」

「な……なんだと！ お前の主はこの僕だ。お前が守るならこの僕でなくっちゃ——」

「……シンジ。令呪は主の身体にあらわれるもの。私はその身に聖痕を持たないものを一度としてマスターと認めたことはありません」

「何——」

「偽臣の書が失われた以上、貴方にはもう付き合えない」

そうして慎二を一瞥し、背を向けた。

ライダーはもう慎二に注意を払っていない。付き合い切れなと言った通り、彼女が振り向く事はもうないだろう——。

そして、慎二に背を向けたということは、俺たちと正面から向き合ったということだ。

戦わなくてもこうしているだけで力が分かる。何も知らなければ足が下がりそうな威圧感が突き刺さる。

あれが本当のライダーか……。

—— 宝具を複数もてるということは、英雄の格を表している。

なるほど、確かにその通りだ。このライダーはセイバーに一撃で両断された時とは違う。相対するなら全力で戦わなくてはならない強力なサーヴァントだ。

「……そう。そういうことだったの」

「おかしいと思ってた。魔術師として衰退した間桐の人間に、既に魔術回路は存在しない。だから間桐の人間は絶対にマスターになれないはずだった。サーヴァントを召喚できるのは魔術師だけだもの。ただの人や素人がマスターになる例外なんて、そんなに繰り返し起こるはずがない。なのにライダーは召喚されて間桐の人間がマスターに選ばれた」

「推測の通りです。アーチャーのマスター」

何かを納得したような遠坂と、ただ俯いている桜の姿が目に入った。

遠坂が何を言いたいのか、よく分からない。

「私は間桐臓硯がライダーを召喚して慎二に使わせていたんだと思ってた。……でもそんな手間をかける必要ないわよね。間桐には、もっとマスターに相応しい人間がいるんだから」

「私は貴女の腕を確認した時、令呪はなかった。それで安心してしまっていたんだけど、その時既に権限委譲していたってわけね」

「遠坂……、何を言ってる」

「すごく簡単な話よ。今の間桐家においてもっともマスターに相応しい人間がいるんだから

遠坂はライダーを見ていない。

その視線の先にいるのは――。

「間桐の正統な後継者。今代の魔術師は貴女だものね。桜」

ただ俯いている桜を見ていた。

「な――」

その答えは、俺を打ちのめした。

桜と遠坂を交互にみて、今の言葉の意味を考えるしかできない。

ただ人質になった桜を助けようとして、慎一と戦いにきて――どうしてこんな事になって  
るのかそれだけしか考えられない。

「合呪の譲渡――か。間桐慎二の命令に従うように、とでもいう命令かな。権限を譲渡する  
事によって、ライダーは慎二のサーヴァントになり、貴女はマスターではなくただの魔術師  
になる」

桜は俯いたまま、体を小さくしている。

ライダーの後ろに隠れそうなほど縮こまった姿は、俺にだけは知られなくなかったと謝罪

しているようにみえた。

そこに、

「くそ、もう一度だ桜！ もう一度僕に支配権を譲れ！」

慎二がすぐるように駆け寄った。

「……………」

「おい、何黙ってんだよ！ おまえ、戦う気ないんだろう？ マスターになるのさんざん嫌がっていたから、僕が引き受けてやったんじゃないかよ！ それを今さら、何いい子ぶってんだよ……………」

桜にむけて拳を振り上げる。

それがはつきりと分かったが、俺が止めに行く必要はない。

駆け寄ろうと思うより早く、振り上げた拳を止める手があった。

「ライダー……………！ お前、僕に逆らうのか——っ！」

「貴方は私のマスターではありません。我が主に危害を加えるならば、敵として排除するだけの存在です」

「な……………に……………？」

「係累の者といえサクラに行った数々の暴言、忘れてはいません。……………しかし、立ち去るといふのであれば見逃します」

ライダーが慎二の腕を放す。

掴まれた部分を抑えて、よろよろと下がった。

「お、オマエ……。僕にそんな口を聞いていいと思ってるのか。絶対に後悔させてやる。僕のサーヴァントに戻った時にどなるか思い知らせてやる——！」

怒りに染まった目で桜を睨みつける。

「桜——っ！ もう一度だ。もう一度本を作れ！ はやくしろこのノロマ……っ」

急げとばかりに桜を責めたてる。

そこに遠坂が冷徹に言葉をくださった。

「無理よ」

「なに……？ はは——そんなことあるものか。令呪は後一つ残っている。もう一度チャンスがあるってことじゃないか」

「そうね。魔術師でもない人間にサーヴァントを使役するなんて出来はしない。それを唯一可能にするのが令呪による権限委譲だった。だからこそ、無理なのよ。令呪は後一つしか残っていない。……それを使いきって本を作ったら、今度こそライダーは止められない。彼女は貴方の本に従っていたんじゃない。桜の持つ令呪の縛りで命令を聞いていたに過ぎない」

「く……………」

「ライダーも言ったでしょ？ 偽りの本ではマスターと認めないって。最後の令呪が無くな

れば、本なんて作ったって何の強制力にもならない。命令したとして、今みたいに燃えて終わりでしょうね」

「じゃ——じゃあ、何か……！ この僕は——」

「そう。もう二度とマスターになれない。それどころか、借り物の令呪でしかサーヴァントを扱えなかった貴方は、最初からマスターなんかじゃなかったのよ」

そこで遠坂は、ふっ——と溜息をついた。

話を聞きながら、漠然と思っていた。

——葛木もただの人間だった。

しかし、キヤスターは彼を今も主として認め、慕っている。今は一時的に手を貸してくれているが、それはキヤスターの厚意に過ぎないと分かっている。

ならばこそ、ただの人間でありながらキヤスターと関係を築けた葛木はマスターに相応しいのだろう。

サーヴァント達も元は人間だ。誰にしても感情があり、望みを叶えようと戦っている。話せば分かるやつもいるし、意思疎通が取れるならヒトとして信頼関係も築けるだろう。

しかし、慎二はそれが出来なかった。

ライダーを道具としてしか扱わず、本来のマスターである桜を虐げた。



令呪は失われ、ライダーにも見捨てられた。

マスターとしての間桐慎二は、これ以上ない程に終わっていた。

遠坂は続ける。

「……でも、もう満足でしょうか？ サーヴァントを使役するなんて聖杯の助けがなければ一流の魔術師にだって出来ない。努力や才能で追いつかない領域で好き放題できた訳だし、魔術師ごっことしては上等のはずよ」

言葉突きつけられるたびに、間桐慎二という存在が罅割れていく。

「……だ……だ……？ 僕のやっていたことが子供の遊びだともいうのか……っ!!」

どこか祈るような叫びだった。

そうじゃない、お前はマスターだったと誰かに肯定してもらいたいと思う、慎二の願望だ。それを遠坂は

「違うかどうかは、本人が一番良く分かっているはずだけど？ ——もともと、他人に迷惑かけてるんだから遊びにしてはタチが悪いけどね」

一言の元に切って捨てた。

救いを求めるように桜を見る——彼女は俯いたまま慎二を見ていない。

視線を彷徨わせ、遠坂と、俺と——居並ぶサーヴァント達を次々に見る。

この場にはライダーの他に三体のサーヴァントがいる。絶望的な戦力差は火を見るより明

らかだ。

偽りとはいえマスターとしてサーヴァントの力を揮っていた慎二に、それがわからないはずもない。仮に再びライダーを使役できたとして、いかな慎二といえどこの場は引いて終わりだ。

ライダーのマスターが桜であるというのは驚きだったが、ある意味好都合といえた。

桜が俺たちと敵対する理由なんてないからだ。

俺と遠坂と、居並ぶサーヴァント達——それから最後にライダーを見て、乾いた笑いを浮かべた。

「は——ははは——はははははははは。そうか……そういうことか……」

自嘲めいた笑いが響く。

それを耳にして、桜は顔を上げ慎二をみた。

「兄さん……？」

「すまなかつたな。桜。今まで迷惑かけて」

一転して、口調は穏やかだった。

まるで憑き物が落ちたように。

「やっぱり、僕には才能がなかったんだろうな……親父たちの子供なんだから当然か。あの爺には失敗作扱いされて、お前には同情されていた。ライダーを与えられたのだって、いい

よりに乗せられて踊っているだけの道化に過ぎなかったんだ……。最初から我俣なんて言わず、お前の好きなようにやらせていればよかったよ……」

「……」  
「そうだな。こんなの僕なんかじゃ勤まりつこなかったよ。は——ははは——。そんなの分かっていたさ。僕はどう足掻いても魔術師には成れない。そしてマスターはやっぱり魔術師が相応しい。出来そこないの僕じゃ、元から無理だったんだ……」

「兄さん……そんな……」

これで終わった——。

「いいんだ。気にするな桜。こんなのは遊びだ。遠坂が言うように、才能のない僕にはごっこ遊びしか出来なかった——それなのに、今まで誤魔化していただけなんだ。……間桐の後継ぎはお前だもんな。僕がしやしやり出る事はなかった」

「兄さん、もう……」

もうこれ以上言わなくていい。その必要はないと、桜は首を振った。

幾つか抱えていた問題があったが、最も身近な危惧だった慎二の件が片付いた。

ライダーが桜のサーヴァントとして機能するなら、これから戦うことももう無いだろう。セイバーとキャスター、それに遠坂とアーチャーを見る。

アーチャーはどうか分からないが、遠坂は積極的に桜たちを滅ぼそうとは思っていない

だろう。

だから、これでもう終わり。

そのはずが――。

「ああ。わかっているわかってる。だからさ、桜。――続きはお前がやれ」

「――え――」

「慎二……！ アンタ――」

本気か？ 慎二のやつ――！

桜に言い放つと、すたすたと、屋上から出るための扉に向かって歩いていく。

「嫌です――！ 私には出来ません……やりたくも、ありません……！」

ドアノブにかけた手が止まる。

振り返る表情は石膏のようで、感情が見えない。

慎二は良くも悪くも表情が豊かだ。だからこそ、それが不気味だった。

「セイバー……！」

どうする？ と問い掛ける。

桜の返事一つでライダーが敵になるかどうかが変わる。桜なら慎二のような無茶はしないだろうけど、既に桜を助けるという目的は失われている。

だからといって引き上げてしまうなんてできるはずもない。この場で彼女の選択を見守る

しかなかった。

扉を向いたまま、慎二は不思議そうに言った。

「お前まで、僕に逆らうのか……？ いつも、僕に従ってたじゃないか」

「嫌です！ もう止めましょう。それに、兄さんだって約束をやぶったじゃないですか」

「約束？」

「先輩に酷いことしないって、それなのに……！」

「そっか——」

ようやく——慎二は桜を見た。

桜は顔を背けている。慎二の言葉に迎合しないと、全身を持って拒否していた。

「いいよ、もう。おまえ死んじやえ」

「バキン——と硝子の割れる音がした。」

「——うあ——っ！」

桜が倒れる。

足元から力をなくし、冷たいアスファルトに蹲る。

「ははは——！ じゃあな桜！ どうせいつかはそうなってたんだ。早く楽になったほうが幸せってもんだらう。恨むならそんな身体にした爺を恨めよ——！」

身を翻して逃げていく。

扉を開け中へと入り込もうとする――。

「な――っ！ ふざける――な――！」

俺より早く飛び出した影がある。

意を汲んでくれたセイバーは一足の元に距離を詰め、先と同じように慎二を蹴り離した。桜はガクガクと身体を震わせ、蹲っている。

何かの薬品が詰まっていたのか、耳飾が割れて顔と身体に緑色の液体が散らばっている。

――桜の震えはもはや痙攣と呼べるものじゃない。

瘡のように震わせ、崩れ落ちる砂上の城を連想させる。

「桜――！」

慌てて駆け寄ろうとするのを、

「たわけ――！！ 迂闊に近付くな……！！」

アーチャーに腕を掴まれた。

「貴様！ アーチャー……！！」

今にも飛び掛ろうと剣を構えるセイバーにむけ、俺を突き飛ばした。

「早く離れる。下手に糧を与えては戻れなくなる……！！」

「なんだよそれ――？ お前、一体……」

辺りは一見して何も変わっていない。

ただ殺気だったアーチャーに押されて、一步引いた。

そこに――。

ギン――と強く金属を弾く音がした。

「ひときわ強く跳ね上がったライダーが、短剣をキャスターに向け切りかかる。

ライダーの攻撃を術で防いだのか、キャスターの周囲に魔力の壁が浮き上がった。追撃を重ねるライダーの攻撃を、キャスターの周囲に展開した魔力の壁が弾いている。

ここぞとばかりに猛攻をかけるライダーを、翼のように黒衣を広げ空中へ逃れることで避けた。

ライダーに浮遊能力は無い。

空へと逃げる相手が射程から外れることで、重力に囚われて地に降り立つ。そこに、ローブを翼のように広げたキャスターが屋上に向けて杖を構えた。

地上から短剣を向け、ライダーは鋭く言い放つ。

「早くしないと手遅れになる……そのためには貴女が邪魔です」

何故傍観していたキャスターに敵意を向けるのか分からない。

「手遅れだというのなら任せればいいだけのこと。少しは他人を信用してみてもどうですか？」

「それは、貴女にだけは言われたくない言葉です——！」

再び、ぐいっと手を引かれる。

目の前には焦りを浮かべるアーチャーがいる。

「答えろ。キヤスターが細工したな？ 何をした？」

詰問に言葉が止まるが、そんな場合ではないと思いついた。

「よくは知らないが結界の発動を遅らせている」

「小僧のやることにしては忌々しいが妙手だ。さすがはギリシヤの大魔女。このような芸当、あの女にしか出来ない」

「一言多いヤツだな……。それより一体どうなってるんだ。ライダーのやつ戦い出したぞ……！」

「結界を発動させて、桜に魔力を与えるつもりなんでしょう……。早めにライダーを止めないとマジイことになる。アーチャーも行って！」

「……くそ。桜を助けるために今度はライダーを取り押さえろってのか……？ セイバー、頼む！」

「しかし——」

刃を交え、窮地に追い込まれた敵を前にセイバーの迷いももつともだ。

「今は休戦だ。いいよな遠坂？」



「え——？　いいわ。こうなったら私としても衛宮くんなんかよりオオゴトだし」  
「そういうことだから大丈夫だ。いつてくれセイバー」

決断したセイバーは早い。  
額くと同時にライダーに向けて切りかかる。  
同時にアーチャーも動きだした。

「!!」  
ライダーの焦りが傍目からでも手に取るように伝わった。  
目の前のセイバーより、桜に向ったアーチャーに目を向ける。——が、全力で切りかかる  
セイバーはそう易々といなすことが出来ない。  
しかも——。

「、——」  
上空のキャスターの周囲に、次々と魔方陣が浮かぶ。  
「本気か——!?!」  
バチバチと唸りを上げる紫電と、集まっていく魔力を見ればわかる。  
あんなの直撃したら屋上なんてひとたまりもない——!  
「キャスター——!」

「——そのままでは貴女のマスターは自滅します。いつそ手を下して差し上げましょう。——ええ、それが慈悲というものですもの」

魔女然とした冷酷な言葉に、呆気に取られた。

くそ——どうしたらいい？

あの魔力なら確実にライダーを倒せるだろうけど、俺たちごと巻き込んで校舎を吹っ飛ばすに違いない。

それだけ桁違いの魔力が魔方陣に集まっている。

俺が魔方陣一個分の魔力を溜めるとして、どれだけの月日が必要になるだろうか。それがキヤスターをぐるりと取りまくように十二個存在している。

アーチャーには考えがあるらしい。ならば桜を助けられるかもしれないが、ライダーを倒す為にキヤスターが桜ごと手を下すんじゃない意味がない。

セイバーにキヤスターを止めてもらうようにする……？

そんなのナンセンスだ。キヤスターはここにくるまで俺を助けてくれた。今もキヤスターが結界を止めているならばこそ、物騒な事態には陥っていない。

そんなのただの同士討ちだ。

「どうする……」

思わず迷いが洩れる。

見上げると――。

「……………」  
キャストと目があった。

水青の髪を風に流し、杖をまっすぐライダーに向けたまま――しかし、視線はこちらを見ている。

その眼は鋭く、ただ真摯な眼差しだった。

――何か真意があるのか……………?

自分を信じると告げるその眼に、

「――」  
俺はまっすぐ頷いた。

その時――。

ふ――つと、キャストが微笑んだ。

何の打算もない笑顔だった。

信じると決めたのが嬉しいのか、いつもの大人びた諦観の笑みではなく、どこか子供っぽい――。

「――!!」

光が放たれた。

地にいる全ての者を焼き尽くさんとする光の柱は、しかし直撃を受けたはずのライダーに何の損傷も与えない。

「抵抗された——？」

疑問は一瞬、砕け散った光りはそのまま残留し、ライダーの身体にまとわりつく。

まっすぐに上空から飛来するキャスターは、手に短剣をもっている。

上空を見上げたまま固定化されたライダーは四肢に力をいれ、体に残っている魔力を弾けさせる。——硝子が砕け散るような音と共に、拘束が解かれ自由になった。

光が落ちる前に跳び退っていたセイバーが、再度間合いを詰める。

金属を弾く音と共に火花が散り、ライダーの攻撃が逸らされた。

キャスターの短剣は真っ直ぐ桜を向いている——あの剣は強力な契約破棄の呪いを秘めている。キャスターは桜の状態を初期化させるつもりなのか、そのまま最短距離を降りてくる。立場が逆転した。

セイバーはライダーを足止めしようと攻撃を仕掛け、ライダーはセイバーを抜くことが出来ずに切り結ぶ。

さかしまに、落下にも等しい速度で落ちるキャスターを前に——。

「キキ——キキ——手ヲ、カシテ——ヤろウ——」

蟲じみた声が耳に入った。

苦痛に喘ぎながら、桜が上を見上げた。

その目の前で、逆さまのキヤスターは停止している。

距離は僅か数十センチに満たない。吐息が聞こえるほどの距離を前に時間が凍り付いたように止まっている。

信じられないとばかりに目を見開き、その首を下に——胸元を見た。

本来なら、そこには空があるだけだ。

空中で不自然に縫いとめられたキヤスターの姿は、ビデオテープを一時停止させたようなように現実感を失っていた。

そして——。

先ほどキヤスターがいたフェンスの上、そこに奇怪な影があった。

背を丸めた姿は奇怪にして滑稽。

漆黒の布が揺れる。ライダーのような肌に張り付くような黒衣ではなく、キヤスターの

フードのような体そのものを覆い隠す、ローブじみた仕立ての布に全身が覆われている。顔にあたる部分に髑髏の面をつけ、洩れる哄笑がキヒキヒと轟じみた音を立てている。何よりも奇怪なのは、そのシルエットだった。

あまりの姿に、戦慄が走る。

風に揺れる漆黒の衣はその姿を覆い隠し、全体のシルエットを包み隠している。しかし、それでも頭の位置に比べ、衣から伸びた右腕が異様だ。

伸ばされた右手に、どれほどの長さがあるだろう。

給水塔に立つ姿は折りたたむほどに背を丸めている、折りたたんでなおともすれば俺と同じくらいに見える長身と、不自然な姿勢から突き伸ばされる右腕の長さ。

本来ありえない距離。ありえない長さをもって、遠く離れたサーヴァントを捕らえている。

長大な右腕の先、空間に縫いとめられたキャスターの姿が存在していた。

「な  
驚きは誰のものか。

奇怪なシルエットのサーヴァントが、ピンと伸ばされた右手の五指を鋭く握る。

苦痛はキャスターのものだ。

胸元には、ドクドクと脈を打ちつづける心臓があった。

「な——！」

セイバーの驚きは共通のものだ。

あんな所にサーヴァントなんて居なかった……！ そんなのここにいる全員が知ってる。  
その中で——。

「アサシン——！！」

最も早く動いたのはアーチャーだった。

地面を蹴り、跳ぶようにして切りかかる。

アサシン——とヤツは言った。

その名前に聞き覚えがある。

しかし、だとするなら何故キャスターを攻撃するのか分からない。

伸ばされた手を両断しようと、アーチャーが両の手に握った短刀を奮う。  
それより早く。

「キヒ——キ——キ」

ぐい、とアサシンがその手を引いた。

ブチブチと何かを引きちぎる音がする。

手繰り寄せるように折り曲げられる右手——長大な距離を経て、キャスターの胸元に浮かんでいた心臓はアサシンの手であった。

「キャスターは信じられないように辺りを、そして俺を見て——胸に空いた空洞を見て、ごふ——と大量の血を吐いた。」

ばさりとキャスターのローブが布切れと化した。

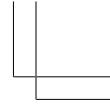
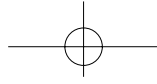
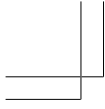
ひらひらと風に漂うそれは屋上のフェンスへと流される。彼女の体は既に半分が塵と化して崩れ行く。

それでおしまい。

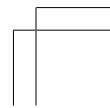
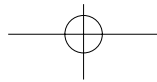
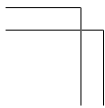
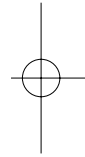
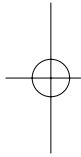
治癒能力を持つサーヴァントとはいえ、心臓を抉られて生きていられる道理はない。

俺が助け、共に暮らし、手を貸してくれると微笑んだ彼女は、別れの言葉を交わすことなく塵と化して消滅した。





103



6 / 鮮血神殿二  
/ 1

「そんな——!!」

キヤスターの姿が消える。

それと共に——視界が赤く染まった。

「ぐ——が——!!」

皮膚が——焼ける——。

結界を押し止めていたキヤスターが消滅したからか、天からすっぽりと学校の敷地を覆う赤いドームが出現している。

濃密な空気は血の匂いを放ち、冷たいはずのコンクリートが焼け付く汗を流している。

苦痛に身をかがめる俺の上で閃光が走った。

「キ、キキキキ——」

地面に棒のような短剣が突き刺さる。

あの黒衣の下に隠し持っていたのか、アサシンの投擲した短剣を弾き、滑り込む形でセイバーが身体全体で盾となる。

そこにアーチャーが追いつき、両手の剣を振るった。跳ね上がる右手の一刀と、切り捌く左手のコンビネーションは攻防一体となってアサシンを襲う。

防がなくては確実に両断される、致死性の一撃をしかし――。地を滑るような卓越した敏捷でかわしきっていた。

「ちい」

振るった剣の勢いを殺しきれないのか、アーチャーの身体が翻る。

背を向ける姿を好機とみたのか、後退と同じく慣性をもろともせず、アサシンは間合いを詰め――。

「キッ」

くるりと一回転したアーチャーの手のモノを見て、首をかしげた。

左手の剣は弓に、右手の剣はそれぞれの指に矢が添えられている。

「！」

それで敵対する者の名を思い出したのか、アサシンの動きが瞬間止まった。

引くべきか攻めるか、葛藤が身を縛り判断を迷わせる。

しかし、それは狩人の前で最も愚かな行為だということに、蟲の思考では気がつかない――。

五指の矢が重ねて添えられる。狙いをつけたように思えぬ射は、一息で五本全てを放っている。

アサシンの姿が流れる。

まるで滑車にでも乗っているように、真横にスライドする化生の動きを見せた。半分をかわしたアサシンに角度を変えて放たれた残りの矢が追いつがる。

アサシンがばさりと黒衣を翻す。

矢を絡め取った先には、一刀の元に切り捨てると踊りかかるセイバーがいた。

§

「くん。——衛宮くん——!!」

遠坂が呼んでいる……。それをどこか遠い気持ちで、うすぼんやりと聞いていた。

俺からもう一人離れて遠くから見下ろしている気分だった。

キャスターが死んだ。

葛木先生を失い泣いていた彼女。

セイバーと戦い破れ血に濡れていた。

ただ何も望まない、全ては失われたと語っていた。既に聖杯に望みなどなかったというの

に、俺の力となってくれた——。

ふと、ある朝道場の前で会った時のことを思い出した。

寒くはあつたが湿度のない穏やかな陽射し。

座して黙するセイバーを、眩しそうに見つめていた——。

僅か数日ばかりの短い回想は、驚くほど深く胸に刺さっていた。

「このお——！ しつかりしなさい衛宮士郎——！」

火花が出るような往復ビンタをくらい、瞬間意識がとんだ。

「っ」

「返事をしなさい！ 意識はある？ 既に持っていかれたなんてことはないわよね？」

鋭く遠坂が言う。

あまりに強く打たれ、衝撃に口が開けない。頬を抑えると熱を持っている。

意識は戻った。今も世界は赤く染まっている。

戦っているアーチャーとライダー、セイバーの追撃を逃げるアサシン。

一秒で状況を理解した。

感傷に浸ってる場合じゃない——。

「すまん。——もうだいじょうぶ——痛っ！」

喋っただけで喉が焼けた。

赤い世界は魔術によって生み出された異界だ。キャスターの言う捕食するための強大な結界が発動している。

幽世として彩られた一面の赤は、踏み込むものを溶かして喰らう得体の知れない世界だ。

「遠坂、これ——」

喋ろうとして吸い込んで——そのままむせた。

肺から空気を吐き出しても呼吸ができない。——いや、できるのだが吸い込むたびに霧のような濃密な何かが喉に詰まり、内側から焼かれていく。

自分で魔力を作り出せる魔術師ならば、まだいい。

しかし、ただの人間には本気でまずい。空気は酸よりも強く、その身を焦がす。

「放心するのは後。油断すると魔術師でも持つていかれるわよ——」

頷いて、気持ちを切り替える。

忘れるのでも、立ち直るのでもない。

人間としての衛宮士郎ではなく、魔術師としての衛宮士郎を再起動した。

「慎二が学校に仕掛けていた結界ね。もともと、マスターが桜になって威力が段違いになっ  
てるけど」

……確かに溶解とはよく言ったもんだ。このままでは骨まで残さず食われてしまう。

桜が倒れてから時間は僅か。

見れば、今も桜は胸をかきむしって苦しんでいる。

「――シンジを逃がさないでいてくれたこと、感謝します」

セイバーに止められた慎二は、今も倒れたままだ。

「そして貴方達も逃がさない。サクラが虫に食われる前に、その力貰い受けましょう」

「たわけたことを。主が変わっても性根はそのままか。これではあの魔女のことを笑えんぞ。今のお前よりは遥かにマシのようだ」

「貴方達も似たようなものでしょう。他人のことより、自分のマスターを優先している」

「そうか――ならばお互い、気兼ねなどする必要はないワケだ――！！」

アーチャーが疾走する。

再びライダーと剣を交えたアーチャーは、両の剣技を振るい尽くす。

「くそ――なんでこうまでして、戦いを止めないんだ――！！」

「仕方ないでしょう。このまま桜が外道に落ちるのなんて見てられない……！！ 同じ魔術師なんだから、そうなる前に止めないと」

「え……？」

外道に落ちるって、確か魔術の悪用をするヤツとか、魔術回路に振り回されて自滅するヤツのことだった……よな……？

「何で桜が」

「あの子、暴走しかかっている。慎二が何をしたのか知らないけれど、桜が魔力を求めて見境がなくなっている——！」

「慎二？」

「そうだ、セイバーはあのまま意識を刈り取った。ならば、原因を突き止められるかもしれない——。」

数メートルの距離に倒れ伏す慎二がいる。

「おい慎二——！ お前何を——。っ!？」

揺すった瞬間、その皮膚がどろりと滑った。

つるつるの石膏に張り付いた泥が滑るように、剥き出しの腕から皮膚が流れた。

それはコンクリートへ落ちると同時に、広がらずに吸い込まれる。

不自然に汗をかいている壁、地面。そしてまるで吸収されたような皮膚——まるで丸ごと

巨大な胃袋になったように、人間を溶解させるという、ライダーの結果——！！

「私たちが呼吸を止められたら酸素を欲しがるように、きっと桜も苦しんでる。魔力が無く

なって、他人のを見境無く吸いたがっている——そんなの、冬木の管理者として見過ごせない」

「見過ごせない——って、お前どうするつもりなんだ」

「……こうなったら、私にはあんなった魔術師を止めるなんて、一つの手段しか知らない。で



も、アーチャーには何か手があるみたい……だからアーチャーに聞いて」

「アーチャーに……？」

今もライダーと切り結んでる。

「そんなの無理に決まってる」

「——貴方の方は？ キヤスターの策は無いの？」

「いや——」

言葉に詰まる。消滅した彼女とは、別離の言葉を交わす暇もなかった。彼女には桜の原因がわかっていたのかもしれないが、俺がそれを今から知る手段はない。

それをどうとったのか、

「じゃあ、今のところ打つ手なしってことか。——セイバーを呼び戻して、加勢させて。アーチャーのヤツ出力が落ちてるみたい」

「出力が落ちてる……？」

先は一人でもライダーを圧倒していたアーチャーだ。

アサシンをセイバーが抑えているから、ライダーと一対一。それにライダーの戦闘スタイルは明らかに防戦に向いていない。

彼女の疾風のような敏捷は目で追うのも難しい。鋭い攻撃に防御の上から削られていくのは体験済みだ。

「ただ、それは攻勢において真価を發揮する。今みたいに桜を守りつつ戦うなんて拠点防御の戦い方じゃ、幾らスピードがあっても生かしきれない。」

「ならば何も問題ないはず。」

「……」

視線を戻すと、アーチャーは明らかにライダーを圧倒していた。

「一対一の状況は、先に比べればライダーにとつて有利に見える。しかし、それはアーチャーにとつても似たようなものだ。」

「足並みの揃わないセイバーとキャスターが共にいては、連携を取るところか互いに足を引っ張り合う。」

「敵対ではないが味方でもない第三者など戦場においても邪魔なだけだ。」

「——先はそこにライダーの付け入る隙があった。」

「ならばこそ、今の彼女は力で勝る相手に正面から不利な戦いを続けなくてはならない。このままじゃ、私も貴方も持たない——。早くライダーを何とかしないと……！」

「圧倒的有利なはずの遠坂は、刻一刻と過ぎる時間に焦っている。」

「力で勝るアーチャーを前に、焦る道理はない。ただ待てばそれでいいからだ。しかし——何故それなら、アーチャーはライダーを倒していない？」

「邪魔が入らず、上空のキャスターを警戒する必要もなく、ただ正面から切り伏せればいい。」

だけの戦いは、アーチャーにとって楽なものだ。

ならばこそ、既にライダーを倒して桜の元に達していなければならないのに――。

「まさか……アーチャーのヤツ押されてるのか……？」

結界内で時間と共にマスターの魔力を奪われつつける状況は、アーチャーにとっても不利なものだ。長引けばそれだけマズイことになる。

「アサシンの介入がなければ、さっきので全て終わっていた。サーヴァントが減るならそれで他のマスターにとっては利になるはず……！ それなのに絶妙のタイミングで妨害に入るなんて……アサシンのマスターも何考えてライダーに肩入れしてんのよ……！」

遠坂の苛立ちが聞こえる。

いろいろと疑問は尽きないが、確かにこのままじゃヤバイ。

――どうにかして、この結界を解かないと。

黒衣の暗殺者と相対する彼女に呼びかける。

彼女なら何とかできると、そう信じて――。

「セイバー……！」

## Interlude / 7 Silent ASSASSIN II

セイバーは主の呼びかけを聴いていた。

しかし、正面の黒衣のサーヴァントと向き合ったまま、動く事ができない。

「キキ、——キキキ——」

召喚の時に不具合でもあったか、それとも元来そのようなモノであったのか、アサシンのサーヴァントは満足な言葉を語らない。

不可思議な暗殺者は蟲じみたキキキイという唸り声を上げ、嘲弄するかのようセイバーの周囲を飛び交う。

数合の手合わせをするまでもなく、セイバーはこのサーヴァントの力量を見切っていた。

サーヴァント最弱と自嘲するキャスターではあるが、単体の能力で見るとすれば、それは間違っている。

目の前のサーヴアントこそ、真っ向から向き合ってはどの英霊に勝つことも出来ないだろう。

卓越した敏捷こそ目を見張るが、それとて全力疾走したセイバーを凌駕するものではない。物理法則から解放されたかのように地を滑る特殊な移動方法を持っているが、この屋上のような空間の開けた広い場所では意味をなさない。

仮にアサシンが脅威となるならば、森林や洞窟のような上下左右の空間を全て使える場所だ。

そのように限られた場所では、立ち並ぶ木々により剣の振るう範囲を制限され、木立を隠蓑として短剣を放つ。風切り音は葉のざわめきに掻き消され、闇夜よりなお深く暗殺者の姿を覆い隠す。

しかし、この場においてアサシンは地の利をもたない。

振り手を見せずノーモーションで放たれる短剣は油断ならぬが、投擲武器に対する耐性を持つセイバーはその全てを見切っている。

仮に何十、何百と放たれようと彼女をコレで倒す事など出来はしない。

しかし――。

く

力量差で言うならば、後ろのライダーとアーチャー以上の開きがある。

結界による吸収はセイバーの身を覆っている。そのため出力が落ちてはいるが、だからといってアサシンとの開きは埋めようがないほど。

それなのに、倒せない。

暗殺者は特化したサーヴァントだ。

剣の騎士が全ての能力に秀でているのとは逆に、彼は全ての能力で他のサーヴァントに劣っている。

しかし、ただ一つだけこのクラスのみ与えられた能力がある――。

「キヒ――キキキ――」

シユと、微かな風切り音がする。

翻る黒衣のどこに隠し持っているのか、唐突に放たれた黒い短剣をセイバーは一撃の元に叩き落した。

――あわせて二十八本。

これが、今まで叩き落した短剣の数である。

セイバーに投擲武器は通用しない。

攻撃が見えなくとも、彼女は風切り音と直感でもって全てを落とす。

ある程度の格を持った英雄ともなれば、見えない攻撃など大したものではない。ここに立っているのがキヤスターだとして、魔術耐性を持たず魔力で劣るアサシンが彼女の強力な防壁をただの短剣で突破するのは困難だ。

セイバーにしてもそれは同様だ。

盾を持たず剣一つとはいえ、既に予知の域まで達した直感を前に、ただの投擲短剣を防ぐ事など造作もない。

真に恐れる武器ならば、ランサーの持つ槍のように「見切ったとしてもかわせない武器」だろう。

彼の持つ槍は因果を捻じ曲げ、放たれた瞬間に既に命中した結果を作りだす。

必ず心臓を貫くという真名の通り、正体が判った所で防ぎようがない。

仮にあの槍に対抗するならば、

槍の魔力を上回る純粋な防壁を用意するか、

槍によって決定した運命を捻じ曲げるほどの強運か、

そもそも槍を使わせないか方法はあるまい。

それゆえ、アサシンの使う短剣は恐れるに足りない。

全ての能力において勝り、武器の通じぬ相手を前にアサシンがただ一つ勝っているこ

と。

それは――。

見えない投擲モーションを察知し、再び剣を振るう。

振り下ろすと同時に踏み込むが、既にアサシンは距離を取っている。

追撃しようと追いつがる所を狙い澄まし、短剣による攻撃を重ねる。

これが先ほどから繰り返されてる。

セイバーには短剣の投擲は何の苦にならない。

ただ暗殺者のサーヴァントは、後ろの衛宮士郎を狙う事でセイバーの動きを止めていた。

ギリギリと奥歯を噛み締める。

暗殺者はその名の通り、マスターを殺す事だけに特化したサーヴァントだ。

この場にいた全てのサーヴァントに察知させないほどの隠密能力を誇り、影となって襲い掛かる。

セイバーには効かぬ短剣の一撃とはいえ、人間であるマスターには致死性の攻撃とな



る。予備動作すら見せずに放たれる短剣は不可視となり、向き合っただけでお防ぐ事は出来ないだろう。

両断しようと踏み込む気配を見せると、短剣が主に向かって跳んでいく。  
ならば——と加勢に駆けつけようとすると、挑発とばかりに動きを止める。

アサシンとセイバーの力量差は絶望的で、このような消極的な戦いでは決して勝てぬが、今この場はライダーの作り出した鮮血神殿。

通常ならば衛宮士郎を狙う隙さえ与えず、神速の斬撃を見舞う事ができるというのに、セイバーは体に重圧を受けたようなプレッシャーを感じている。

枷を得てなおアサシンを上回るが、この状況下では攻勢に移ってなおマスターを完全に守れる保証がない。

そして結界は時間と共に、魔力がその生命ごとと喰われていく——。

——あの短剣とて無限ではない。いずれ手品の種は尽きて終わる。

しかしこうなってはアーチャーと役割を入れ替えることも出来はしない。

それに、間桐桜を救う手段を持っているのは今この場ではアーチャーだけだ。

間桐桜を切り捨て、見殺しにすればことは簡単だ。  
アサシンもライダーも正面から対峙すれば彼女の敵ではない。しかし、その選択肢を彼女は捨てていた。

主の矜持を見て己はその剣になると誓った。

助けると誓い、今も諦めていない主を前に何故自分だけ剣を折る事ができようか。

そして、動けぬ理由が他にもある。

セイバーはアサシンの宝具を見ていた。

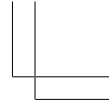
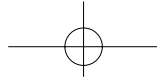
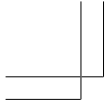
キヤスターの心臓が握り潰される一度だけが、それで絡繰を見切っている。

あの奇怪な右腕——あれもランサーの槍と同じく、放たれば避けられない個人に限定された致死性の宝具。

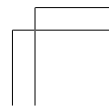
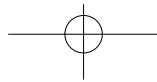
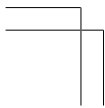
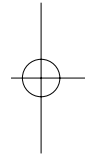
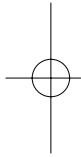
偽りの心臓をつかみ出す事で結果的に本当の心臓を抉り出す、世界の法則に干渉するタイプだ。

——背を見せる事は出来ない！

ランサーの槍を防いだこの身が、衛宮士郎の盾となり剣となると誓った身が、あのよ



うな下郎、あのような蟲に倒されることなど、決してあつてはならない。  
そして、ライダーを抑えんとそちらにむかえば宝具の向う先は己の主。  
暗殺者であるならば、サーヴァントよりマスターの始末を優先させるだろう。それが  
目に見えて分かっている――。  
だからこそセイバーは、士郎の呼びかけが届いてなお、この場から離れる事ができな  
かった――。



アサシンと対峙したまま、セイバーは動けない。  
状況はこれ以上無いほどに明らかだった。  
彼女が何も語らずとも、髑髏から洩れ聴こえる哄笑が物語ってる。

———また、か……!!

不意に沸いた怒りが突き上げ、身を焦がす。  
アイツはキヤスターを倒した。それに対する怒りももちろんある。  
だが今俺の身体を焼くのは己のふがいなさだ。

先日、中庭でアーチャーと戦った時も、力で勝るセイバーがアーチャーを相手に攻めあぐねていた。それは俺が足手纏いとなり、彼女の動きを制限したからに他ならない。  
そして今も同じだ。  
アサシンにセイバーを倒す力はない。

全ての能力で彼女に劣り、攻撃を見切られたサーヴァントが単独で戦う限り、撤退か死か  
のいずれかしかない。

それなのに、アサシンはセイバーの足止めに成功している。

その最大の矛盾の鍵が――。

「俺……か！」

状況は非常にまずい。

こうして立っているだけで、ザクザクと意識が削られていく。

このままでは、サーヴァントは大丈夫でも俺と遠坂は持たない……!!

「しっかりしなさい……っ。人間がサーヴァントに勝てないのは当たり前でしょう？ 暗殺者

がマスターを狙うのは当然。それだけがセイバーの隙だから。だったら悔やんでも仕方ない。

それこそアサシンの思うツボよ……!!」

「……くそ。その通りだ」

ならば発想を変えるしかないだろう。

状況は変わらない。今はセイバーがアサシンを抑えてくれていると考えるべきだ。

そのおかげで、俺はこうして殺されずにいる。

それなら――フリーとなってる俺に何ができる？

アーチャーとライダーは対峙したまま切り合い、拮抗している。

後どれだけ膠着が続くのか分からないが、どちらかが状況を動かすまで変わるまい——ならば、今この時こそ、俺に与えられた猶予と見るべきだ。

魔力が一秒ごとに削り取られる。

長引けば、体を動かす事も出来なくなる。

思考が加速する。体を突き動かす焦りが俺に何かしろと責めたてる。

——ライダーに切りかかる。

それがベストに思えた。

アーチャーとライダーの天秤は水平に吊り合っている。どちらかに僅かに傾けばそれで終わる危うい綱渡りだ。俺では彼女に二太刀も与えられないだろうけど、例え一度でも隙を作れるなら、それでアーチャーの勝ちになる。

取るに足りぬと見逃すならば、桜の元へと辿りつける。

ならばこそ、今すぐ実行しようとし——。

激しい瞳でアーチャーを見つめる遠坂の姿が目映った。

ダメだ——！

ダメだダメだダメだ……ッ！

思い出せ。ライダーはまだ奥の手を出していない。

そんな所に突っ込んでいつて何になる？ 俺では魔術を防げない。だったらそんなの無駄死にだ。俺は彼女が未だ隠し持つてる宝具を知ってるはずだ……！

「遠坂。ライダーは石化の魔眼を持つてる。くれぐれも気をつけて——」

「石化……？ なんて衛宮くんがそんな……いえ。石化。特例の魔眼を持つ英雄なら、ギリシヤの怪物がライダーの正体ってこと？」

「キヤスターの受け売りだけだな。——じゃあ、後は任せた」

「衛宮くん——！」

伝えるべき事は伝えた。

地面を駆ける——向う先は、アサシン！

セイバーとアーチャー、どちらに手を貸すかで見ると、本来ならアーチャーに向かうべきだろう。しかし、相手がこのまま手をこまねいていると仮定してだ。

セイバーは俺を守るが故にアサシンと膠着している。暗殺者を倒すにはマスターの居ない一対一でなければならぬ——。

アサシンは、その特化された暗殺者というクラスのセオリーに則り俺を攻撃している。

ならば、俺がアイツの攻撃を防げれば、その間にセイバーがきつと倒してくれる——！

「シロウ——!？」

話をしている余裕は無い。

セイバーに視線をぶつける。無茶ではあるが気付いてくれと願う。

「っ！——わかりました。今度はシロウの策に乗ります」

会話を交えながらも、彼女はアサシンから放たれた投擲短剣を弾いている。

この作戦——既に打ち合わせは済んでいる。

それはあの夜。うちでアーチャーと交えた時に彼らが同じ戦法を使ったから。

結局セイバーが宝具を使ったために、実行される機会は無かった。しかしだからといって無駄にはならない。そしてあの時より作戦の精度をなんとしても跳ねあげる。

俺はセイバーの足を引っ張り過ぎた。だから、なんとしてでも今度は俺が勝利へ導いてやる——。

「同調開始」

足に強化の魔術を叩き込む。

流し込むだけで、まだ使わない。最後の一足まで隠さなくてはならない。

——続けて。

「投影、開始」

ガギンと撃鉄を起こし、設計図を流し込む。

——先ので感覚はつかめた。

——否、投影はそれこそ手馴れている。後は現出させるための見本があればいい。



キャスターは、俺は投影というものを理解していないと言った——なら、きっと本来の使い方が別にある。

その意味はまだわからない。

が、無手でありながら無手ではなく、生身でありながら武装しているというのはきつと使える！

一つしかない強化では、サーヴァント相手に役には立たない。だから、なんとしても二つの投影を使うしか切り抜ける方法は存在しない——！

そして、この場に投影に最も適した見本があった。

ライダーと切り結ぶアーチャーを見る。その戦いぶりは眼に焼き付いていた。

ヤツの両の手に握られた幅の広い短剣——アレがいい。俺に使いこなせるかどうかは分からないが、手に馴染むと確信してる。

根拠なんてどうだっていい。俺の魔術回路がアレならいけると訴えている。だから、それに賭けて流し込んだ強化の魔術を発動させる。そして、あの虫ヤロウに向かって今一度、最後の跳躍を——！

「——キ」

アサシンへの間合いを詰めようと、最後に一度跳んだ。

強化の魔術による加速とはいえ、それでも目の前のサーヴァントのスピードには大きく劣

る。

当然のようにアサシンは交わり、滑り込むかのように俺の後ろを取る。

セイバーを追い抜いた俺はここにきて完全にフリーになっている。

表情を変えない髑髏が嗤う。

ヤツの目には、自暴自棄になったマスターが暴走したとでも映っているのだろう。

「全工程完了。投影終了——！」

間髪いれずに撃鉄を振り下ろした。

バチンと脳内で火花がはじける。流し込まれた設計図を具現化させようと、体内の魔術回路が唸りを上げる。

右手は甲を向けて心臓の下に。左手は額の上に、手の平を見せるように構えた。

——シュと風切り音がする。

いつ放たれたか分からない投擲短剣を視認することは困難に近い。音で分かるなんてサーヴァントの身体能力と反射神経でもない限りできっこない。

このまま脳髓と心臓を抉り出されて死んでいる。

致死性の威力を持った短剣は弾丸をも凌駕する。あっさり強化した服を貫き、皮膚を切り裂いて肉を抉る。アサインは勝利を確信した。マスターを失ったセイバーは恐れるに足りない——決着をつける必要すらない。撤退するだけで後は自然に消滅する——。

ガギンとアサシンの短剣が弾かれた。

きつちり額と心臓の急所を狙った投擲短剣の狙いは正確無比。鉄の鎧で守られていたとしても、サーヴァントの投擲はそれを突き破る。

握りしめた手に魔力が帯電する。

放たれた致死性の攻撃は、今だ薄っすらと存在する作りかけの双剣によって防がれていた。右手に生み出された干将は心臓を、左手に現出した莫耶は刃を下に向けて構えられ、額から両目、それと喉を守っている。

顔の前に剣を置いた事で、視界は大幅に制限された。戦うには不利な姿勢だ。急所は守られても他の部分は一切無防備。そしてこの構えから攻撃に移るには遅すぎる。

でもそんなの問題になんてなりっこない——！

「——キサ——マ」

二射目が放たれる。

ヤツは覚えてたのよう无理やり搾り出すかのように言葉が発する。蟲が偽りの発声器官を用いてるようで、聞いているだけで不快感がこみ上げる。

正確極まりない投射で投げられた短剣も、防いだ。ただ衝撃は一撃目と桁違いで、双剣が弾かれないようにと歯を食いしばって握りしめる。

セイバーの剣ならいざ知らず、アサシンの投げる投擲短剣は名のある宝具ではないただの武器だ。そんな物ではアーチャーの双剣は突き破れない。

そしてアサシンに許される攻撃はそこまで。

彼女が、それ以上の行動を許すはずも無い。

「ハァ——!!」

裂帛の気合で放たれるセイバーの踏み込みをかわすことは、出来なかった。

全力で回避したであろう敏捷は健在。しかし、彼の蟲じみた動きを持ってしても黒衣とその下の肉体を切り裂かれた後から跳び退った。

ならばそんなの意味がない。暗殺者は剣の英霊に敗北し、この場より撤退を余儀なくされる。

「——このお……っ！」

下がる黒衣に向け、手にしていた双剣を投げつける。

ぐるぐると回転する投影された剣を、アサシンは傷だらけの体でありながら猿の敏捷で避けた。

——すでに足を踏み外せば十五メートル下に落下するフェンスの上。手負いの暗殺者こそが窮地に追い込まれていた。

「セイバー……っ！」

止めとばかりにセイバーが追撃をかける。己の立場を理解したのか、黒衣の暗殺者はあっさり屋上から飛び降りた。

逃げた……？

いや、これでいい。止めこそさせなかったが、これでアサシンは抑えられた。返す刃でセイバーにはライダーの所に行ってもらおう。後は桜を助けてこの場は終わりだ！慣れないモノをした影響か、それともサーヴァントの武器の投影なんて半人前のキャパシティを超えているのか、頭痛が酷い。

右目の視界が赤く染まっている。短剣を弾いた時に掠めていたのだろうか。流れ込む血が目に入っている。しかし皮膚を切り裂いた痛みではなく、眼球の毛細血管が破裂したのかとも思いうくらいの中から押し出されるような痛み響く。

無茶をしすぎたせいか、吐き気までもが止まらない。

痛みに集中が途切れ、足が滑る。そんな状態ではイメージの維持もままならない。事実投影した双剣は投げつけた時にあっさり砕けていた。

ガクガクと膝が笑い、足元の支えを失ってバランスが崩れる。

しかしまだ、倒れるわけにはいかない――！

「――くそ」

悪態を付いて向き直る。

ここに――。

空間が固まるほどの魔力が吹き荒れている。

アーチャーと向かい合い、眼帯を外したライダーが立っている。

その眼に吸い込まれたように、震える足が止められた。

見開かれた虹彩は閉じる事無く凝固され、瞳孔は宝石の形に四角く切り取られている。

網膜の細部はその細胞が――億に至るまで全てがエーテルで構成されている。

神の寵愛を受けた芸術か、それとも呪いを極めた者に与えられる称号か。

人の眼ではありえない煌きは、見るものをたやすく石化させる。

何人たりとも彼女を直視してはいけない。

かの英雄は鏡の盾でもって直視を防ぎ戦ったという――。

神話の現出。英霊メドゥーサの姿があった。

§

触れ合うほどの直前でライダーの眼をみたアーチャーは半身まで固まっている。

戦いながら、彼女から眼を逸らすことなんて出来はしない。故に不可避。それがライダー――

の魔眼の恐ろしさだ。

遠坂も両足を固められたようで動けずにいる。

「くそ——見るなっって言っただろう……！」

かく言う俺も、振り向いた拍子に正面から見てしまったのだから笑えない。

何とか前進してライダーを討とうにも、既に膝下まで石化しかかっている。

「——なん、で——！」

遠坂の苦痛の音が聞こえる。

「魔眼とは眼を見た事による暗示ならず、私の見るもの全てに呪詛をかけるもの。既に見られた時点で貴女は私の魔術に固定されている。そして、効果は魔眼を見ることで飛躍的に伸びます」

しかし——とライダーは続ける。

「物理的な眼だろうと心眼だろうと同じ事。今の私を見るということは、それ自体が呪いだ  
と知りなさい。——でも石化の速度が遅い。認識洗浄に対する抵抗があるということは、既  
に私の眼が石化だと知られているということ。……忌々しい、あの魔女の仕業ですか」

言いつつ、油断無く周囲を伺う。

——おかしい。

ここに来て、俺はようやくその事に気がついた。

アーチャーと遠坂、俺は既に動きを止められている。  
セイバーは石化耐性こそ無い物の、巨大な魔力を秘めているが故に固められてはいない。  
この結界の中でもセイバーの保有する力はライダーを上回っているらしい——ならば、ライダーが警戒しなくてはいけないのはセイバーだけのはず。  
それなのに、周囲を伺わなくてはならない理由はない。  
疑問が連鎖する。

アサシンの介入はライダーにとって助けだったはずだ。  
厄介なキャスターが消滅し、セイバーを引き受けてくれたのだから。その間にまともに石に変えてもよかったはずだ。

一対一ならともかく、アーチャーの後ろにセイバーが控えている時点で魔眼を躊躇う必要は無い。

それなのに、限界まで桜の護衛にのみ徹していた。

まるで桜から離れることこそ致命的だとも言おうように——。  
——まさか、と一つの希望にも似た可能性に思い至った。

「凜——来るぞ！」

アーチャーが叫ぶ。

未だ苦痛に喘ぐ桜の方から、黒い槍が現出し遠坂目掛けて突き進む。



俺が遠坂を庇うには距離がある。

しかし、まだ両足を固めきられていない遠坂は、地を転がって一撃目を避けた。

「セイバー、ライダーを頼む」

「――承知」

地を駆ける。その速度は先に比べると目に見えて落ちている。

「……く」

関節が動かないというのが、ここまで辛いとは思わなかった。

これなら這った方が早いかもしれないと思いつつ、腰から無様に両足を動かし交互に進む。

この結界に囚われてから何分経ったのか――そろそろ、肺が破れそうだ。

再度、黒い槍が遠坂目指して地を駆ける。

その数は三。初撃を交わすために地べたに這いつくばった遠坂に、本来ならばかわす術は無い。

「――っ！ なめるな――！」

宝石を取り出して叩きつける。

何を使ったのかは分からない――小指の先ほどの宝石から純粋な衝撃が溢れ、三条の黒槍をまとめて消し飛ばす。

――魔術を使える余裕があるなら、暫くは大丈夫だろう。

今の俺に何ができるかは分からないが、とにかく桜を助けないと。結界が張られてから何分たったのか、空気の濃度が増している。ザクザクと切り込んでくる痛みのためか、時間の感覚が妙に長い。数十分とは経過してないだろうけど、数分という訳でもない。なら、これ以上ここにいるのは本当にまずい。

赤い檻は学校の敷地をすっぽり覆っている。

これを壊すには、内側からではダメだ。この閉じられた世界の外から突破するか、それとも術者そのものを倒すか――。

結界の天辺には、地を見下ろす赤い瞳が現出している。

そこからドーム状に覆う真紅は、血の涙を連想させた。

「……………」

何か――視界に移った。

屋上の一角に黒いモノが残っている。

どうやら布きれのようだが、何故こんな所にあるのか分からない。

「キャスターのロープ……………」

死んで塵になっただけのキャスターのロープが、今も消える事なく残っている。本人とは異なる魔術道具なのか、彼女が消え去った後も風に揺れていた。

「く……っ！」

それがキヤスターを思い出して胸の奥が軋み上げる。

何か手は無いのか……？

目先の脅威であるこの結界をどうにかして、桜も助けられる起死回生の手段は……！！  
キヤスターには手があったようだ。だけどそれもギリギリでアサシンに食い止められてしまった。彼女は何をしようとしたんだ？

一撃でライダーを止められるような何かだ。一体何を……？

電光のように脳裏にひらめいた。

キヤスターならばこそ行えた手段が一つあった。

「桜」

セイバーは上手くやってくれているようだ。

今、俺と桜の間には誰もいない。

「桜……！！ 聞こえてるか？」

「……せん——ばい……っ？」

「よし、意識はあるみたいだな」

胸元を抑えていた桜が顔を上げる。

いつもの穏やかな表情は苦痛に喘ぎ、顔色は血の気を失って真っ青だ。——だというのは、熱病にうなされてるかの様に、頬が赤い。

「この結果。何とか解けるか？」

「はあ——はあ……、ライ、ダー……の意志で、張られているので……私からでは無理……です」

「そうか……」

話ながら、一步一步近づいていく。

時間と共に魔力を奪われていくセイバーに、更に魔眼によるペナルティが加わっている。

——多分、彼女でもそう長くは持たないだろう。

そして、それ以上に俺の方が持たないだろう。

桜のほうで結果がダメなら、俺がなんとかするしかない。——方法は一度試した。武器そのものは二度見ている。何を投影するかも決まっている。問題は俺にそれができるかどうかということ。

可能性は限りなく低い。しかし、何もしなくても結果は同じだ。

あの双剣を投影した時点で、魔力はすっかりなくなってる。濃密な空気に奪われつつけた魔力は最後のひと絞りを自力で使い、もう少し経てば俺が先に解け落ちる。

そうならどうしようもない。だから、死んで元々で試してみる価値はある——！

「先輩……近付かないで、ください……」

桜の背後に黒い槍が浮かぶ。

遠坂を狙っていた槍は、向きを俺に変え——。

「——離れなさい！」

目の前で破裂した宝石が、防壁となつて槍を砕いた。

「遠坂？ すまん、助かった」

横を向く余裕もなくなってきた。

「——つたく、何無茶してんのよアンタは。アーチャー。また動けないの……っ？」

「もう少しして。今体内の暗示を殺している」

桜まで後少しで届く——。

「——くそ」

なんとか手を伸ばし——そのまま、膝が動かなくなつて前に倒れた。

「だめ……やめて、ライダー……！」

……気付かれたか？

じりじりと指先で這つて、桜に手を伸ばす。

「——だめ……！！ いや……先輩……逃げて……！」

再び黒い槍が浮かぶ。

「くそ——投影、開始……！」

目の前の標的を貫かんと角度を変え——。

——間に合わないか……！！

体内で魔力を生成できる魔術師は、肉体そのものに魔術耐性を持っている。

しかし、今の俺は一般人と変わらない。時間と共に魔力が回復するまで、寒風の中、裸で寝るのと変わらない。

実際にやれば風邪で済むが、今攻撃を喰らったら——。

「くそ、ここのままでか……ッ！」

絶対に眼なんて瞑ってやらない！

根性でも意地でもなんでもいい。迫り来る黒い槍を睨みつけた。

黒槍が跳ねた。そうとしか思えない程の速度で迫り来る。

それでも——この目だけは閉じてやるもんかと力を籠める。

「——ッ」

稲妻を落としたように、視界全体がバチンとはじけた。——痛みは無い。それだけが救い

なのだ。倒れ行く身体でぼんやり思った。

幸い、眼はまだ開いている。

視界の端で黒い物が舞い上がった。黒い槍による止めか……と睨みつけると、屋上に留まったままの彼女のロープがふわりと巻き上がった。ロープの内側に空間はなく魔力の孔が開いている。

そこから、まるで布全体が裏返るように――。

「意地を張るのはいいですが、貴方は一人で頑張りすぎです」

頭上から、呆れた声が降ってきた。

彼女は手にした杖を振るう。

その一振り、俺に到達寸前だった黒い槍はあっさり砕けた。

くるりと回した杖は大気に溶け、変わりに短剣があらわれる。

稲妻を描く刀身は黒い虹彩を放ち、傍目からでも分かる強力な呪いが秘められている。

振り下ろされる短剣は、今度こそ妨害もなく――あっさり桜に突き刺さった。

桜を中心に、ひときわ大きな紫電がはじけた。

「彼女を蝕む枷は破壊しました。戦闘を止めなさいライダー」

魔眼をもともせず、鋭く言い放つ。

ふと地面に転がる俺を見て、

「申し訳ありませんわ。跳ぶのに少し手間取りました」

その口調とは裏腹に悪びれた様子なんて全然ない。紫貝の衣を着込んだ彼女は、天気の話でもするかのようにあつさり笑う。ごろりと仰向けになると、そこには青空が広がっていた。

「やっぱり……生きていたんだ……」

自分の声が呆然と聞こえた。

「……………ねえ、ちよつと。貴方、本気で知らなかったの？ それなのに、キヤスターと手を組んでたってワケ……………!？」

「……………」

驚く遠坂の方を、全力を振り絞って顔を向けた。

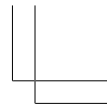
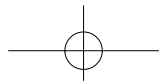
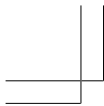
……………よく分からないが、あの顔は心底怒り狂っている。

「はあ……………」。呆れたと思つてたけど今度こそ決定的だわ……………。キヤスターの影なんて今まで何人倒したことか」

呆れた呆れたと繰り返す遠坂の言葉に、苦笑いするしかない。

だからこそ、キヤスターを見た彼女は怒りに震え、ライダーはそれこそ警戒し続けていた



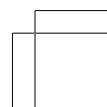
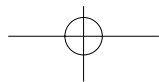
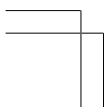
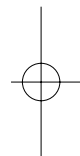
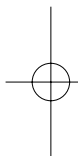


のだ。  
「なんだ」

手品の種は、分かってみるとこれ以上なく簡単だった。  
一人何も知らずに翻弄されつづけた俺は馬鹿みたいだと思い――。

『なんでも。こういうのは本職に任せておけば安心だろう？』  
『……わかりました。ですが他にも気がかりなことがあるので、念をいれて二三手を打ってみます』

なるほど、確かに本職というのは凄いものだと言力抜いた。



キャスターの短剣から紫電が収まる。

対象を巡る魔力が失われたことは、そのまま呪いが完遂したことを意味していた。

桜が意識を失って倒れた。

天からすっぽりと覆った赤いドームは消えている。キャスターが結界をぶち破ったのか、ライダーが解除したのか、それとも契約と共に強制解除させられたのか——俺にはわからない。

膝に力をいれて何とか立ち上がり目の前の桜を起こそうとしたが、それより先にライダーが抱きかかえ、離れた所に降り立った。

やってきたセイバーが肩を貸してくれる。

俺より小柄な少女に寄りかかるのはあまり見られた姿ではないが、この場合仕方がない。状況を見て、キャスターが悔しげに言う。

「……本来なら契約が破棄された空白に介入してライダーを奪う所ですが……他のサーヴァントを使役できるほど、私の魔力に余剰がない……」

「つつ……なんだか物騒なこと言ってるな」

主を通じてサーヴァントの魔術効果までキャンセルされたのか、石化は既に解けている。

遠坂は未だ警戒を解いていない。

注意深く桜を観察し、今も苦しんでいるものの苦痛が治まっていることを確認している。軽く、息を吐いた。

俺も同じ気持ちだ。すぐにも教会か病院に連れて行かなくてはならないだろうが、さっきまでの絶望的な状況ではなくなっている。

それから彼女は油断無くライダーと、それから俺たちを見て、キャスターで視線を止めた。

「礼を、言った方がいいのかしらね」

キャスターを睨みつける遠坂の目は険しい。

少なくとも、お礼を言うって雰囲気じゃない。

「彼が望んだから手を貸しただけのこと。お嬢さんに恩を売ったつもりはありません」

「そう——なら礼も言わないし借りも作らないでおくわ」

「それで結構よ」

桜を助けてハッピーエンドのはずが、更に火種に投げ込まれた気分だ。

次に、とばかりに、遠坂は離れた位置で桜を介護するライダーを睨みつける。

「……ライダー。桜の治療が先よ。手を離しなさい。それとも人間に使役されていた恨みでも晴らすつもり？」

「——そのような気持ちはありません。サクラを助けるのは私自身が課した使命です」

「そう。なら話は早いわね」

ライダーが立ち上がる。桜を巻きこまないようにするためか、既に眼帯を着けた姿だ。

両手には気を失った桜を抱えている。

遠坂は一つ頷くと出口にむけて踵を返し――。

「――え？」

それは、唐突にあらわれた。

屋上の隅に黒い影が立っている。

アサシンじゃない――アイツは全身を覆う黒衣を身につけてはいたが、あんな妙な雰囲気は持ち合わせていなかった。

平面をそのまま直立させたような姿は、現実味がない。

その周囲だけ空間がねじれているように見える。——これが錯覚であってほしいと、ただ頭のどこかで祈っていた。

影は立ち尽くしている。  
何もしようとしない。

そのそこに在るだけで撒き散らす存在感は——。

遙か遠いどこか、夢の中で見た気がした。

シュルシュルと布が擦れる音がする。

「あ——あ——あ」

顔色を失ったキャスターが眼を見張る。

問いかける必要なんてない。あんなのひと目見れば、そのヤバさなんて俺にも分かる。  
眼を離す事はできず、ただ動向を見守っている。

「あつ、あつ」

視界の端、桜の体が痙攣した。

「サクラっ!？」

ライダーがビクビクと暴れる体を下におろした。

凍りついた足を動かし、遠坂が駆け寄る。

その反応は先ほどより遥かに強い……。震える体を押さえつけようとして、ごぼり——と血を吐いた。

噴出したと形容するのが正しいだろうか。

桜から飛び出した固まりは弧を描いて遠くに跳ね、びしゃりと地面に広がった。

その血溜まりの中に、ビクビクと蠢く蟲がいる。

「ッ!!」

鉤爪を持った生々しい姿。長さは十五センチはあろうかという程に長大。

こんな物が入っていたのか——!?

キヤスターの誓約破りの短剣は、その身に掛けられた全ての契約を無効化する。それがただの解呪と異なるのは、契約が結ばれる前の段階に強制的に戻す事にある。その威力は絶大で使われた令呪の効果すら執行される前の段階に戻してしまい、魔術で生み出された生物にすら関与する——だから、桜の体内にいた蟲が体外に排出されるのは当然——住み着く前の状態に戻されたからだ。

しかし、だからといってこんな蟲を体に住まわせられて、桜に一体何をしようとしていたのか……!

「……間桐臓硯か……!」

あの夜出逢った怪老人を思い出した。

ただの人間ではない雰囲気。どのような術を使うか知らないがあの老人も魔術師であることに間違いないだろう。

臆視と、間桐の家に対する怒りを覚える。

蟲の放つ、あまりの奇怪さと嫌悪に動きが止まる。

遠坂も同じ気持ちなのか、瞬間硬直し——それから蟲を破壊しようと宝石を構え投げつける——。

術が発動する前に、蟲の上を何かが通り過ぎた。

眼前を過ぎる疾風に、慌てて振り向く。

黒い影は位置を変えず、観察するかのように行んでいる。

剣を構えたセイバーとキャスターが凍り付いている。拳を握るアーチャーの手は、何かを思い出すかのように震えていた。

のっぺりとした影は動いていない。

「アサシン——！」

遠坂の声に向き直ると、フェンスから飛び降りる黒衣が見えた。

「やられた……あの蟲、きつとアサシンに関係ある……！！　今はこの瞬間は、きつと方に一つの勝機だった……！！　アイツはライダーを助けたんじゃない……桜を監視してたん

だ……!!」

確かに、間桐臓硯へ繋がるなら今の蟲は手がかりになる。  
しかしそれよりもなお、警鐘を鳴らしてやまないモノがいた。

—— おお —— おお ——

言葉を知らない影は、吹き付ける寒風のように細い音を漏らしている。  
背筋がぞくぞく——とした、目の前の影は正体不明だ。あんなのが出てくるなんてワケがわからない。

それは触手を伸ばすかのように、布じみた手を上げ——。  
こちらをはつきりと指し示した。

「俺か、俺の後ろの桜か、それとも遠坂か——」。

この場にはマスターは三人いる。そのどれかに執着があるのか、思い出したように前進を始めた。

「急げ……!! この場は引け——」  
アーチャーが焦りを上げる。



でも無理だ。

逃げて無駄だ、と。出会ってしまったからには逃走すら許さないと、黒い影は全身をもって拒否をした。

樂觀した空気が凍りついて、ひび割れていた。

既に膝が落ちかかり、意識が飛びかけていた頭が覚醒に向う。

体力や魔力は枯渇したままだ。

単に——動物としての本能が、逃げなければ死ぬと警鐘を鳴らしているにすぎない。

だからアレとは関ってはいけない。

早く逃げ出さなくちゃならないと本能は命令を繰り返しているのに、もう逃げられないと

体は命令を拒否していた。

逃げろと声を張り上げたアーチャーですら、魅入られたように動けなくなった。

「キャスター」

「あ、……っ」

そして、奇妙といえればキャスターの態度こそ奇妙だった。

恐れと怒りをなげまぜにしたように、顔を蒼白にして佇んでいる。

その影には眼がない。

耳も無い。

口も無い。

意志を訴えるものなど何も無い。

布のような形状は風ではなく、自己のみを支配する法則で揺れ動いている。

直立した影としか形容できない物体の足元には、更に影が伸びていた。

影を持つ影などこの冗談だとしか言えない。

っ。

「おかしいだろ……あれ……」

自然と口から洩れた。

喋ろうとしても動かなかった発声器官は、無意識の言葉に自然と従った。

昼下がりの太陽は南側から西に下ろうとしている。だから、影は必然的に東を向く。

なのにその「影」から伸びる影は、太陽を背にした俺たち方へと伸びてくる——！！

やばい———と思ったときにはもう遅い。

「逃げるッ！ たわけが———」

アーチャーの怒号が弾ける。

ライダーが桜を抱えて跳躍するのが見えた。彼女なら、きっと桜を連れて逃げのびるだろ

う。

後は俺たちだけ。

遠坂は今も影に魅入られたように固まっている。

アーチャーは俺なんかより遥かに早い、それでも全然距離が遠い。

そして、俺は手を伸ばせば届く位置にいた。

さっさと逃げる馬鹿と、まるでアーチャーのように思考して、

残された体力全てを使って遠坂を突き飛ばした。

影はまっすぐ伸びてくる。

突き飛ばした反動を使って、反対側に跳ぼうとした——けど一拍の遅れが致命的に取り返

せない。

ガクンと、伸ばしていた手をセイバーに手を引かれ、加速する。体が影の線上から離れる

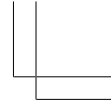
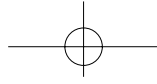
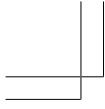
と同時に、僅かに残された俺の影と交じり合う。

——どくん、と心臓が悲鳴を上げた。

脳味噌をぐっぐつ煮こんだように、悪意が浸透してくる。

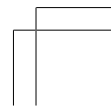
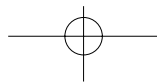
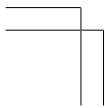
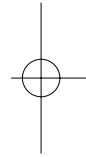
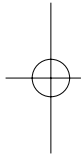
それで意識が途切れる。

元から気を失いそうに疲労していた心と体は、最後のダメ押しをされてあっさり飲まれた。



154

消え行く意識の中、  
後味の悪い、  
悪夢をみた。



——悪い夢を見ている。

／ 4

傷を負い、疲れ果てた体は一秒でも多くの休息を取ろうと深い眠りを欲していた。だが、今も赤い世界をさまよい歩いて、泥のような安眠は得られない。疲れきった体は熱く火照り、悔やみ続ける心はジリジリと焦げる。魔されているのが自分で分かる。委ねられないまどろみの中、安寧とは程遠い夢を見る。真つ赤に染まった世界は惨劇の後だ。……あの場にいたどれほどの人間が犠牲になったのか。放課後とはいえ、それでも大勢の人間が残っている。慎二は観客が必要だと言っていた。つまりは、俺に見せるためにあの場所に呼び出した。それを今さら恨むつもりはない。慎二の肌はずると溶け落ち、胃袋の中へと食われていた。

その傷痕は生涯残るものだ。

他の人間にしても、生命を強引に吸い出されるような真似をされて、後遺症が出ないなんて都合のいいことはありえない。

屋上にいた俺に、その光景は見えていない。

だというのに――。

どこかよく似た風景を、昔、みていた。

希薄になった空気は重度の酸欠を生み、記憶障害となって降りかかる。

溶けた皮膚は火傷に等しい――長い間に渡る体調不良と、ともすれば一生残る傷となって苛み続ける。

……体が痛んだ。

死に掛けた体が痙攣した。

あの災害は必然ではないが不可避であり、それを止める為に頑張ったと、どこか遠くで囁いた。

それは、とても穏やかだ。

お前はよく頑張った。お前がいなければ惨事は広がり、生き長らえる事は出来なかった。

だから悔やむ必要はなく、恥じる事無く穏やかに眠れと囁いた。

——あらい難い誘惑に、心が屈しそうになる。

——それは敗北ではなく、勝者の権利なのだ。

——痛む体を抱えているのは、それこそが証なのだ——。

………違う。

そんな理由で納得することなんて出来はしない。

惨事は起きて、俺はその場に居合わせた。だというのに何も出来なかった事実は変わら  
ない。

命を救ったというのなら、俺の手に一体誰が救えたのだろう。

いつそのこと屋間の出来事は悪夢であり、今さらやり直す事ができるなら、囁きに従い  
やかに眠りもつけるだろうに——。

くそ、頭に来た。

疲れてるからといって、そんな世迷言を考えた自分に腹が立った

幾ら惨劇があり後悔があるといったって、無かった事にするなんて酷い侮辱だ。

そんな奇蹟なんてありはしない。

悔やむ事なんてそれほど山のように存在している。

過去に戻ってやり直しても、

無かった事にしようとも、

俺が何も出来なかった事実は消えはしない——。

だからこそ、次こそはあんなことになんて、ならないようにしないとイケないんじゃないか……！

赤い世界から現世へと意識が浮上する。

敷地を覆う真紅に彩られたドームがある。

頂点から下界を見下ろすその眼が——。

——見たこともない、黒い太陽になっていた



体を包む布団の温もりがあった。

もう十年も暮らしている部屋だ。布団の感触も、その下にある畳も、部屋を流れる空気も馴染み深い。

疲労しているためか、目が開くより先に意識が覚醒した。

冬の空気は冷たい——しかし、冬の暖かいこの街は昼の間は気温が上がり、家の中にいるならばそこそ暖かく過ごせるはずだ。

——その空気が、冷たくなっている。

ゆっくりと目を開き、意外に苦労したことに驚いた。

体を痺れが包んでいる。意識が覚醒に向うと頭痛まであることに気がついた。

「……あんなに殴られたりしたんだから、当り前か」  
うあ、なんだこれ。

喋ってみても全然声が擦れて出ない。

「——っ」

傷は相変わらず治っているが、カラカラ乾いた喉が張り付くようで、ベリベリと剥がすみたいに嫌な感触がする。

まあ、なんというか……。

あれだけライダーの拳を喰らってポコポコにされ、その上更に、慣れない魔術を連続で使い魔力も底の底までたつぷり使い果たすなんて経験をして——そこまで無茶やって何の後遺症も出ていないなんて贅沢すぎる。

「……」

体を起こした。

服装は外に出た私服のまま——途中からぶつくり記憶が途切れているが、きっと誰かがここに運んできたに違いなく——。

堤防が決壊するように、いろんなことを思い出した。

血の気が引く、慌てて布団から飛び出した。

「……」

足が上手く動かなくて、無様に畳に転がった。

でもそんなことに構ってられない。

関節がロックされたんじゃないかと思っただが、左半身が痺れて上手く動けない以外は普通に動くらしい、——右側を上手く使えば歩くのに支障はなさそうだ。

動かない手を底い不器用に襖を開け、廊下へと出ていった。

驚いた。

どうせ少ししか経っていないだろうとたかを括っていたのに、外は暗闇に包まれている。「……くそ、アレから何時間経ってるんだ」

廊下の電気はついている。

誰か起きてるんだろうかと思いい居間に入ったが、そこは無人だった。

セイバーも、キャスターの姿もない。

時計を見ると時刻は深夜を指していた。

台所に行き、コップに水を注いで一気に飲み干す。……左手で物を握れないというのは極めて不便だと思う。

ごくごくと一気に飲み干して、それで少し落ち着いた。

「……どうなったんだ……一体……」

知りたい事は山ほどある。

これだけ睡眠をとってなお体は疲労を訴えてる。が、あまり悠長に休んでもいられない。廊下に出て中庭を見てみる。

離れの明かりは点いていない。

誰かいるにしても、時間が時間だ。きつと寝ているんだろう。  
「……あれ？」

道場に明かりがついている。

セイバーかなと思ひ、行ってみることにした。

道場にはセイバーがいた。

私服に着替えた彼女はいつかのように正座をし、静かに黙想をしている。

「セイバー、起きてたんだな」

「……シロウ？ 体は大丈夫なのですか？」

眼を開けて立ち上がった。

「まだ顔色が優れません。体内の魔力も乱れている……無茶をしないでください。今、シロウに必要なのは休息です」

「すまない。迷惑掛けちゃった」

「——迷惑だなんてことはありません。シロウは良く戦いました。私たちはこうして無事にいる。ならばいずれ再戦の機会もありましょう」

「再戦……？ アサシンとか？」

「そうです、とはつきり顔いた。」

「ライダーもですね。……今後の彼女がどう出るかはわかりませんが、既に二度刃を交えている。三度目があったとしたら今度こそ逃すつもりはありません」

「そうか……。でも、慎二の手から離れて桜のサーヴァントになつたら――あ」

「……そうです。ライダーはサクラの手からも離れている。今は主を失ったサーヴァントです」

キャスターの宝具は強力な契約解除能力を秘めている。

慎二が何かをして、桜の暴走が始まった。その原因はわからないが全部ひっくるめてまとめて解除してしまったワケだ。

「その桜は？」

「わかりません。リンが自分も探しに出ると言っていました――シロウ？」

「俺も行ってくる。桜は遠坂に任せともあの影は危険すぎる」

外にむけて走り出し――セイバーに腕をつかまれると同時に、膝から力が抜けた。

「無茶です――！ 今のシロウは魔力も体力も尽きている。そんな状態で戦闘になりたてでもしたら、それこそ自滅します。シロウのサーヴァントとして見過ごすわけにはいきません」

「でも、あんな連中に桜が一人でいる所を狙われたりしたらマズイことになる」

「だからこそです。今のシロウでは合流できたとして足手纏いになるだけだ。他者を救うという志は素晴らしいですが、それも度を過ぎては意味が無い。勇気と蛮勇を間違えてはなりま

せん……！今は体を休め、次なる戦いに備える時です」

セイバーは全然分かっていない。

そんなの、些細なことだ。

「違う……俺の体なんてどうでもいいんだ」

即答した俺に、セイバーの目が驚きに見開かれた。

まさか、と何かに納得したように——それでいて、ためらうように言った。

「シロウ……貴方は、死ぬのが恐ろしくないのでですか？」

「え？」

いきなり何を言い出すんだと、こっちが驚く番だ。

「そんなことない。死ぬのは誰だって怖いし、痛いのも嫌だ」

「ですが……シロウは私をバーサーカーから庇った前歴がある。今回にしてもそうだ。バーサーカーに一度殺されながらもライダーに単身立ち向かい、自らの命を差し出すほどの賭けをする。そして、今も傷ついた体で無茶をする——本当に恐れていないと言い切れるのですか？」

彼女の言葉は真剣だった。

冗談のような指摘に、胸の奥でチクリと刺さる。

「くどいぞ。死ぬのなんてまっぴらごめんだ。学校の時はいろいろと起こって必死だっただけだし、バーサーカーに負けそうになったら、今度こそセイバーを見捨てて逃げ出してやる——！」

その棘を——欠片も思っていないことを主張することで、無理やり引き抜いた。彼女は安心した笑みを浮かべた。

「そうですか……。確かに行過ぎた失言でした。自分の命より他者のことを気にかけるなんて、あつてはならない。自己の全てを捨てて他者に尽くすなど、英霊であつても持ち得ない——そのように思う人間がいるとすれば、それはどこか歪んでいる」

「——ああ、そうだ。俺は一人前にもなりきれない半人前だからな。……あんな体験、そう何度もできるもんじゃないし、やりたくもない」

「それはとても素晴らしい」

——と、セイバーは心から嬉しそうに微笑んだ。

「結構情けないこと言つてると思っただけど……嬉しいことなのか？」

マスターとして未熟だとか、そう思われるんじゃないかと思っただけだ。

セイバーは少し困った顔をした。

「先も言ったように、勇気と蛮勇をはきちがえる者に魔術師は勤まりません。その点、シロウは少し臆病に見える。これはとてもいいことです」

「納得できないという顔をしています」

「そりやそうだ。臆病なんて——確かに怖い思いは沢山してるけど、あまり褒められることじゃないような気がする」

「そんなことはありません。恐れを知らぬ者が生き残ることなどできません。死に立ち向かえるのは死の恐怖を知る者だけです。——恐れを知らぬながらも、そこで踏み止まり最後まで勝利を信じる者だけが戦いに生き残れます。愚かさを知らぬ者が賢者になれないのと同じ道理です」

「……俺は、そんな大層なことできないぞ」

「そうですか、と言うが、彼女の目はどこか笑っている。」

「シロウの勇気は既に示してもらいました。——ですから、どうか己を過信せず、自己を省みて臆病を忘れないで下さい」

「……わかった」

「ここまで言われては黙るしかないだろう。」

「褒められたのか釘を刺されたのか分からないが、少し体が熱くなってる。」

「頷くと同時に、切り込むようにセイバーが言う。」

「では、今夜は大人しく休んでください。——無駄死にしたくないのでなければ」



「うっ」

「もちろん納得なんてできる訳がないのだが、ああ言った手前どうしようかと悩んだ。

「シロウ……」

「まったく仕方がないですね、と言外ににじませて俺を支えていた腕を離した。ついでに軽く胸を押される。

「——とと」

力の入らない足腰はたやすく碎け、床に尻餅をついてしまった。

「……ほら、そんな姿で誰の助けになると言うのですか。今晚は大人しくしててください。もつとも、その様子なら外に走り出た所で倒れて終わりでしょうけど」

「……分かった。今夜は大人しくする」

セイバーの眼光に負けたわけじゃなく、確かに今の俺は役立たずもいい所だった。走り出た所で力尽きて、朝になって家の前で発見されるなんて姿は晒したくない。

——その、いろいろと。近所的に慮ったのであって、セイバーの魔力まじりに青く光る目なんてこれっぽっちも怖くないですよ。

「だけど二つ聞かせてくれ。あれからどうなったんだ？」

「リンが教会と病院に連絡をいれました。校舎にいた人間は一人残らず病院に入っています」  
「それは……入院してることなのか？」

ええ、と苦々しくセイバーは頷いた。

「症状には差があるようですが、全員、最低でも数日以上の治療必要だろうと……」

「まさか……藤ねえも？」

そうです。と瞳を閉じて俯く。

どこか言葉を選んでいたように思えたが、その理由がこれか……。

さあ——と血の気が引く音が聞こえた。

音は俺の中から響いている。ずっとこの広い屋敷で一人きりだった。親父に拾われてから十年——海外を転々とする親父は半年くらい平気で戻らず、広い家にたった一人で住んでいた。

その時から、姉代わりとして俺を助けてくれた人が——。

「——く」

ギリギリと奥歯から洩れる音は俺の悔恨だ。

どうしてこうも、この俺は無力なのか——！！

「落ち着いてください。タイガは比較的軽症で済んだようです。命に関する傷を負っていません。」

「でも——、それでも、俺は……っ！」

いずれ見舞いも行かなくて——でも今はダメだ。

拳を握って床に叩きつける。

また、何も出来なかったのか……っ！

「自分を責めてはいけません……私も、あの場にいたのですから」

セイバーの真摯な声に打たれた。

俺が自暴自棄になったところで、セイバーを更に追い込むだけだ。

彼女は俺のサーヴァントで、主が後悔すればセイバーはその事すら自責とする。

「悪い……取り乱した。他には？」

だから、無理やりにでも飲み込んで続けた。

「アーチャーからシロウに伝言です」

思いもしない言葉に顔を上げた。

「アイツが、俺に？」

「私も不思議に思ったのですが……ただ言えば分かると。分からなくても……いえ、その……」

「いや——遠慮しないで言っていよいよ」

はあと心底気が向かないとばかりに、セイバーは続けた。

「わからなくても小僧の脳味噌では仕方がない。だから直感に従え——と。——その場で切

り捨てようかと思いましたが」

「く……。その気持ち痛いほどにわかりすぎる」

「どうやらアイツはセイバーとも相性が悪いらしい。」

俺もアイツとは相容れないと、互いを憎みあうしかないと分かりきってる。

アーチャーはセイバーを見知ってるようだった。人間だった彼女に関係ある英雄なのかもしれないが、どうせ彼女にセクハラして切り殺されかけたとか、その程度のロクでもない出来事しかないんだろうに。

「それと……」

「まだ変な嫌味でも言ってたのか？」

「……いえ。アレが出てきた以上、聖杯戦争など続けている場合ではないとか……そのようなことを」

「そう——か……」

確かに、あの影は危険だ。

理屈じゃなく、直感でアレが敵なんだと告げている。

「わかった……ありがとう」

「いえ——」

セイバーが差し出した手を握り、立ちあがらせてもらう。

状況は——よく分からない方向へと動いていた。

どうすればいいのかなんて、さっぱり分からない。

「……とりあえず、今夜は寝る事にする。明日また話し合おう」

「わかりました」

道場を出る。

ふと、一つ思い出した。

「そうだ——夕食抜きになっちゃってごめん」

「そのようなこと気にしないでください。シロウの作る食事はとても美味しい——ですが、この身はサーヴァントです。そして、戦場において一度や二度の食事を抜く事など珍しい事ではありません」

戦場——か。

セイバーがどんな英雄だったのかは今も知らないが、あれだけの技量、魔力を持っている辺り実戦経験豊富なんだろう。

この少女の身でどんな戦いをしていたのか、少し気になった。

「そっか——その分、明日は腕によりをかけるよ」

「楽しみにしています」

でも会話を打ち切った。

彼女の正体を探らないという約束があったから。

「あ」

「シロウ……？ なにか」

いや、なんでもないと答えて部屋に戻る。

正体といえば、誰かがキャスターのことをギリシヤの魔女と呼んでいた。

ありふれた神話に一つ似たような名前の話があった。

なんだっけなーと首を捻り、部屋に戻る。

——その途中廊下から外を見る。

先ほどまでは無かった人影がそこにある。

中庭に佇むキャスターは、星を見ていた。

——俺の方も疲労は限界。

だから、今夜は一言だけで終わりにした。

「キャスター……起きてたんだ。ずっとそんなところいると風邪引くぞ」

「目が覚めたのね……。それと、私はサーヴァントです。病気になどなりません」

「そっか」

セイバーとキャスター。この二人、相性が悪そうなのに似たような事を言うんだと感心し

た。

—— そうだ。これだけは忘れずに言っておかねばなるまい。

それを言うためにも目覚めた時彼女の事を探していたのだ。

「今日はキャスターのおかげで助かった。アンタがいてくれて本当に良かった」

夜闇にでもわかるほど、彼女は驚いた。

……まったくなんだっていうんだ。俺だって礼の一つくらい言える。

思えば、俺にとって当り前の言葉でもキャスターにとって意外に取られる場面が多い気がする。

……それだけ突拍子も無い言動してるんだらうか？

疲労のせいだろうか、無意識に変な言動してるんじゃないかと少し気になったが、体に残

る倦怠感が上回った。

「じゃあお休み。また明日な」

眠気を意識すると睡魔はたやすく訪れた。

「……ええ。——お休みなさい。良い夢を」

キャスターに後ろに手を振って分かれる。

その後は、朝まで夢も見ずにぐっすり眠れた。

## Interlude / 8 ある場所で

時刻は深夜を大きく回った。  
呼吸は一定。

移動による疲労はないが、失われた魔力も回復しない。  
両手に彼女を抱いたまま、夜の闇を駆け続ける。

——どこに行く？

あまり迷いに時間は掛けられない。

後ろを振り向く——眼帯に覆われた視覚は闇。それでも、追跡者がいるという認識は、彼女に背後を振り向かせた。

気配は——無い。

それでも油断できない。暗殺者のサーヴァントは能力において他のサーヴァントに劣る代わりに、優れた気配遮断のスキルを持つ。



サーヴァントによる魔力感知すら気付かせない隠身は、闇夜において最大限に発揮される。

故に、常に先手は暗殺者の側に。

彼はサーヴァントと対する者にあらず。

常に闇に乗じて、人を討つ。

マスターを殺す事のみの特化したサーヴァント。それが暗殺者である。

本来の彼女ならば恐れる理由などなかった。

しかし、今は腕の中に命より大事な主がいる。

うなされている様子はない。

あの魔女を信じた訳ではないが、体内から感じる魔力も微弱になっっている。

既に肉体の一部と化したモノを排除する事はできないだろうが、それでも蟲にかけられた命令は消えているらしいと判断する。

——しかし、それも一時凌ぎに過ぎない。

あの老人に出くわせば、再び蟲を操られるのは明白だった。

それだけの力をあの老人は持っている。

現代まで生き残った、中世の吸血虫の力は、こと同種に関しては侮れない。

故に逃走を続ける。

アサシンと間桐臓硯の間には繋がりがあがる。老人の手綱から解放された主を、再び彼の掌中に落としてはならない。

それが、今のライダーが思う全て。

サーヴァントとしての契約は解かれているが、主の持つ令呪を剥奪されたわけでは無い。あの魔女がどのような意図を持ってか知らないが、サーヴァントの支配権を奪う訳でもなく、ただ契約をする前の状態に戻されたに過ぎない。

意識を取り戻せば、再び契約を行う事もできるだろう。

そしてライダーのサーヴァントには主無しでも現界しつづける能力がある。

彼女の場合たかだか一日に過ぎないが、それで充分だと判断した。

ならば——後はそれまで時を稼ぐ。

気をつけるものは二つ。

闇夜に紛れる暗殺者と、彼女達を狙った黒い影。

絶対的な悪意を持つあの影は、相手にはしてはならない。

アレの持つ空気は——どこか、腕の中の桜に似ている。そんなはずはないと頭を振り、考えを追い払う——。ただ一つ分かっているのは、あの影は桜に執着を見せていた。伸ばした影の先——一番魔力の多いアーチャーのマスターを狙ったのでも、サーヴァントの力を欲してセイバーのマスターを狙ったのでもなかった。ただ、自分の腕の中にいた桜だけを狙い、腕を伸ばした。

——彼女が警戒する真の追跡者はそれである。

あの影が持つ力に比べれば、暗殺者の技など児戯にも等しい。主を連れている以上油断はできないが、彼が間桐桜を殺す事はない。間桐臓硯の元に連れ戻し、再び手駒とされることのみを気をつければいい。それは暗殺者が暗殺できぬということ。

唯一の技能を奪われた暗殺者は脅威にならない。彼は全ての能力で自分を遥かに下回る。

少し雑念が過ぎたか——と思い、意識をクリアにした。

思考を切り替える。

彼女はその時、自動的になる。

興味のない事を行う時、きまつて彼女は機械となる。与えられた役割を果すために、感情を停止させ、ただ決まった事柄を繰り返す。

彼女の関心の全ては主の無事と、どこに向うかという思索にある。

故に肉体を切り離し、都合のいい潜伏場所が見つかるまでは肉体の動きをただの作業に落とし込む。

間桐の家に戻る選択肢は存在しない。

臓硯こそが警戒せねばならぬ対象であり、最大の敵だとライダーはみている。

教会は僅かに迷い、すぐに選択肢から外している。

何より目覚めぬ主を抱えたまま、新都まで単独で移動するには遠すぎた。

ならば、こちら側——深山町で何とかするかあるまい。

そう判断し、日が落ちるまで潜伏した後移動を開始した。

後は辿り付くのみ。  
中に入ってしまったえば、サーヴァントにとって堅牢な砦となる場所が一つ在る。  
そこに巢食った魔術師は、居を移している。  
単独の自分が入るには条件が整いすぎている。彼女は決断を下し、警戒を緩めず速度を上げた。

柳洞寺に生命の気配はなかった。

ここに居を構えていた魔術師は山を降り、異常な昏睡症状から目が覚めた僧たちも、治療のために下山している。

山門には黄色いテープが張られ、昏睡事件の事件現場として扱われていた。

一般人の立ち入りは無く、無人の境内が広がっている。

山を包む結界は健在。

キャスターなき後は彼女が作り出した神殿としての機能こそ失われたが、幾重にも張り巡らせた防御結界は今も生き残っている。  
故に守りは堅牢。

サーヴァントがこの地に入るならば、正面の山門より入るしか術は無い。それが冬木の地脈の要。寺の伝承に曰く、この山には竜が住まうという――。

境内の空気は一変していた。

キャスターの貯蔵していた魔力は、得体の知れない何かに食われたのか、柳洞寺は濃密な空気が漂っている。

腐敗した肉と、汚泥に棲む蟲の体液が交じり合う鼻腔を突きながらもどこか甘い臭いだ。

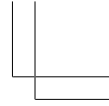
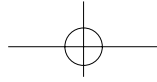
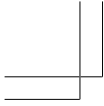
「う、ううん……」

異様な気配を感じ取ったのか、主が目を覚ます。

未だ魔術師として未熟だが、間桐桜は高い資質を秘めている。そうライダーは認識している。

ならばこそ、場の空気を感じ取り彼女は覚醒するべくして至ったのだと。

「……は……？」



辺りを見渡し柳洞寺であることを認識する。

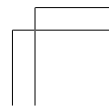
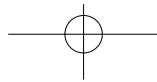
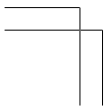
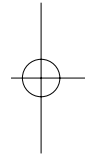
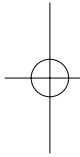
「一先ずここに。夜明けと共に移動しましょう——」  
桜は頷くと後に従う。

いずれ遠坂凛か衛宮士郎のいずれと合流するにしても、夜明けを待ったほうがいいと判断した。

夜は戦いの時間だ。そして、今の自分とライダーでは戦闘にならないことを知っている。

本堂に入った。

ここに至ってもなお、アサシンの追撃はない。  
そして最も警戒する「影」の存在も現れなかった。



7 / その真実  
/ 1

風が吹いている。  
地上二百メートルの風は冷たく肌にまとわりつく。眼下には街並みを覆い始めた薄暮れと、人々が作り出す灯火が深海魚のように動いている。  
ここ数日、雨が降った様子はない。このもう暫く晴天が続くのだろうと、遠坂凜はぼんやり思った。

「凜。新都一帯、私に認識できる範囲に例の影は見られない。無論サーヴァントもだ。——ここまで時を逃せば追撃は無理だろう」

「——そう。キャスターの後始末もしなくてよくなったみたいだし、戻りましょうか」  
遠くの森に、太陽が沈んでいく。新都で一番高いビルだとして、山の高さには叶わない。地平線は森に覆われていて、ジグザグに切り取られながら沈み行く。

学校での戦闘を終えてから四時間——遠坂凜は姿を消したアサシンと黒い影の調査に入った



た。

アーチャーの気配が離れた所で止まる。

夕陽を見つづけるセンチメンタリズムなど自分には存在しないと、遠坂凜は思っている。だというのに、この夕陽をみると昔のことを思い出す。

——自身の思い出ではない。夕陽の校庭。がむしゃらに跳び続ける誰か。

とても無駄な事をしていると思ひ、いつ諦めるのか眺めつづけた。彼は無理無謀に挑戦し、それを乗り越えるために戦っているのだと思った。

でも違った。

彼女が興味を持って見つづけた彼は、日がくるとあつさりと用具を片付けて帰ってしまつた。

そこには何の後悔もなく、ただ不可能なことを、自分にはできないんだと納得するまで繰り返していただけなのだど理解し——頭に来た。

そんなの知らなかった。

不可能なことに挑戦しつづけて、出来ないことを出来ないかと納得し、ありのまま受け入れる生き方があるなんて知らなかった。

名前も知らない彼のことをその時知った。視界の端に映った時についつい目で追ったりもした。

それは——いつもどこかで見つけていたということ。  
幸い彼はそう遠い人間ではなく——この戦争がはじまってからも、なんだかんだと関係が  
続いている。

一時の共闘関係から、大きく変わった。  
セイバーの主となりそして——。

「キャスターか」

赤い騎士に考えを見透かされたようで、驚いた。

「……？ 何を驚く。あの半人前がキャスターと契約したのは既に知ってるだろう」

「——なんでもない。そうね。衛宮くんもなんでそんな馬鹿なことしたんだか……」

今の彼はセイバーとキャスター、二体のサーヴァントと契約している。

令呪のある限り、何体でもサーヴァントと契約できる聖杯戦争のシステムに則ってはいる  
が、それは効率的とはいえない。

通常人間の魔術師では一体以上のサーヴァントと契約しても、キャパシティが足りずに  
サーヴァントの能力を維持することが出来ない。

凛が自らの魔力の何割かをアーチャーに分け与えているように、彼もその魔力を——。

「……そうか。それこそ半人前なんだっけ」

衛宮士郎はセイバー一人にすら魔力を与える事が出来ないのだ。現世への楔として存在す

るだけのマスターなら、何体と契約しても変わらない。

しかし、それは何ら彼らの利点へと繋がらない。魔力の供給を受けられないサーヴァントは既に大きく能力を減退されている。

「そこに、セイバーとキャスターを倒す鍵があるってことね」

今の状態でもセイバーの力量は並みのサーヴァントを大きく上回る。キャスターにしても、柳洞寺に居たほどではないが水準の魔術師を超える能力を秘めているだろう。

ただ、この二体の性能は驚くほど相性がいい。

キャスターの天敵は優れた対魔力を持つセイバーであり、弱点は言わずとした接近戦。反対にセイバーは、接近能力と対魔力こそ特出しているが遠距離攻撃を持たない。――組み合わせにおいて、これほど厄介なものはない。

「……まあ、本来はキャスターの役割をマスターである魔術師が担当するんだけどね」

あの半人前ではそこまで望めまい。

――しかし、その半人前にも幾つか気がかりなことがある。

戦闘中であまり詳細に見えていなかったが、彼の使った魔術とよく似たモノを使う存在が

「……？」

疑問の気配が伝わってくる。霊体化してはいるが彼が居るはずの空間を凝視されているの

に困惑を抱いたのだろう。

慌てて視線を逸らす。

いくらサーヴァント同士の相性が良いとはいえ打倒の策は簡単だ。

セイバーとキャスターを有する衛宮士郎は今や難敵になっているが、魔力供給の出来ない彼女たちを倒すには、戦闘で打倒する必要すらない。ただ持久戦に持ち込めば勝手に魔力が枯渇し、消滅するのみ。

あるいは、以前のようにキャスターが他人から魔力を吸い上げる可能性もあるが、それは無いと凛は否定していた。

衛宮士郎のような、どこまでもお人好しな人物がそのような行動を許すはずもないからだ。

そして、——信じたくないことではあるが、キャスターもそのような人物であると承知で彼に手を貸しているように見えた。

以前の彼女なら、桜の持つ枷のみを破壊するなど生温い手段は使わなかつただろうに——。

彼を敵とするのか、あるいはどのような位置付けに据えればいいのか、凛の中に葛藤が生じている。

あちらにも表立って敵対する意思はなさそうだが、どのような行動を取るのか少し視野にいられてこちらも動くしかあるまい。

「戻らないのか？」

アーチャーの問いに凜は思考を打ち切った。

「今いくわ——ああ、それと」

思いついたことを彼に命じる。

その様子にアーチャーは一つ覚悟をいれて立ち止まった。

彼女がこのように何かを思いついた時は、ロクなことが起きないと知っている。

きつと調査は終わらず継続される。しかし、サーヴァントである彼にとってそれは望ましいことでもある。

S

扉が開かれる。

鍵は掛かっていたが、魔術による物ではない。

ならば何の障害にもならず、扉は開鍵の魔術を抵抗なく受け入れ、遠坂凜は間桐邸へと入り込んだ。

「こんな形で盟約を破ることになるなんて……ね」

遠坂と間桐の間には絶対不可侵の盟約があった。

この地に降り立ち、聖杯戦争を開始してから二百年——その一度として破られた事のない地に、彼女は足を踏み入れている。

「……馬鹿みたい。相互不干渉が盟約だなんて言うなら、そんなのとつくに——」

それこそ十一年も前に破られている。

相互不干渉なら、マキリの衰退だって放っておけばよかったのだ。

マキリの祖は海外からやってきた魔術師の一族である。

この地に根付いてから、土が合わずに衰退した——と言うが、真実はそのようなものではないだろう。

マキリの衰退は既に始まっており、そのために聖杯を求めたのだ。

遠坂は土地を提供し、マキリの力に目を付け盟約を結んだ。

これにアインツベルンを加えた、二百年——あるいはそれ以上にも渡る聖杯への悲願だ。

互いに相互不可侵として、ただ一つ願いを叶える為に利用しあう——そんな魔術師らしい関係。

——だけど、そんなのどうしたっていうのだろう。

凜の目にはそれが埃を被った泥まみれの空約束にしか見えない。

利用しあい互いに潰しあう気で手を結んだ彼らの不可侵など、どれほど役に立つというのか。

しかしその綱渡りのような盟約はこうして守られ、凧が入るまで遠坂は間桐の敷地に踏み入れたことはない。

それを凧はタワゴトだと切って捨てる。

盟約を破った事による後悔はない。

ただ、がらんどろになつた洋館の中で

「……そっか、父さんの言いつけ、初めて破つたんだ……」

ぼつりと感傷を思い起こした。

だがしかし、それらいずれも凧の心に何の悔恨を残す物ではない。いずれ破ってしまう盟約なら、もつと早くやればよかつたと思つた。

間桐桜を自宅に招きいれている以上、彼女がここに来るのも必然だ。

彼女のこと、衛宮士郎に対する勢いで啖呵を切つてしまつた結果に過ぎない。頭に血が昇つてカビの生えた盟約なんてすっぱりと忘れきつていた。

でも――

――とても綺麗でした。そして懐かしかったです。

そんなことを言われては、もうダメだ。

盟約なんてどうでも良かったのだと、その時はつきり思い知らされた。  
こんな家に縛らせておくくらいなら十一年前のあの日、妹を返せと怒鳴り込んでやればよ  
かった――。

「……アーチャー、どう？」

悔恨と感傷は胸の内に、今の彼女は魔術師として行動する。

ここは敵地だ。油断は出来ず常に神経を尖らせる。

アーチャーを連れているのもそのためだ。昼間遭遇したサーヴァントが闇の隙間から狙い  
をつけている危険がある。

「階段が地下に伸びてるな……本来あるはずのない空白がある」

「一階？ 隠し階段でもあるっての？」

「いや、これは二階だ。部屋の間間を使って巧妙に間取りを誤魔化している」

「そう……」

このサーヴァントも妙だ。

家事やお茶を入れる手際もそうだが、構造物の間取りや物の設計を見通す能力が極めて高  
い。

キャスターの放った影にまとめて精気を搾取されたオフィスを見つけ出し、拠点を潰して  
いく時。または学校に張られた結界の基点を壊し発動を遅らせていた際には大いに役にたつ



ただが……。

「アンタのその特技、弓の騎士としてはちよつとどうかと思うんだけど」

「——私に言われても困る」

困惑した気配が伝わってくる。

それにしても妙な英雄だと、今さらながらに思う。

その思いは召喚した時から回つて回つていたが、ここ最近になってさらに増した。

例えば、衛宮士郎の自宅でセイバーと戦った時だ。

彼の放つ矢はセイバーの作り出した空気の断裂をあつさり破壊するほどの威力を見せた。

宝具を凌駕されたセイバーが弱いのではない。彼女の空間を切り裂くような風は、間違いな

くAクラスに該当するだろう。

自分の奥の手である十個の寶石に匹敵するほどの威力だ。一つ一つが発動させればAラン

クに相当する凜の寶石を使つてなお、相殺するのが精一杯というシロモノだ。

これを宝具として考えるなら、ランク制限は更にきつくなる。生身の攻撃、魔術でA相当

の攻撃であろうと、宝具であるならCランクが打倒な所だ。

しかし、セイバーの宝具はそれでも家屋を丸ごと吹き飛ばすほど、絶大な威力を持つてい

た。

つまり正面から防御ナシに喰らえば死を免れない、宝具に相応しい『致死性の一撃』だ。

それを防ぐのでも相殺するのでもない。アーチャーの一撃は風ごと巻き込んで、更に空間を捻じ切るほどの威力を見せた。間違はなくAクラスの宝具に該当する。  
 強力な宝具を持つている——それ自体は構わない。が、発動するためには幾つか条件がある。真名を持つて解放する大前提はゆるぎなく、真なる奥の手はクラス分けされたサーヴァントに由来する。

仮に類似する魔術を使ったと仮定する——これもダメだと凛は考えを捨てる。  
 いかな英雄といえども、あの時アーチャーが見せた僅かな詠唱で、同じ威力を再現できる人間がいるとは思えない。

アーチャーの奇妙さはこれに留まらない。

彼の使った技を真名を使わず宝具と弓のみで再現する方法が一つあるが、こちらこそ常識では考えられない使い方だ。

自らの宝具を矢として放つ——確かにこれは弓の騎士の名に相応しい攻撃だ。しかし、その矢が取り返しのつかない一度きりの使い捨てだったらどうなのだろう？

英雄とは生前にもつ数々の聖剣、魔剣をしてそれらに該当する防具や技とセットで考えられる。

彼らは英雄と呼ばれるべくして呼ばれ、神々の寵愛を受け、あるいはそれに対する敵対者とされた元人間たちだ。

共通項としては力を持たない人間が英雄として祭り上げられる事はまず無い。誰かを救う——または滅ぼすためには力が必要だ。人々に降りかかる災厄を振り払い救ってこそ英雄なのだから。

——だから、英雄と宝具は一つのものとして教えられる。彼らが英雄と認められるに相応しい武器、防具は己の生涯を象徴する唯一絶対にして単一の物。

アーチャーが使ったように、自爆させて攻撃する使い切りの方法なんてできる訳がない。宝具を複数もっていようと、それぞれが自己を形づくる取り返しのつかない武器だ。

いくら複数の宝具があっても、その生涯を共にしたもう一つの自己を破壊し——戦わずして自害するに等しい行為は行えない。

英雄における禁忌を行い、平然としているサーヴァント——アーチャーは彼の気質のみに留まらず、その在り方も奇妙だった。

「……どうした？ 何か考え事か？」

「なんでもないわ——それよりアーチャー。いい加減自分がどこの英雄か思い出せた？」

「——さてな。こればかりはどうにもなるまい」

「そう……」

どこまで本気かそろそろ疑わしくなってきた——が、そのくせアーチャーに翳った部分が

ない。

遠坂凛を信頼し、マスターとして全権を委ねているのは事実なのだ。彼女を謀る算段は無く、凛の意志に最大限従って聖杯戦争に挑んでいる。

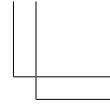
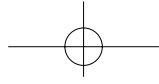
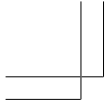
この無言の信頼を頼れるものとして受け止めてはいるが、困惑させる原因でもある。彼は二心を持たず、しかし全てに答える訳でもない。

彼女は彼を信頼し、信用しているが故に気に掛かる。

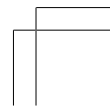
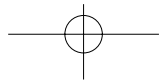
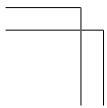
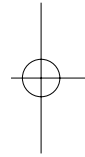
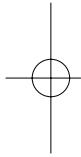
——相反しつつも、どこかで合致する感情は厄介だった。  
「いくぞ。そこにマキリの工房があるのだろっ」

「——」 わかった。アサシンと臓硯への警戒を」  
「承知」

言葉は短く、階段を昇った。



195



## Interlude / 9 Lancer

まだ日暮れの話である。  
奇しくもライダーから三刻の時を隔て、同じ位置、同じ山門の前に青いサーヴァントの姿があった。

山門を守っていた障害は既に亡く、妨害を受けない青い身体は、月光の下、軽やかに境内へと降り立った。  
長身とそれを遥かに超える赤柄の魔槍。瘦身はしなやかでいて力強く、草原を走る肉食獣を連想させる。

この地で戦いがあった。  
主であったキャスターはセイバーに敗れ、何の因果かセイバーの主の元に今はいる。  
「あの小僧。面白れえな」  
心臓を刺しても生きていた少年。

絶体絶命の危機を乗り越える運と、セイバーを召喚できた事実。未熟な上に星の巡り合せの悪いつまらない子供かと思ったが、なかなかどうして退屈しない。

次に会う時は殺す時かもしれねえとランサーは内心で思っていた。——が、しかしそのような突拍子も無い行動をする存在なら、今再び顔を見に行くのも楽しそうだ。

あの魔女がどのような面をして、小僧と暮らしてるのかを想像するが、ロクにイメー  
ジがまとまらない。

へっとなげき飛ばし、アレが主なら退屈しなかっただろうと、厳格な神父の顔を思い出し苦笑した。

——所詮は無理な話だ。

彼が少年を気に入るならば、更にロクな機会は無いだろう。

どうも自分には、気に入る相手こそが敵に回る因果な宿業があるらしい。それを悔やんだ事は無いが、もうちよつと気楽にいきよと彼は思う。

ランサーは無造作にお堂を目指した。

彼の思う通り、既にキャスターはこの地を離れた。

山を覆う結果こそ健在だが、地脈を弄る魔女の技は彼女と共に離れている。

それ故、既に無人となったこの地に敵は存在しない。彼の鋭敏な感覚を持つてしても、この場に敵対するサーヴァントは居ないと告げていた。

——だというのに、宝具たる赤い魔槍を片時も手放さない。

この槍はランサーの意思で自由に具現化する。戦闘時であるならともかく、敵のいない状態で常に構え持つ必要は全く無い。

それでもなお、彼は槍を手放さない。

彼は諜報と監視を主目的に動いている。

本人は甚だ不本意のだが、マスターがそう命じたのならば仕方がない。命令には従い、注文通りの結果を出すのが彼の信条。

たまに遊ぶきらいはあるが、そのくらい娯楽にも入らないと迷いもなく思っている。

今回も柳洞寺の調査が目的だった。

彼の意志ではなく、マスターの指示を受けたが故にここに来ている。

キャスターの調査なら、衛宮士郎の家こそ監視に赴くべきだろう——しかし、どのような意図があるのか彼のマスターはこの地を命じた。

「チ、酷<sup>酷</sup>でえ臭いだ。鼻が曲がりそうだ」



境内には腐敗と、虫の臭気が漂っている。  
なるほど、ここはロクな場所じゃねえと納得した。  
もうすぐお堂に到達する。

「キイキイキイキイ——ほんとウルセえな。手前から蟲共が主のいなくなった廃屋に住み着くのは常套手段だろうが、程度ってモノをわきまえろ」

誰かに聞かせるように、悪態に徐々に熱が籠る。

「その上一匹デカいのがいるな。どの生まれか知らないが山奥で獣に紛れて暮らしてたって面してやがる。蜘蛛かとも思ったが汚ねえ砂虫かよ。」

ああ……やだやだ。なんだってこんなしけたヤロウの偵察なんかしなきゃならねえのか、まったくもってつまんねえ任務だ」

悪態は止まらない。

この中はセイバーとキャスターが戦った場所だ。何も出てこないならば、ついでに中を一度見物しておくのも悪くは無かろうと足を踏み入れ——。

かすかな風切り音の後、続けて金属を弾く甲高い音が鳴り響いた。

「又」

声はお堂の中より、闇夜に白い髑髏があらわれた。

気配を断つ術に狂いはない。ランサーが事前に感知できた理由はなかった。必殺の短剣を続けて放つ。

彼の武器は身長を遥かに超える魔の長槍。

利点は弱点となり、点として飛来する短剣を弾く事は困難に近い。

そして、槍は振るうたびに返しが長い。セイバーが剣で弾くのは訳が違う。それゆえ必殺。槍では短剣を防げないという、単純な事実が残るのみ――。

だというのに、困惑を発するのはアサシンの側だ。

「ほう……なかなか達者な芸だが、俺に投げ物は上手くねえ。もったいねえからやめとけって――それに、テメエにとっては命取りだ」

ブンと一振りし、肩に担いで気楽な調子で言う。

髑髏の姿が消える。

――戦いはそれで始まった。

白い髑髏は奇声を上げランサーへと襲い掛かる。

闇夜に黒塗りの投擲短剣は見えぬ速度で飛来する。

それを相性の悪い長槍で弾き返すランサーに、困惑は徐々に高まっていく。

高速で放たれる投擲短剣は、切り付ける線ではなく点として放たれる。そして昼間のセイバーのように、視野が開けた場所ではない。初撃を防いだのは偶然。

二度目は天運。

——だとしたら、三度目の防衛は何を意味するのか。

距離を離れてはよくない——。

アサシンは距離の利を捨て、至近距離から連射する。

彼の短剣は決して遅くない。人間の目にはそれこそ影としか映らぬだろう。

速度はアーチャーの弓にも匹敵し、加えてその数は比べ物にならない。

白日の元とは違い闇の利を生かし、真なる不可視となって放たれた短剣はゆうに三十を越えている。

その全てをランサーはこともなく弾き返した。

それは偶然でも運でもなく異常であるということに、ようやくアサシンは気がついた。

「なかなか腕はいいがよ——もしかして、テメエそれしか芸を持ってないなんてこたあ

ねえよな？」

ランサーの気配が変わる。

諜報と観察の責務は果たしたとばかりに、口元を吊り上げ目の前の暗殺者を睨みつける。

楽しげに笑う口元とは裏腹に、放たれるのはまごうことなき必殺の気。

様子を伺うだけのモノから、確実に殺すために移行する。

「ならこれで終わりだ。——テメエがどこの生まれの何者かは知らねえが、その仮面くらい剥がせもらう」

「キ！」

黒衣が跳ぶ。

更に詰まった距離を、もはや乱れ矢とばかりに短剣を打ち出す。

速度は増し、髑髏に突き込むランサーに対してカウンターと放たれた高速斉射。

「それも防がれた。」

元より視認できる速度ではないのに、見えているかのように穂先を揺らすだけで全てを弾いた。

髑髏の面が震える。

弱点について戦えた時とは違う。

この場はランサーと彼の一对一。元より人間を殺す事に特化したクラスである。その彼が目の前の槍兵に勝てる道理は存在しない——！！  
眼前に迫る穂先に蟲の思考が悲鳴を上げる。

「ッ!!」

声に漏らす無様は全力を持って回避した。

首を狩ろうと迫り来るランサーを睨みつけ——。

ランサーは勝利を確信したのか穂先が僅かに揺れる。直死を逃れる唯一の隙をアサシンが見逃すはずはなく、槍の上を跳び、至近距離から跳躍と喉元目掛けて投擲を行った。

一間と離れていない距離からの短剣を避ける術は存在しない。

——だというのに、それもあっさり弾かれた。

「キ……!!」

跳躍は同時に逃走となる。

完全に隙をついたはずの攻撃を防がれた今、残された手段は存在しない。

そこに、まるで木板を打ち砕く音がして、黒衣が一度大きく跳ねた。突き出した槍はそのままランサーの手元で回転し、真円を描いてアサシンの顎を跳ね上げる。

彼に見せた隙こそ罠。動作は一呼吸に満たず、まったく同時に行われた。それをアサシンが防げる道理は存在しない。

「……………」

——青い槍兵の宣言通り、面が落ちる。

ランサーはそれをつまらなそうに見下ろしている。

必殺の機会ではあるが、追撃はかけない。彼に許された行動は観察するのみ。一度目に遭遇したサーヴァントを殺し尽くす事は許されていない。

「——馬鹿が。言ったろう？ 俺には飛び道具は上手くねえ。忠告を聞かずに自滅するなんて三下だぜ」

地面に這いつくばる虫に告げた。

黒衣は大きく翻り、左手で顔を覆っている。

右手は包帯に包まれ肩より一つとなって固定されている。

あの投射を左手のみで行ったというのなら、その技量こそ見上げた物。

そして放たれる投擲短剣を全て弾き返したランサーの力量も際立っている。

「キサ——マ。そう……か、流れ矢ノ——加護か。……キサマといい、せいバーといい、名付キの英雄ハ、私ナドとはタシかに違ウ——」

「生まれつきでな、見えてる距離から放たれる飛び道具には当らねんだよ。よほどの宝具でもない限りな——さてと、面の下のツラ押ませてもらおうぜ」

「——なぜ殺さヌかと思えバ、ソウ、か。余分なシバリが……あつ——た、のか」

「どここの英雄かは知らねえがテムエもサーヴァントだろう。きっちり吐かせてもらう」

這いつくばった蟲が身を縮めた。

蜘蛛のように四肢を広げ、身体を丸める。

先の跳躍を飛び掛る蟲とするならば、今度は逃走をうつつ動物か。

ランサーの前で蜘蛛がはじけた。

大きく跳びながら短剣を放つ。

一足でお堂の屋根に降り立った暗殺者は、裏手の山に向けて逃走を図る。

「チ、舐められたもんだな」

青豹が疾走る。

地上から離れる跳躍力が地を跳ねる虫ならば、その歩法は蜘蛛に等しい。

面を隠したまま地を滑り逃走を図るアサシンは、逃げ足のみならランサーと互角だった。

サーヴァント随一の瞬発力を誇るランサーが追撃において、秒を越えるなどあつてはならないことだ。

追いながら彼は、目の前の英霊のおかしさに気付いていた。

「……確かに喉を潰したのに元気なヤロウだ……。ありや治癒とかの類じゃねえな。葉でトんでやがるのか」

ハッシカそれとも見知らぬ薬品を使っているのか、どちらにしる正純な英雄ではないだろう。

アサシンの奇妙な歩法は水上に置いてなお健在だった。

水蜘蛛如く水面を滑り、波紋一つで走り続ける。

対するランサーは激しい水飛沫を上げているが、その速度はここに来てアサシンの逃走を許さない。

「――痛みで止まらねえなら足の一本切り落としておけばよかったか……。他の連中には



あまり効かねえ手だからな——」

だから、次の一突きで決めると決意した。

アサシンの背は間近に迫っている。

追いつくまで持つて数秒。足止めを狙うのではなく、ヤツが止まる時は四肢のいずれかを失う時だと魔槍を構え——。

次の瞬間、ランサーは大きく跳躍していた。

「!?」

水面が爆発した。

中に潜んでいた何かが、まとめてランサーに牙を向く。

黒い薄っぺらい布のような「なにか」が虚空に飛び退くランサーを追った。

「な——こ？」

彼は知らない。

この影が戦闘を行うセイバーの前に現れたことを。

渴望する魔力に餓え、陣地たるこの場所に潜んでいたことを。

そして彼は理解する。

この影は危険であり、じつと網を張り獲物を待ち望んでいたことを——。

着地と同時に、槍の穂先で水底にありつたけのルーンを刻んだ。

防御結界は張られた。ランサーの持つ全ルーンを投入した守りは上級宝具の一撃すら防ぐ。

ならばここは堅牢な砦として、不気味な影の進行は止まるはずだった。

——しかし、周囲を取り囲まれたランサーに逃げ場はない。

「これは……！」

影はランサーの守りをたやすく侵食し、魔力を求めて腕を伸ばす。

布のようにしか見えないソレが危険であることを、彼は戦士の勘で理解していた。

「どうした、らんサー。動かねば、飲ミニマれるぞ」

水面に浮かぶ髑髏が嘲笑った。

だが、彼とて例外ではない。

この黒い影が誰であろうと捕食するのか、決してランサーに近寄らない。

近寄れば、この足に捕まり即座に新しい獲物として食われてしまうと知っているのだ。

「だが、ソレは待テン。オマエを仕留メ、足りナイ知能と経験ヲ、補わセテもらう」

召喚より五日、この戦いも含めて既に二度敗北している。アサシンにとってそれは急務であり戦い抜くための必然だった。

再び短剣が放たれた。

動けぬランサーはていどいい的に過ぎない。本来なら致命的な一投だが、それは無意味だ。

いかに周囲が影に覆われようと、ランサーに宝具ならぬ投擲武器は通用しない。

「――飽きないヤツだな。この状況じゃ強気になるのも分かるが」

あつさり短剣を弾き返し、距離を伺う。

誘いにのり池の奥へと来てしまったが、対岸までは三十メートルほどで届く。

この距離なら、容易く――それこそ一息で跳躍できる――！

「そこで動かなかったのがダメの負けだ。俺が足止めされてる間に逃げればよかった」身をかがめる。

ルーンの守りは未だ持つ。槍が限界までたわみ、放たれるのを待っている。

槍の反動を借り、対岸まで跳躍しようと地を蹴る瞬間――。

ぞぶり、とアサシンの攻撃が放たれていた。

「な——に——」

黒衣の姿は動いていない。

この長大な距離を経て、彼の一撃が届いていた。

ランサーは知らない。

これこそがアサシンの宝具『妄想心音』

偽りとはいえ、遠距離からキャスターの防御を貫通し、心臓を抉りだして一撃の元に葬り去った中東に伝わる呪いの魔手。

人を呪う事に特化されたその手は、人を指し示すことで不運を仕掛けるガンダの原型とも言われる単純化された呪いの宝具。

ランサーに生み出された偽りの心臓を抉り出す事で、本物の心臓を破壊する。

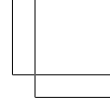
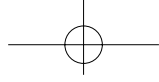
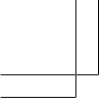
彼の槍が因果を捻じ曲げ、心臓に突き刺さった結果を作り出すのならば、

彼の手は世界を捻じ曲げ、偽りの心臓を抉り出す。

防御の上から直接心臓を握りだす技を防ぐ術は有らず、ただ偽りの心臓を生み出さな

いという、アサシンの宝具を上回る純然たる魔力が要求される。

本体と同等の守りを持つキャスターの影が倒された理由がこれであり、



ランサーのルーンの守りをもってしても防げない理由も同一の物。

心臓を掴み出された青い槍兵は、そのまま力を失って水面に倒れた。

ばしゃばしゃと——獲物を求めて、影がはためく。

それほどどこまでも食欲に喰らい、ランサーだったモノを取り込んでいく。

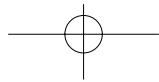
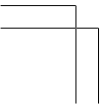
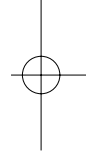
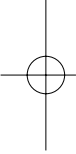
ピラニアの群れに生肉を入れたとて、ここまで凄惨な食事は無い。餓えたハイエナとて、腐肉を前に上品だろう。

無数の布のような黒い手足が、クー・フリーンと呼ばれた英雄を喰らっていく。

それを愉快に眺めた後、水面のサーヴァントはぐびりと手にした心臓を飲み干した。

戦闘は終わった。

英雄を喰らい尽くした影は地下へと去り、暗殺者は主の元へと降り去った。



自然に目が覚めた。  
枕元の時計を見ると、時刻は朝の五時を示している。

二月九日。土曜日。

まだ外は薄暗いが雨の気配はなく、湿度も高くない。天気はどうかやら快晴になりそうだ。  
清々しい朝に布団から跳ね起きようとして

「っ」

腕が痺れて、崩れ落ちた。

「なんだ……？」

寝違えたのだろうか——と考え、ふと昨夜はどうだったかなと思う。

昨日は全身が脱力していて、上手く体が動かなかった。疲労により記憶が飛び飛びになっている。そんな状態では痺れが残っていても気付くまい

よく分からないことを考えても仕方がない。

ま、いつかーとはかりに、体を起こした。

ふむ。どうやら左手を中心に、左側全体が痺れているらしい——。

こんな大規模に寝違えるなんて器用にも程がある。  
暫くすれば治るだろうとたかを括り、少し不便を噛み締めながら急いで着替え、居間へと向かった。

まだ屋敷の中は眠りについていていた。

居間には誰もおらず、電気も全て消えている。

セイバーは朝食まで寝ているだろうし、キャスターは……。

「……そういや、キャスターの生活習慣がよく知らないな」

どうも抵抗感があつてキャスターを起こしに部屋に入るのは気が引ける。

——が、幸運にもそんな機会はなく、彼女はいつも気がついたら起きていた。

お寺で人間として生活してたつて言ってたから、朝はそれなりに強い方だとは思うが……。

「ま、いいか」

今朝二回目の棚上げを決行した。

そのうち、おいおい分かつてくるだろうし、キャスターはあまり他人に私生活を介入されたくないタイプに思える。もっともコレは完全に勘なのだが。

いつもの習慣で学校にあわせて眼が覚めてしまった。

聖杯戦争が終わるまでは休むつもりだし、それに——。

視界がぶれる。ノイズが走るように、悪夢の世界を思い出した。

—— あんなことがあったのでは、休校になっているだろう。

「そっか……藤ねえも、来ないんだ……」

そして桜も居ない。

「あ——れ……っ。」

なんだか、胸が苦しくなった。

右手で抑えてこみ上げそうになる胃を抑える。

元から力の人らなかった左足から力が抜け、すんと畳に膝をついた。

——この屋敷は広い。

切嗣と二人で暮らしていても広すぎた。

もともと親父は海外を飛び回っており、半年に一度帰ってくるかどうか——だから、家に

は殆ど俺一人だったんだ……。

ここは人の居ない家だった。

藤ねえはママに顔を出してくれたが、一緒に住んでいるわけじゃない。

桜はここに来るようになって、一年半しか経っていない。



二人とも住み込みでもないから、誰か一人出かけると広い屋敷から誰の姿もなくなってしまおう——それでも。

「……それでも、助けられていたんだ」

思い出が少ないから。

大事な物が少ないから、それだけは守ろうと思っていたのに。

俺の未熟で彼女達を傷つけてしまった。

そんなの今さらだ。

魔術を学び始めた時点で、いずれこうなるとわかっていたはずなのに……！

ごろんと畳の上に寝転がった。

仰向けにぼんやりと天井を見る。

人の居ない空気は冷たく、畳も冬の空気に冷やされている。

まだ人の起きない時間だ。街は眠りに包まれていて静寂に包まれている。

——眼を瞑った。

視覚情報は人間の得られる情報の七割を占めているらしい——こうして眼を瞑って、自己に埋没する。

そこにはぼつかりと大きな穴がある。

それは、十年前の火事で空いた穴だ。

一生懸命蓋をしたはずなのに、ふとした拍子で空いてしまう。

——最近はこのことなかったのに……。

この家に来た時は、それこそ毎晩のようにうなされていた。

父さんと母さんを探して、夜に一人焼け跡に彷徨い出たこともある。

もしかしたら——無くなった家の前に二人ともいて、探していたと抱きしめてくれる姿を想像した。

でも夢だ。

過去に希望を持っているなら、そもそも切嗣の養子のお話を受けたりしない。

だから、既その時、子供心に既に帰る所はないのだと知っていたんだ。

それでも——。

俺は帰らなかったんだ。

現在に希望はない。

未来も希望がない。

過去は絶望に彩られている。

全てをやりなおし、無かった事にしたかったんだ。

それが、胸の中に空いた穴。

喪失感という、子供だった「ボク」が死に絶え、衛宮士郎という「俺」になった原風景

「ふざけるなよ……」

……頭に来る。

こんなこと思うのも、昨夜変な夢を見たからだ。

夢の中でも否定したことを、起きてからもずるずる引きずってるなんて腹が立つ。

全てをやり直したいなんて嘘だ。

胸にはぼつかりと大きな穴が空いている。

しかし、切嗣と暮らしはじめ、藤ねえと出会い、様々な人に助けられて俺は少しずつその

穴を塞いできた。

完全に埋まらなくても、それが衛宮士郎の人生なんだって思っていたんだ。

それをなんだ――。

こんな時に！ こんなことで……！

藤ねえが傷ついたことは許せない。

屋上で桜が苦しみ倒れている。

あんな光景、二度とごめんだ。

その気持ちに偽りはないが、でも、それと全てを無くしたいなんてタワゴトは全く別だ  
 ……！

——そうだ。だからこそ、次は止める。

あんなことにならないように、戦っていく——。

聖杯なんて要らないと俺は言い、今もその気持ちに変わりはない。

聖杯を求めるために、人を傷つけるマスターと戦っていくと俺は誓った。

ならばやることは明確だ。

間桐臓硯とあの黒い影。

この二つを、今はつきりと敵視した——。

§

軽く朝の支度を済ませ、土蔵に入った。

結跏趺坐の姿勢を取り精神を集中させていく。

学校で一度掴んだ感覚は健在だった——が、

「くっ」

苦痛が洩れる。朝起きた時は左半身が上手く動かないだけだったのに、どうも集中すると

痛みが出る。

そりゃ半人前が昨日アレだけ無理をしたんだから、体に後遺症が出ていてもおかしくない。袖をまくって見てみると、左手が所々黒くなっている。

色が変わっただけで痺れ以外感じないから、壊死してる訳じゃなさそうだが、どうにも心臓に悪い。

なんというか……何か似た物に覚えがある。

土蔵の中を見渡すと、相変わらずゴミと元ゴミだった修理品、現在ゴミから復元してる品々が眼に移る。

そのうちの一つにドライヤーがあった。

これは修理はしたものの試しにコンセントに挿し電源をいれてみたら、風を送るフィンが上手く回ったのだが熱を出すニクロム線の所が上手く行かずにショートしてしまった欠陥品だ。

部品の取替えは上手くいったはずなんだが、どうも位置付けが上手く行かずに互いに接触していたらしい。それで、完全におしやかに粗大ゴミ化したのだが、今も他のゴミとまとめようと思いついてそのままにしまっている。

外見は修理が済んで全てのパーツが揃っている。一見どこもおかしくないのに、電気を通すと途端に欠陥が明確になり回路が焼け付く——なんだか、今の俺の状態に似てる気がした。

「……つて、このまま魔術使えなくなったりしたら……」

くそ、決意したばかりなのに、いきなり嫌な未来を想像して落ち込みそうになる。

だから今は無理をせず、精神を集中させ自己への埋没を行う事にする。

——学校で魔術を使つた時、驚くほどスムーズに魔力が流れた。

あの感覚——自分の中心を走る神経から腕を通り手と指、それから更にその先へと流れる魔力。『強化』と『投影』の発動に至る、魔術が成功した感覚を忘れてはいけない。

アレは衛宮士郎が持ちえる数少ない魔術だ。

なんとか早いうちに使いこなし、戦い抜くための力にしなければならぬ。

目を閉じ、自己の中へと埋没していく。

魔術師は外界と戦うに非ず——自己を媒介として世界に接点を生み出していく。

——だというのなら、俺に何ができるのだろう……？

——俺はこの戦いで、何をしなければならぬのだろう。

いつまでも思考が渦巻き答えは出ない。

じんじんと、感覚の鈍い半身が熱くなる。

——焦るな。

俺は足を引く張るだけの半人前だ。

でも、それでも使える魔術があるのだから、何ができるのかを考えなくてはならない——。

「このような所で、ずいぶん熱心なのね」

一時間もした頃だろうか。

土蔵の入り口にキヤスターが立っていた。既に太陽は昇り入り口の姿が逆光になっている。シルエットはよく分かるのだが、表情はよく見えない。と、彼女が一步入ってきた。電灯に照らされ、ようやく識別が可能になる。

今朝の彼女は重苦しいフードはなく、それ以外はいつもの紫色のローブ姿だった。

「おはよう。……朝、早いな」

「——現世で今まで暮らしていた所が、あの場所ですからね」

どこかそっぽ向いて言う。

「そっか。キヤスターは柳洞寺に籠ってたんじゃなくて、一緒に生活してたんだ。なるほどそりや確かに早い。あそこは一成もお寺の人たちも皆早起きだもんな」

「坊やも泊まったことが？」

「い——いや、無い。一成や零観さんに話を聞いてるくらい」

「何を焦ってるの？ 変な子ね」

——一成たちに寺にスカウトされてるなんて口が裂けてもいえない。

彼らなりの冗談だと思いたいが、付き合いで数日修行なんてしたら、気付かぬうちにそのまま永久就職してそうだ……！

だが、それも過去の話になっている。

今、一成を始めとするお寺の人たちは山を降りている。

衰弱による緊急入院——あれから柳洞寺は事件現場として封鎖されたい。そして、それを引き起こしたのが——。

「……………」

目の前にいるキャスターだ。

そのことについて、今も複雑な気持ちを持っていることを否定できない。

しかし、一度目——アーチャーとの戦いに介入した時は偶発的でも、昨日確固たる意志を持って俺を助けてくれた彼女を憎む事は出来なかった。

「あー、その、さっきから聞きたかったんだが」

「あら、ちようどいいわね。私も坊やに聞きたいことがあるのよ」

「んん？ 物騒なことじゃなければ何でも聞いてくれて構わないよ。……でも、火力は抑えてもらえると嬉しいかな」

最近のキャスターは元気になってきたし、一応とはいえ契約を交わした後だ。自己の存在に割っていた魔力をほかに回せるようになったキャスターは、かなり楽になってるに違いな



い。

今まで使えなかった分、魔術をぶっ放して景気付けするとかでなければいいんだが……ま、それはともかくとして、俺は彼女のことを魔術を教えてくれる師であり恩人と思ってるし、大抵のことは大歓迎だ。

でも自宅内じゃキッチン以上の火気厳禁。後は武装も。これは絶対の不文律にしてセイバーにも言い聞かせないと。

「……ちよつと。坊や」

「この付近だと……柳洞寺まで行かないとダメか。あそこ森なら広いしなんとか待ちなさい、とキヤスターが張り手の勢いで手を突き出してきた。

なんだと思つて顔を上げると、

「——それも前から聞きたかったのだけど、坊やは私を何だと思ってるのかしら……？」  
なんか青筋立ててる……っ!?

お、おかしい。何か間違ったのか。

「い、いや何って——ナニが!？」

「いいから。今なんて思ったのか、起こらないから言ってみなさいボク」

笑顔がメチャクチャ怖ええ!

「たいしたことじゃない……」

「それを判断するのは私です。ドゥーユーアングダスタン？」

「英語」〜「それは——あまりに正体不明だ——！」

元々、国籍どころか人種まで不明なのに。

「……わかった。といつても本当にたいしたことじゃない」

「……」

遂に、形のいい顎でくいつと促すだけになった。

この人育ち良さそうなのに、なんだか、どうでもいい部分で付き合いたいんだよなあ。いや、育ちがいいからノリもいいのだろうか。それとも実は根がいいのか？——過去の言動思い出すと、これが一番可能性ありそうだ。

ともあれ不毛なやり取りを続けていても仕方ない。

赤面しそうな勢いで、思ってる事をそのまま言うことにした。

「あー、うー……。その、最近、少し元気になったみたいで良かったって思ってる」

「……」

「うちに来た時は——あんなことがあった後だから仕方ないんだけど、よそよそしかっただろ？……後、昨夜も言ったけど助けてくれて感謝してる」

もう何言ってるのか分からなくて、頭がぐるぐるしてくる。

「……」

対するキャストも無言だ。

どうせ呆れてるんだろうと思ひ、気恥ずかしくなって強引に打ち切った。

「あー。その、そんなトコ」

火力は控えめにとは、怖くて言えなかった。

「——案の定、こちらを睨んでる。」

いや、殺気は感じないから、どつちかというと、ちよつと気分を害したっぽい感じか……？ どうも女の人——それも年上は経験値が少ないからよく分からない。

一番付き合ひのある年上の女性が、あの虎だし。

「すまん……いきなり変なこといって、気分悪くしたよな……」

「……はあ」

そして、何故か盛大に溜息。

「——？」

「坊やもう少し言葉とタイミングを選びなさい」

「だよな……すまない」

「——それが分かってないというのですが、何か要求するだけ無駄なのだと諦めました」  
よく分からないが諦められてしまったらしい。

自分の未熟が嫌になる。

「そっか……不詳の弟子で申し訳ない」

「……え？」

「いや、魔術、これからも教えてくれるんだろう？ そっちが師匠で俺が弟子……で、あつてるよな？」

キヤスターが俯く。

前髪に隠れて表情が見えなくなる。その様子に、とうとうこつちまで見放されたのか——と身構えたのだが——。

「ふ、くく……ははは、貴方、本当に飽きないわね——ふふ」

笑われてしまった。

「ちえつ。いつか笑われるだけから卒業してやる」

「そうなさい。貴方は魔術師としてこれ以上ないほど未熟ですが、稀有な才能もっている。

——ええ、本当におもしろいわ。惜しいくらい」

「……いや、笑うのはいいけど、その笑みはやめて欲しい」

脳味噌の奥まで値踏みされてるようで、本気で怖いから。

「——そ、それで俺に聞きたいことって……っ。こんなことじゃないんだろ？」  
「そうでした。今、師弟の話が出たので丁度良いのですけど」

早朝から、魔術の講義だろうか？

唐突な印象は否めないが——いや、そんな贅沢いえない。いつだろうと学べる時に学ばなくては。

かすかな緊張に姿勢を正し、続きを待った。

「貴方の工房はどこかしら？ 私を警戒していないとの言葉は信じていますが、ならばこそ魔術を教える以上、一度見せてもらいたいのですけど」

「工房？ いや、ここだけ」

「どうか、そんなもん無いんだけど。」

「はい？」

キヤスターは理解できなかったのか、こくんと首を傾げる。

背中まで伸びる青い髪がさらさらと流れて、尖った耳元を覆い隠す。理解ができない不思議な言葉を聞きましたわ、とばかりに無邪気な表情だ。

「……どこですって？」

「いやだから」

「ここ。」と地面を指差した。

キヤスターは俺の示した土蔵の床を見て、それから周囲——拾い物や修理品だったものと

か油の臭いがする空間——を見渡して、まるで、目の前にあると指摘されたテレビのリモコンが見つからないといった調子で首をかしげた。

「……なんや。」

「だから——」

「ここ、と再び——今度は土蔵自体を指し示す。

三度目の正直という言葉がある。——いや、私の顔も三度までだっけ？

奇しくも三度目の問答。それを最後に彼女は爆発した。

「信じられません……！！ いつもこんな所に籠っていると思ったら、まさか……！！ 死してなお神が私に与えた試練に違いないわっ！ あの姦女が、まさかこんな辺境の島国まで手を伸ばせるなんて……！！」

「……先ほどからずっとこの調子だ。

いや、確かに俺が未熟なのは分かっているんだけど、ここまで連呼されると流石にへこむ。掃除するとはいえ埃は多いし、ゴミっぽいのも多いけど……。」

「大叔母様……大師母様……神の試練に挫折するような私をお許してください……」

ブツブツと懺悔まで始める。でもバシバシとあちこち叩くのはやめて欲しい。もちろんそんな火に油を注ぐようなことなんてできるはずもなく、すっかりいじけた俺は、土蔵の隅で体育座りだ。

その間にもひとしきり暴れまわって、キャスターはようやく落ち着いたらしい。興奮冷めやらぬ様子で息をつき、ようやく俺に目を向けた。

「……わかりました。今まで独力でやってきたのだから仕方ないのでしょうけど、少しは區別をつけなさい。日用品が押し込まれ、どこの誰でも立ち入れる魔術師の工房などありえませんよ」

「善処します……」

「そうなきや」

初っ端から厳しいが、それだけ魔術にたいして真剣なのだろう——と思い込む。

そうしないとヘコみすぎて死にそうだ。

「これでは一朝一夕ではどうにもならないわ。——まず戻りましょうか。セイバーも起きる頃でしょう」

「そうだな。朝食の支度しないと」

くるりと振り返って土蔵から出るキャスターに、ふと忘れていた疑問を思い出した。

「——そうだ。俺も聞きたいことがあったんだけど」

「何かしら？」

優雅に振り向く。

ついでに、ぶん——と見事な円を描いて振り回されたソレは、非常に良く似合ってる。  
「なんでホウキなんて持ってたの？」

「というか庭の掃き掃除してくれたのか？」

「答える必要はありません」

視線をあさっての方に向けて立ち去ってしまった。

腰の後ろに回されたホウキの持ち方は、なかなか堂に入っている。

「なんてコトだ。似合いすぎて……」

思わず呟いてしまう。

今度空飛ぶ時にアレ持っていてくれないかなあ、なんて本気で思った。

「くっ」

くそ、限界だ。

こんな顔見られたら今度こそ殺されてしまう。

必死に噛み殺してる笑いが収まるまで、暫く土蔵でじっとしよう——。



朝食が終わり、三人そのまま居間で食後のお茶と洒落込んでいる。左半身の痺れは少しマシになってきた。手元が不安なので、洗い物は後回しにする。お茶を飲んで向き合うと、自然に沈黙が訪れた。気まずいというよりは、もうない。

ただこの三人だと共通の話題に乏しいのだ。

—— ついでに以前から思っていたが、どうも相性の方向性が変に絡んでる気がする。例えば、俺とセイバーだ。

俺はセイバーに対して、嫌ってないし付き合いつらいという感情はない。

一緒に戦い抜くために共に手を取り合って戦えると信じている。

セイバーも俺のことを未熟と思っているだろうけど、マスターであると認めてくれている。つまり良好な関係だ。

でも、そこにキャスターが加わると少し複雑になる。

俺はキャスターのことを悪し様に思ってるなんてことはなく、魔術も教えてくれるし桜を助けるのに手を貸してくれたことから、目上の者として立てようという気持ちがある。も

ちろん以前やっていたことは許せる物ではないが、それと共に親近感みたいな物もあるからある意味複雑ともいえる。

ただ、どうも言動が上手くないようで、たまに彼女のことを怒らせる。この辺り相性が悪いのかもしれない。

キヤスターは今はこちらに住んでる。新しい住処に慣れてきたのか、葛木先生が死んだショックから僅かでも立ち直れたのか、当初の精気のない人形めいた雰囲気から、少し活動的に——簡単に言うと元気になってきたように見える。

俺に対してはたまに思うこともあるみたいだが、それでも悪く思っていないのだろう——と信じたい。

で、本題のキヤスターとセイバーだ。

セイバーは俺の判断を尊重してくれてるようでキヤスターを容認しているみたいだが、どうみても扱いは仲間というより親しくない同居人という位置付けだ。

態度は冷淡ではないしあからさまに戦うわけではないが、警戒を怠ることもない。自らの妨害をしないなら、改めて剣を交える必要はないと思ってるのだろう。

セイバーからキヤスターへの態度は、このようなものだ。

疎ましく思っていないが好意的でもないというのが正しい。案外、居ても居なくても変わらないと思ってるのかもしれない。

この辺りにセイバーの敵味方を判断する決断の早さがあらわれている。彼女はその場で敵、味方と分類するのが非常に早い。戦闘に感情を持ち込まないともいうのか、昨日戦つていても状況が傾けば剣を収める事に躊躇いが無いのだ。逆に戦つていい相手ならば剣を振るう事に対しても躊躇いが無い。

最も彼女の内心で全てを納得しきつてると思えない。単に人生経験と器によるものだろう。そして本命だが、これがキャスター側になるとセイバーと少し異なる。

表面上積極的に仲良くしようという気配がないのは同じだが、キャスターはセイバーのことを微塵も嫌ってない上に、警戒すらしてないのだ。それこそ、死亡寸前までダメージを負わされたにも関わらず。

俺の知る英雄は数少ないが、この辺り皆、驚くほどあっさり割り切つてるように思える。ライダーにしてもセイバーに倒されたのは同じだが、その事を恨みに思つてる節はなかった。ただ、桜の安全だけを気にかけていたように見える。

このように戦闘結果がどうあれ生きているのならばよしとし、自らの定めた目標を見失わない辺り不問とする態度は、さすが英雄の器の広さだと感心するしかない。

——ちなみに蛇足だが、当然俺はまだこんな達観した境地まで至っていない。バーサーカーの時は自業自得と割り切つてるが、ランサーに追い詰められたのは今でもコンチクショウと思つてる。

……ともあれ、そのように考察したところで、居間を包む沈黙はいかんともし難い。

「お代わり持ってくるけど、いる？」

立ち上がってキッチンに向う。

「はい」

「お願いするわ」

同時に声がかかる。

一瞬だけ視線が交錯したが、お互い何も言わずに外した。

これである。

最初のように険悪ではないが意識してるのが良く分かる。

「……ま、いつか」

この先がどうあれ、お互い一緒に暮らしてれば落とし所も見つかってくれるだろう。

確か藤村組からもらい物のお菓子があつたと、戸棚を探った。

朝食も終わりお茶の時間も過ぎて、時刻は九時を回っている。

元から学校は休もうと思っていたが——あの様子では開校してるのかも危ぶまれる。

学校に行く目的はマスターとして知られないように普段の生活を維持することで、二つ目に遠坂との情報交換があつた。

この二つは既に意味を失っている。

なんだかんだと全サーヴァントと交戦を果し、マスターであることを隠す意味は失われた。そして遠坂との協力関係もなくなっている。

ならば、これからどうするのか？

それを考えなくちゃならない。

「……まず、これからのことを相談しようと思う」

軽く切り出したつもりだったが、静まり返った居間には石を投げ入れた以上の効果があったようだ。

「――残りのサーヴァントを倒すのではないのですか？」

「やることは基本的に変わらないんだけど……」

サーヴァントとマスターの面々を思い浮かべる。

セイバーとキャスターはここにいる。俺に協力してくれてる彼女達は除外だ。

残りのサーヴァント達――アーチャーとライダーは最後に遭遇してから僅か一晩。バーサーカーはかなり前だが、あの圧倒的な力を誇る巨人がそうそう破れたとは思えない。こちらもやはり健在だろう。

彼らと戦うということは、そのまま遠坂と桜、イリヤの三人と敵対する事になる。

——それは、正直気が進まない。

イリヤはバーサーカーがいる間は、俺を切嗣の息子として白黒はっきり付けたがるかもしれないが……桜は戦う意志はないと信じたい。

遠坂が再び攻め込んでくる可能性を否定できない。こちらについては保留だ。残りはランサー……か。

俺の心臓を抉り、自宅に強襲をかけてきたサーヴァント。

セイバーに深手を負わせ、決着をつけずに撤退していった。

目下、マスターが完全に判らない唯一のサーヴァントであり、あの戦闘力は侮れない。

そして間桐臓硯と関わりがあると思われるアサシン——。

「——あつ」

大事なことを忘れていた。

「マスター、アサシンについて教えてくれ」

「——？」

なぜこのようなことを聞くのかと、セイバーは首を傾げている。

「学舎の屋上で相対する以前に、彼と遭遇したことがあるのですか？」

「いや、そうじゃない。——イリヤが言ってたんだけど、マスターがアサシンを召喚して山門を守らせていた——って」

「……な」

「……そうね」

キヤスターが静かに頷く。

「ただ……私はあのようなサーヴァントを見たことが無い。私の呼び出した存在はもっと違うものだったから」

「呼び出した……？ アサシンのマスターと協力していたのではなく、貴様が召喚したと言うのか」

「……ええ、そうよ。私も魔術師だもの。マスターになる権利が与えられている」

「……そんなことまでやってたんか……」

頭痛がしてきた。敵対関係じゃなくて本当に良かった。

額を抑える俺にキヤスターは一つ溜息をついた。

「そのようなこと、今となってはどうでもいいわ。あのアサシンは破れ、私のマスターも……」

ルール違反しておいて、終わったからどうでもいいと言いつ切る辺りやはり器のサイズが桁違いだ。

「……だけども……まて。今のは聞き逃してはならない。」

「じゃあ、キヤスターが召喚したアサシンを倒して葛木先生を殺したのは同じヤツなのか」

……？」

「アサシンは消滅したのではなく、私との繋がりを断たれた後に再召喚されたのでしよう。そして、そんなことができるのは——」

「今のアサシンのマスターらしき人物……間桐臓硯か」  
それはおかしい。

マスターではサーヴァントに勝てない。

——いや、奇策を重ねて不意をつけは倒せるかもしれないが、そのような特例を持ち出すのは現実的じゃない。

疑問はそのまま問いかけに変わった。

「……でも、そうするとアサシンを得る前の臓硯が倒した事になる。それはおかしい。あの老人は不気味だったけど、サーヴァントに勝てるとは思えない。——この時点でそんなことが出きるヤツなんて——」

どくん、と心臓が脈打つ。

熱を持った左半身が熱く疼いた。

屋上の記憶が甦る。

現実味を持たない直立した影。顔色を失い自失するキャスター。サーヴァントでは勝てない存在が一つある。



「あの黒い影——か」

何をもって危険かと問われれば、アレこそ危険極まりない。

黒い影の放つ異様な気——あの絶対の殺気に比べれば、間桐臓硯とアサシンなど小物もい  
い所だ。

「あいつら、協力してるのか……？」

しかしそれはおかし。

黒い影が魔術師の——それも人間の命令など従うとは思えない。そもそも、コミュニケーション  
シヨンなど取れるとは思えない。

アレは文字通り『影』だ。ヒトと対話できるような感覚器官は持っていない……。

「——？」

そこまで考えて、記憶に引っかかるものがある。

人間以上のモノを役する……その方法は、どこか覚えがある。——くそ、とっさには出  
てこないが俺にだって知ってるはずのものなんだ。

だとするならば、臓硯は独自にアレを制御ための方法を掴んでいるとでもいうのだろうか  
……？

マキリ——聖杯に五百年の妄執を傾ける魔術師の一族。

そうだ。アインツベルンのことを言峰に聞いた時、マキリについても語ってたじゃないか。

くそ、思い出せ。あの神父はなんと語っていた？

「マキリ臓硯。アインツベルンと管理者のお嬢さんの家系を含めた、聖杯戦争の発端を作った三始祖と呼ばれる魔術師の家系ね」

答えは思わぬ所から出た。

「キャスター……知ってるんだ？」

「私も魔術師ですよ。——それに、この地に召喚されたサーヴァントで知らない者はいません。セイバーにしてもそうでしょう」

——無論、と頷く。

口の中に煎餅が入っているから、話すことが出来ないのだろう。

「そうだ。言峰が言っていた。……聖杯を用意する者。英霊を律する者。この地を提供し、世界に孔を穿つ秘術を提供したもの——」

——そうか、これだ。

するりと糸が解けた気持ちになった。

左腕に刻まれた令呪を見る。

剣を象徴する三つの角で構成された令呪は、一つが輝きを失っている。柳洞寺でキャスターと戦った時に使った部分だ。

「マキリは令呪を作り上げた家系だ。——何か俺たちの知らない術を持つてるのかもしれないな

い」

「その可能性は——いえ、否定できません。私たちにしても令呪の縛りというのは絶対です。あの影が何らかの形で聖杯戦争に関っているのなら、制御方法があってもおかしくない」

「あの黒い影を倒す事は——正面からでは無理だ。」

サーヴァントであるならアレには勝てない。

どんな理屈かは知らないが、絶対的な力関係が存在している。マスターになってサーヴァントの力がわかるようになったからか、敵対者との戦力差も感じとれるようになってる。

「……あのアサシンは、キャスターと関係ないんだよな」

「ええ……アレは私が召喚したモノとは完全に別です。私の持っていたアサシンの令呪は既に失われています」

なるほど。

それに、あのアサシンはキャスターも狙った。今も繋がりがあんなら、不意打ちで心臓を握り潰すなんて攻撃はしないだろう。と、なると——。

「これからは間桐臓硯とアサシンを目標にしようと思う。……あの黒い影は、正直今はどうしようもない」

特に賛同も否定もない。

二人とも、内容を噛み締めているように見える。

「——キャスターはサーヴァントを倒すのに協力はしないって約束だったな。でも方針だけは知って欲しい。もしかしたらここも戦場になるかもしれないから」

「……ええ」

乗り気ではないのだろうか。——それも当然か。

今の彼女は聖杯戦争から離れている。昨日はあくまで厚意で協力してくれたに過ぎない。

「セイバーもいいのか？」

「——わかりました。確かにあの老人は無視できません。それにアサシンの能力は侮れない……シロウの安全のためにも真つ先に倒すべきです」

「侮れないって、あいつと戦えばセイバー確実に勝つだろ……？」

向き合って戦うならそれくらい戦闘能力に差がある。

そのため、屋上でのアサシンは俺を狙うという消極的な戦法でセイバーの足止めをしていたのだ。

「……違います。暗殺者の真価はそこではない。もっと恐ろしい能力があります」

「宝具か……？ 確かにアレは危険だったけど——」

一撃で心臓を抉り出す恐るべき技だ。

——しかし、セイバーは重ねて首を振った。

「暗殺者の真価はその名の通り、闇に潜む事にあります。確かに正面から戦えるならば、私の能力は彼を遥かに凌駕している。——しかしそれはアサシンと戦えるならば、という仮定に基づきます」

「そうね……必ずしも、セイバーを倒す為に正面から撃破する必要はないということ」

——そっか、俺が倒されてもダメなんだ。

「でもサーヴァントはお互いを感じることができるんじゃないか？」

サーヴァントはどれも百戦錬磨の英雄が召喚される。

優れた能力を持つが故に、マスターが弱点でありながら討つのは容易くない。どのサーヴァントもマスターが弱点だと知っているため、全力で守りにかかるからだ。

だからマスター殺しは容易ではない。マスターを簡単に殺されてしまう程度の能力では、英雄とは呼ばれない。

「それは。アサシンは優れた気配遮断の技能を持っている。——視認出来なくては、私も察知することが出来ません」

「そうか……それで、あの時いきなり現れたように見えただ」

アイツが間桐臓視に使役されていて、遠坂の言う通り慎二や桜を監視していたなら、ずっ

と近くに潜んでいたことになる。

あの場にはアサシンの他にサーヴァントが四人いた。結果を張っていたライダーは気付いていたかもしれないが、セイバーに感知されないほどの技能か……。

「——それって、見つけるのも大変なことじゃないか」

セイバーが溜息をついた。

「その通りです……アサシンを相手にする場合、常に先手は敵にあります」

「……うわ、なんだそれ。卑怯臭いな」

「それだけ小細工に頼らなくては、セイバーを倒すのは容易ではないということです。坊やは己の境遇がいかにも恵まれてるかを少し知るべきね」

そう言うキャスターは、妙に疲れた表情をしている。

——確かに、なんだか怒られてもおかしくない台詞を言ったように思うが、それよりも先に疲労がきたって顔をしている。

何か……思うところもあるんだろうか。

「そっか。正面から戦ったらセイバーが強いのは当然なんだから、他のクラスにはそれを覆せる権利が与えられるんだ……」

「暗殺者の気配遮断や、バーサーカーの狂化、アーチャーの単独行動。私の陣地作成等はその典型ですね」

「陣地作成……？」

「魔術師の工房を超える、私の神殿をこの街に作り出せる権利です……というより、なんでマスターの坊やが知らな——ごめんなさい。やっぱり何でもないわ」

今朝のことを思い出したのだろう。

「こちらにも一気にへこんだ気分になってしまった。」

「……簡潔に説明すると、魔術師の工房というのは研究を行うだけの場にあらず。自己を抑え外敵と戦うための戦場でもあります。神殿はその拡大版と思ってもらって構わない」

「自分に有利なフィールドを作り出せるってこと……？」

「そうね。そう理解してもらえば概ね合ってます。アレほどの規模のものはそうありませんが、ライダーの使った結界を思い出してもらえれば分かるでしょう」

「——」

なるほど。使い方によっては驚くほど危険な権利を有してる。つまり、以前のキャスターは街全体を自分の陣地として、そこに住む人々から魔力を補っていたということか——。

「ついでにセイバーまで何か思い出したのか、工房の話になると途端に苦い顔になっていた。」

「なるほど……暗殺者は自分に有利な場所を選んで襲撃をして、魔術師は得意な戦場で戦うってことか……。バーサーカーの狂化は……いや、言わなくても判ってる」

アサシンへの対策を話し合っているが危険というならアレこそ危険だ。

バーサーカーの戦闘力は真正面から向かい合った所で倒せるものではない。不意打ちなんて受けたら即死以外の運命など有得まい。

その点、アサシンは助かる可能性が残ってるだけ遥かにマシと言える。

「本来、バーサーカーの狂化は格の低い英雄が自己の能力を補うために設定されたものです。……あのヘラクレスのような、大英雄がなるクラスではありません」

「そこがイリヤの強みでもあるわけだ……」

とはいえ、今はバーサーカーのことを考えても仕方ない。対策はおいおい考えていくとしよう。

しかし、それが本当にそう思ってるのか、イリヤと戦いたくない気持ちで考えるのを先送りしてただけなのか、自分の気持ちがよくわからない。明確に考えちゃいけないと、話を続ける。

「——結局アサシンへの対策もこちらからじゃ打つ手なしってことか」

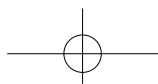
「そうですね……シロウはできるだけ外出を避けてください。陣地に籠ってるといのは、それだけで相手の焦りを誘います」

「いや、でもそんなんじや——」

言いかけて、気がついた。

「そうか……できるだけ籠ってれば、相手は外に出た時がチャンスとなるんだ。上手くす





れば襲撃のタイミングをこちらで動かせるかもしれない」

「——そうね。ではやることも決まったみたいだし、私は少し部屋に戻ります」

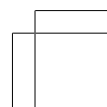
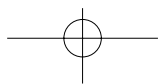
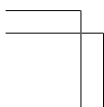
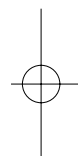
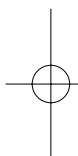
「わかった。俺もセイバーに稽古つけてもらうよ」

「はい」

他にも考えなくちゃならないことはあった。

——焦りは禁物だ。

昨夜、セイバーに釘を刺されたことを覚えている。少しずつ、段階を踏んでも強くならなくてはい。



突き出した竹刀が弾かれた。

左手の感覚は少し戻ってきたとはいえ、まだ動作が鈍い。

そこを的確に突かれセイバーの返しが入る。あまりに鋭利な一撃に防御が間に合わず、綺麗な貫き胴がめり込んだ。

「……………」

弾かれた竹刀が離れて落ちた。

今日もアーチャー流の二刀で竹刀を持っている。セイバーの動きは何とか追えるようになっただけだ。

「少し、休憩をいれましょうか」

始まって僅か一時間、彼女はそう切り出した。

「流石にそれは早くないか……？」 俺はまだいけるけど」

「シロウ。その心意気は買いますが、左半身の痺れは取れないのでしょうか？」

——驚いた。

一言も言っていなかったというのもあるが、若干違和感があるとはいえ既に動かすのに支障ない程に回復している。

しかしこうも正確に指摘されるとは思わなかった。

「――すごいな、そういうの分かるんだ」

「当然です。……しかし、いつかシロウが言い出すだろうと思っていなかったのはこちらの失敗です。シロウの強情には呆れるしかありません」

「――む。そんなことないぞ」

「説得力がありません。それに気付いていますか？」

と、言われた所でさっぱり分からない。

「自分でも動きが鈍いというのを分かっていますか？ 始めた当初はまだ良かったのですが、

時間と共に徐々に右手で左側を庇う動きになってきています」

「そうだったんだ。全然気付かなかった」

「無理に続けていくと治った後も左側を庇う癖になってしまいます。回復するまで待ちましよう」

「……わかった。俺の剣の師匠はセイバーだからな。そこは素直に従うよ」

用意したタオルで汗を拭い、水筒から麦茶を注いだ。

コップの片方をセイバーに渡す。

「その割には、相変わらずアーチャーの真似事ですか」

「い、いや——特に他意はないぞ？ アイツとは相性最悪なんだから……しかし、セイバーもなかなか根に持つんだな」

「そのようなことありません」

冷静なセイバーが拗ねる姿は、どこか年齢相応で可愛らしい。——が、あまりからかうと確実に俺に降りかかってくるから、この程度にしておく。

因果は巡るものなのだ。

「どうも今朝から熱を持ってる感じがして……昨日、アレだけボロボロにされたからかな」  
「傷は治っているように思います。ただ、シロウの魔力の流れが乱れているようにみえます」

「そうなのかな……？」

少し目を閉じて内部に意識を向ける。

朝は体の魔力の流れという部分をすっかり失念していた。魔力を流す事で痛みが走ったため、その後は精神修養とでも言うべき、自己に働きかける集中だけで終わらせていたからだ。魔術は未熟だけど、物体の構造と力の流れを把握するのは得意だ。

修理品を読み取るように、自分の体と魔力の流れる方向を描き出していく。——しかし、それでも魔力の流れに停滞が見られず、何ら問題があるように思えない。

「やっぱりよく分からないな。後でキャスターにでも相談してみるよ」

「そうしてください」

セイバーが同意する。

うんうん。以前だったら嫌そうな顔をするか止められていただろう。同居人同士が険悪状態から一歩進んでるようで少し嬉しい。

「——あ。キャスターと言えば……と、ちよつと待った」

思わず廊下まで見に行ってしまう。人影はなく、屋敷は静まり返っている。聞かれても問題ないと思うんだけど、同じ屋敷に住んでいながら、今この場に居ない人を話題にあげるのは後ろめたいことがなくても何だか申し訳ない気分になる。

それは先ほど居間ではつきりと言い出せず——明言を避けた程度の言い回しになっていた事だ。一応、セイバーに確認しておきたい。

「わるい。さつき話してて思ってたんだけど、葛木を殺したのってやつぱりあの黒い影かアサシンだよな……？」

「そう考えるのが妥当でしょう。何故キャスターを倒さなかったのが判りかねますが」

「うーん……そこなんだよな」

キャスターを生かしておかなくてはならない理由……か。

「そういや俺たちがお墓に入ったとき、キャスターが言ってたな『誰の筋書きだか知らないけど』って。アレどういう意味なんだろう」

「考えられる事としては、柳洞寺を攻めた誰か——高い確率で間桐臓硯と思われませんが、彼が不意打ちでマスターを倒し、キヤスターを刃にける前に私たちが踏み込んだとも考えられます」

「タイミングの問題か……」

「他には、私たちにキヤスターを倒させたかったために、手を引いた……とか」

「可能性を列挙するならどうとでもなつてしまうのが始末が悪い。」

「こればかりは、当事者でも分かるまい。」

「でも、そうすると何のためにだろう……?」

「私には判りかねます。——それよりシロウ。仮の契約と貴方たちは互いに言い張っています。私から——いえ、貴方達以外の全てのマスターから見ても、キヤスターは既にシロウのサーヴァントです。そこそ本人に聞いたただした方が早いのではないですか?」

「あ、なんだか目が冷たい。」

「い、いや……でも、なんかあまり言いたくないさそうじゃないか。そこに、ズカズカと入り込んでいいものかどうか……」

「——ほう。キヤスターには遠慮しても、私相手に彼女の相談は何ら抵抗を覚えな……と?」

「そりやそうだよ。セイバー相手に遠慮なんてするもんか。聖杯戦争の最初からずっと一緒

に戦ってきた仲間に遠慮なんて出来ないよ」

「何言ってるんだとばかりに、返す。」

「……はあ。シロウは、卑怯だ」

「んん？ よく分からないけど……なんか悪いこと言ったか？」

「何でもあります、とガーツと麦茶を一時のみされる。」

「あつ。俺の分……！」

「そのような事はどうでもいい。……それで、シロウの持つてる危惧はなんでしよう？」

——本題に切り込まれた。

「とはいえ隠そうとしていた訳じゃないし、このような話を出す時点で読まれてしまうのも当然だろう。」

「キャスターは聖杯戦争から手を引くって言うてるんだけど、あの黒い影はどうするのかと思ってる」

「復讐……でしょうか」

「それを考えてた」

話ながら、俺はまだこんなにも彼女の事を知らないんだと実感する。

キャスターが持つ願い、理想、希望……全てがまた霧の中だ。

「……聖杯を要らないっていうのは、いいんだ。それはきっとサーヴァントであることを放棄するって事なのかも知れないけど、彼女の自由だと思ってる。サーヴァントは聖杯に求める願いがあるから召喚に応じた——でも、目的の途中で叶えたい願いが変わるって、よくある事だろ？ だから、今さら叶える願いが無くなってる聖杯要らないってのは理解できるんだ。ただ、キヤスターが葛木のことを慕ってたのは間違いないだろうから、もしかしたら敵討ちとか考えるのかな……って」

「……」

——と、セイバーが何かを考え込んでいる。「願いとは、そのように志半ばで折れるような物なのでしょうか……？ 折れてしまったモノは、本当に願いと呼べたのでしょうか」

それはとても小さく、セイバーが意図していかないかもしれないくらい、微かに出された。だからこそ、とても重く響いた。俺の目標……俺の願い。途中で変わってしまうものなのだろうか……？

「……わからない。自分の言葉だけど、改めて考えてみるとはっきりと言えなくなる」

目標にしていた願いが変わる——それは、驚くほどこの世界にありふれた話だ。

サッカー選手になりたいと言っていた子供は、いつから夢を追わなくなるのだろうか——？ また、実際に成れた子供はどれだけののだろうか。



長い人生を経験と努力の蓄積を重ね、一つの目標に到達することがどれだけ大変なことか。自らの未熟を俺が理解したとして、胸を張れるようになるにはどこまで修練を重ねればいいのか……分からない。

「セイバーも聖杯で叶えたい願いがあんだよね？」

「——はい。私も一つの願いのために戦っています。それは、シロウのような万人のためではない、酷く利己的なものです」

「俺は聖杯でやりたい事なんてないぞ」

「シロウはこの戦いで、無関係の人々を守るために戦ってるではないですか。それは他人には真似できないとても素晴らしい願いです」

「そうだ——あの夜、ライダーと初めて戦った夜に教会の前で彼女と戦い抜くと誓いを交わした。」

「セイバーは今、その時のことを言っている——。」

「あつ」

さつきから、会話の内容に既視感を覚えていた。

「なんだか、これと似たような話を聞いたことがあるな……」

あまり昔の事ではない。ここ一週間以内、つい最近。

奇しくもセイバーの言葉ではつきり思い出した。同じ日、その話をして俺は後押しされた

のだから。

「……そっか。言峰からだ」

「あの者が……？　なんと？」

「聖杯戦争について言ってたよ。アインツベルンの持つ一千年、マキリの五百年という妄執に気圧される気持ちは分かるけど、たいしたことが無いって具合に。確か……聖杯戦争は人生の縮図だとか言ってた。本来なら一生をかけて果す願いを、聖杯という神秘に委ねるとかなんとか——」

そう。だから他の連中がどれだけ時間をかけようと、この聖杯戦争において全ては等しいのだと、悩む俺を後押しした。

自分は切嗣の対極であり、血の繋がらない俺が切嗣に似ていると自ら語る言峰は、その実俺のことをこれ以上無いほど理解していた。

——気がつくくと、セイバーは先ほど以上に真剣な顔をしていた。

「そうですね……聖杯に掛ける願いが生に等しいというのは、頷けます。——だからこそ、私たちは召喚に応じるのですから」

セイバーがどのような願いを持っているのか、俺には分からない。

ただ、どこまでも真つ直ぐなこの少女が、幸せになれる願いであればいいと思った。

少しマシになったので訓練を再開して、お昼と同時に切り上げる。  
昼のメニューを決めていなかったので得意分野で和食にした。朝、片付けを後回しにした  
食器は昼の準備の時に既に洗ってある。

腕の痺れも、時間と共に良くなってきていた。

「そういえば思ったんだけどさ」

「何気なく思ったことを口にする。」

二人とも箸を止めて、こちらを見た。食べてる最中に喋らない辺り、本当にこの二人は行儀がいいと思う。——どこか気品があるというのか、育ちがいいというのか。

……まあ、大昔の英雄って神様に認められた人だったり国王だったりお姫様だったりするから、セイバーとキャスターも、実はやんごとない出自だったりするのかもしれない。

ちなみに二人の座る位置は微妙に離れている。それでもテーブルの端と端などになっ  
ていない辺り友好度が良く分かる。

「キャスターって、箸の使い方上手いよな」

「……いきなり何を言い出すのかしら。坊やは」

「いや、だから思いつきだって」

「やっぱりお寺で暮していると和風のスタイルが身につくのかな。」

「……………」

自分には関係無い話だからか、セイバーは我関せずと食を進めている。

彼女も食べるスピードと量はたいしたものだけど、行儀がいい。

あまり頭の位置を動かさずに手を運んでるから、すごく洗練されてるのだ。今のようになん豆一粒一粒をつまんで高速で食べてる辺りなど、美しい小鳥の仕草にも……………」

「——セイバー、食べ物で遊んじゃダメだぞ」

「……………」

何故か不満そうだった。

「昼から出かけようと思う」

片付けが終わった辺りで切り出した。

「——あまり外に出ない方針ではなくて？」

「朝はそうだったけど、確認しておきたいことがあって教会に行きたい」  
「そう」

疑問が解消すれば深く干渉しないというのだろうか。聖杯戦争に関らないと宣言したからか、一線を引いてるようにも見えた。

「そんな訳で、セイバー。付き合ってもらっていいか？」

「当然です。このような状況で一人で行くと言い出したら、どのようなペナルティを与えようかと考えていました」

「……すまん。絶対言わないから本気で勘弁してくれ」

なら、やることは決まりだ。

言峰に会うのは気が進まないが、ヤツがこの状況をどう思ってるのか確認しておきたい。それにもしかしたら何か新しい情報が入ってるかもしれない。

それは黒い影でも臓視のことでも何でもいい。

「教会……ということは、新都にいくのよね」

「そうだけど……」

「途中まで私も参りましょう」

——え？

「い、いや——だって、アンタ……」

ほら、セイバーも目を丸くしてる。

「坊やが倒されて困るのは私も同じです。聖杯を得る手助けを行おうとは思いませんが、だ

からとって見殺しにして平気なわけではありません。……その辺り、勘違いされてそうなのですけど……。それに買い物に行きたいので、それくらいいいですよ」

「か……。買い物？ サーヴァントが？」

「サーヴァントでも必要な物くらいあります」  
あるんだ。必要な物。

セイバーに聞いてみようと思ったが、彼女もどうするのか？ と目で訴えてくる。

「それなら構わないんだけど……。服、どうする？ 流石にそのままじゃ目立つだろう」

流石に昼間から青い髪でローブ姿の外国人を連れて歩くなんて、無茶が過ぎる。

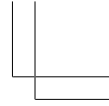
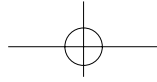
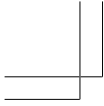
キャスターは思案顔になる。

答えはあつさり出たらしく、驚くべき事を口にした。

「そうね……。藤村さんの服でいいわ。無かったら坊やのを貸してちょうだい」

「……………<?」

この日一番の難問が待ち受けていた。



なんともチグハグな組み合わせで、新都へ向う。

この交差点から教会まで一時間以上距離がある。

教会の位置は柳洞寺と川をはさんで正反対だ。結構歩かなくてはならないため普段はバスを使う。一人なら自転車も良いだろう。——しかし、今日は徒歩を選択していた。

なぜなら——。

「一体どんなトリオに見えているのやら」

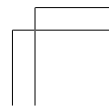
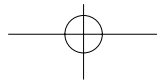
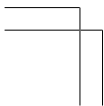
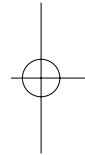
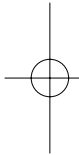
すぐ脇にセイバーがいて、僅か数歩後をキャスターがついてくる。

セイバーは遠坂が用立ててくれたいつもの格好だけど、キャスターは珍しい私服姿だ。

聞けば柳洞寺では浴衣まで着ていたらしく——葛木の婚約者という触れ込みなのだから、連日同じローブ姿では無理があったという——現代の服に着替えるのに抵抗は無いらしい。

流石に付き合いの長い藤ねえとはいえ、うちに持ち込まれた服は少ない。

特に日中は学校に行ってる為、私服の類は驚くほど少なかった。そのくせお泊りセットは大量にあるのだから訳がわからない。いつのまにか虎の冬眠場所選ばれたのだろう。



そこでキャスターを選んだのがなんと俺の服。身長が殆ど変わらず、難なく着こなされて  
いるのがどこか恥かしくも悔しい。

白いシャツにジーンズ。デニムのジャケットと女性が着る男物としては全然おかしくない  
のだが、俺なんかより数十倍似合ってる。

「……どうしたの？　こちらを先ほどからちらちらと」

スタイルに無駄な所がないのだろう。男装とは呼べない男服だが女性らしさをかもし出し  
てよく似合ってる。

しかし、いくら男物のサイズでも俺に合わせてるんだから、お尻の辺りがちよつとキツイ  
とか言わないで欲しい。

もうあの服は着れまい。

キャスターがどうかでは無い。これでも多感な青少年なのだ。変に意識しすぎて心臓が  
破裂する。

「いや、ホントによく似合っていて驚いてる。美人だと思ってたけど、ここまですごいな  
かった」

「そ、そう……？」

「ああ。よかったらその服あげるよ。外出るならもってた方が便利だろ」

「ではありがたく戴くわ。……この服に合わせた下着が無いのが不便ですけど」



「勘弁してくれ……」

流石にそれは買いに行けない。

下着売り場なんて、男子禁制にして進入禁止の大結界だ。

「ふふ。私も坊やに買ってきてもらうのは恥かしいわね」

——だから、そういうことを頼むから言わないで欲しい。

とうるか今の下着どうしてるんだ？ サーヴァントの服装から下着だけ残してるのか？

……一つ、アリエナイ想像がひらめいた。

ま、まさか……っ。あの下は……！！

「……！！」

ぶんぶんと頭を振って沸いた思考を振り払う。

考えちゃダメだ。心頭滅却。藤ねえのお泊りセットから見繕ってるに決まってる。絶対そ

うなんだから心乱さず落ち着け……っ。

「……なにやってるのですか？ シロウ」

「い、いや——なんでもない。本当になんでもないっつら……っ！」

「はあ——」

「坊やを見ると飽きないわね」

だから、誰のせいだと思ってるんだ……！！

「——と、ところで、キャスターは何を買いに行くんだ？」

サーヴァントが何を買って来るのか、興味がある。

基本的に彼らは身一つで召喚されるからだ。備え持つ己の技術、能力と宝具が武器になるのであって、現世の道具が必要だとは思えない。

セイバーは霊体化できないために私服を必要としているが……それでキャスターも？ いや、確かにありそうだけど、こればかりは俺の管轄外だ。女性の服選びなんて未知の領域だ。

となると——なんだらう？

「まずはアルコールを少々」

「——へ？」

「後はランプも欲しいわね」

「ランプ？」

「他には……ハープかしら」

よく分からない組み合わせが出てきた。

これから何が作られるんだと考えたが、よく分からない。とりあえず思いついたことを言ってみた。

「……お茶でも淹れるのか？」

「べらうらして？」

「いや、だって——」

「……違います。薬を作るにしても、あの家には何も無いでしょう？　いつまでか分かりませんが、これからは本格的に私の住居とするのですから最低限の物を揃えないと」

なるほど、そういうことか。

サーヴァントとして必要なのではなく、魔術師として必要だと彼女は言ってるのだ。

「理解した。そこらへん疎くて申し訳ない」

「既に骨身にしています。それに、そのうちイヤでも理解してもらいます」

「……善処します」

相変わらず政治家みたいな発言しか出来ない。

「あ、買い物は理解したし持ち込むのも構わないんだけど、キャッシュお金持ってるのか？」

なんとというか……葛木先生の給料とか握ってそうで。

「——はい」

そうして彼女は空の手を差し出した。

「？」

「忘れていたわ。お財布を渡しなさい」

「め、命令——!？」

それはなんとも横暴だ。

「この私に師事する以上、魔術に関する命令には絶対服従です。——それに、薬を用意したとして、必要になるのは貴方でしょう。その左腕、本来なら数日は動かない所ですよ」

「そんな師匠発言——！ じゃない、キャスターも俺の体のこと、知ってたのか……？」

隠していたつもりが、二人に見抜かれていた。

サーヴァントを見くびっていたわけではないが、鋭いものだと感じた。

「よほど無茶をしたのでしよう。魔術回路が神経ごと焼けかけていました。——貴方自身の治療能力もあって快方に向っていますが、本来なら痛みで眠れないほど傷ついていましたよ。

……そこまでダメージを受けると、一生半身が動かなくてもおかしくないですが……貴方の使う魔術と身体の相性がいいのでしよう」

生まれ持った身体に感謝しなさい、と続ける。

——でも、やっぱりその値踏みするような視線はやめて欲しい。怖いから。

「そ、そう——だったんだ。あ、でも俺よく眠れたぞ」

今はもう殆ど覚えていないが、嫌な夢を見た気がする。でも夜中一度目が覚めて、それから朝まではぐっすりだ。

そんなの当然でしょうとキャスターが続ける。

「貴方を運んだのはセイバーですが、戻ってから私が治療しましたから。ただ、痛み止めを

用意できなかったので少し魔まされてるようでしたけど」  
「ああ……そっか」

アレだけ無茶をして——一秒ごとに魔力を奪われていくような空間で、慣れない強化と投影を使って、肉体的にもポロポロにされてたんだ。

体が痺れてるのが後遺症だと思っていたけど、そんなんじゃない。既に見えない所でも助けられていたんだ。

「そういうことです。——はい」  
改めて手を差し出された。

本当はバイトもできなくて生活も厳しいから凄くイヤなのだが、聞いてしまった以上、彼女には借りがある。昨日のことも借りっぱなしなんだし、それに俺のために用意してくれるなら協力を惜しむつもりは無い。

だから、今度は素直に渡した。

「はい……今月の生活費が丸ごと入ってるんだから、最低限残しておいてくれよ。最大の敵が食糧難じゃ笑えない」

「物分りのいい人間は好きよ。いずれ、そこらの石ころでも金に変えて返すわね」

「いや、それはしない方がいい」

「……銀がお望み？」

「そういう物騒な所から離れてくれ」

「なんというか、心臓に悪い会話だと思った。」

「そして、これから会いに行く神父の厳格な顔を思い出すと、更に気が滅入る。」

「項垂れていると、なにやら視線を感じた。隣のセイバーが半眼になって俺と後ろのキャスターを見ている。」

「キャスター。あまりシロウを困らせるものではないと思う……。シロウの為ならばという気持ちはわかるが、我々はサーヴァントだ。あまり主の財などに頼らず自分で——」

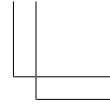
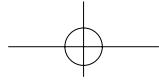
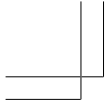
「帰りに鯛焼きでも買っていきましようか」

「——失礼した魔術師。確かに我々サーヴァントでも如何ともしがたい事がある」

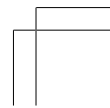
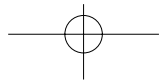
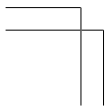
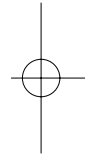
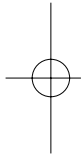
「……………」

「——もうなんとでもしてくれ……。」

「でも、以前よりほんの僅かではあるが、聖杯戦争以外の事で交流をかわす二人を見て、少し心が温かくなった。」



269



坂道についた。

ここを登りきると教会がある。

自宅から約一時間——近いようで遠い場所だ。

「じゃあ、行ってくる。」

キャスターと別れ、セイバーと二人で坂道を登る。——思えば、ここに二人で来たのは何  
度目になるだろう。

いつも二度と来ない事を願っているが、今のところ神様にその望みが聞き届けられたこと  
はない。

それも当然だ。願を掛けられる神からすれば、自らを心棒する神父を畳みつぶさるだろう。

だから、今も自然と引き締まる気持ちと感情を抑え、この坂道を登っている。

「——では、私はここに  
「わかった」

教会前の広場——すっかりいつもの場所になった地点でセイバーと別れた。



切嗣のサーヴァントだったからか、彼女は言峰を警戒している。遠坂に連れられて来た後——最初に二人でここに来た時に、自分のことは言峰に教えないようにと釘を刺されている。十年前の聖杯戦争で親父が最大の敵とみなしていた言峰綺礼——どうにも苦手意識がついて回っている。事実、好んで会いたい人物ではない。

しかし、それとは裏腹に彼が嘘をつかない事を知っている。だから疑問をぶつければ、回答を知っているなら答えてくれると確信しているのだ。

好意を持つのと能力や人格を認めるのは別の問題ということだろう。気を引き締めなおして、教会の扉に手をかけた。

空気が緊張を漂わせている。

ここはいつもそうだ。尻込みしたくなるような重苦しい雰囲気漂っている。

——礼拝堂に言峰の姿がない。

奥の部屋にいたのだろうか……？

ん？

礼拝堂の長椅子に座っている人物がいた。彼も俺に気付いたのか立ち上がる。金髪に黒いジャケットを着た、赤い眼の外国人だった。

戦慄が走った。

俺はここで殺されるんだと理解した。——そのように恐れたんじゃない。ただこれから先、確実に訪れる未来としてすんなり胸の中に受け入れた。

理由なんてわからない。これこそ本能とでも言うのだろうか？ ダメだ。訳がわからない。金髪の青年は手にしていた週刊漫画雑誌を椅子に投げ出し、こちらに向かって歩いてくる。彼は薄く笑みを浮かべているが、そこに友好的な空気は無い。そして、友好を築こうとも思っていないだろう。

理由の解らない戦慄が、死のイメージを伴って頭の中でぐるぐる回る。彼はもう目の前にきている。

左手を上げた。俺に向け、その手を振り下ろし——。

「ん？」

訝しげな表情になった。

下ろされた手が、ぼんつと肩の上に置かれた。

「……。え？」

肩をつかまれ、前に引かれる。赤い瞳で正面から覗き込まれた。

吐息さえ掛かりそうな距離はライオンの牙に首筋を狙われているようなものだ。

「——ふん。おかしなモノに憑かれてるな」

そうして、青年はあっさり離れた。  
心臓を圧迫する威圧感も消えた。

いや——彼は俺に近寄ってきただけだ。それなのに、何故殺されると思ったのだろうか。そちらの方が不可解だ。

「言峰に用があるのだろうか？ 少し待ってろ」

青年は教会に詳しいのか、礼拝堂から奥へと入っていった。

「あれ……？」

手の平にびっしょりを汗をかいている。

思い出したように息を吐き出し、長い間呼吸を忘れていたことに気がついた。

膝が震えている。言峰が来るまでの数分、よく分からない理由で震える体を抑えていた。

扉が開いた。

青年の姿はない。言峰は一人だった。

「待たせたな衛宮。——それにしても、これで四度目か。つくづくこの場に縁があるようだな。今日はどうした。やはり戦線離脱を決意したか？」

そのことに、少し安堵した。

あの青年は俺に話し掛けただけだ。なんでこんな不可解な思いをするのか訳がわからない。

気の迷いだっただらうと頭を振る。

「そんなことあるもんか」

「ふむ……ならば丁度いい。私もお前と話がしたいと思っていた。凜に伝言を頼もうと思っただけだが、そちらから来てくれるとは手間が省ける」

「アンタが俺に……？」

この神父から用件を持ち出すなんて、初めてのことだ。

一体何を言われるんだらうと身構えたが、俺の緊張をみてとったのか神父は続ける。

「そう気を張ることはない。聖杯戦争がはじまってからの、お前の戦果は大したものだと聞き及んでいる。ならば堂々と構えておけ」

「——別に俺の力が優れている訳じゃないし、アンタのために戦ってる訳でもない」

「つまらん世辞は余計だったか。——して、お前は何が聞きたい？」

「……どうしてそう思う？」

言峰は切り込むように問い掛けてくる。

その、全てを知ってるような態度に、少し警戒の念が生まれた。

「隠さなくていい。お前はここを嫌っている。それなのにわざわざやって来たのだから、答えは一つだろう」

当然だがお見通しか……。

元々そのつもりできたのだと思い直し、こちらから話すことにした。

「……この数日で、幾つか変なことが起こった」

「ふむ」

言峰は一つ頷く。

「アサシンのことか」

「……知ってたのか？」

「詳しくは知らん。ただお前がキャスターを倒した時、あの付近にはアサシンが居た。ヤツはそのまま柳洞寺を根城にしていたようだな」

「な」。そんなセイバーと一緒に気付かないなんて」

違う。アサシンの能力は既に知ってる。

「そうか……アイツ、他のサーヴァントから姿を隠せるんだっけ」

「ほう。よく知ってるな」

「一度戦ったことがある。その後、教えてくれた」

「既に交戦していたか。アレをよく発見できたものだ」

言峰は本気で感心している。

それだけ、アサシンの能力を警戒してることなんだろうけど――。

「なんで監督役のアンタがそこまで気にする？ それに柳洞寺にアサシンが住み着いてたな

んで、何故知ってたんだ？ サーヴァントからも姿を隠せるアサシンなんて、それこそ人間が見つけられる存在じゃないだろう」

「その通りだ。私の知る内容などランサーの報告を受けたに過ぎん。——人間には見つけられない、か。言わせて妙だな」

「——は？ ランサー……？」

「私がランサーのマスターだったと言っている。昨夜、アサシンに倒されてしまったがな」

「お、お前……っ！」

「そういきりたつな。既に私はランサーを失っている。今回の聖杯戦争でお前たちの敵ではなくなったという訳だ。——それより既に交戦したと言っていたな。詳しく聞かせろ」

「なんだってんだ……勝手な事いいやがって……。——はあ。分かった。俺の知ってる事を話すから、そつちも俺の疑問に答えてくれよ」

「——答えられる質問であればな」

「……………」

ランサーが既に消滅したという情報を貰ったのは確かだ。

この神父はつくづく油断ならないと思ひ直し、以前教会に来た日から今まで起こった出来事を話した

「……間桐臓硯か。もしやと思ったが、あの老人が動いていたとはな。人の生き血を啜る虫というのとは本当だったか」

「生き血……？ あの爺さんは吸血鬼なのか？」

「違う。ヤツは蟲使いだ。人の生き血を啜る虫を使役し、何万と扱う」

「虫……一つの壺の中に毒虫を入れて、他人に呪いを掛けるってやつか」

「それも違うと言峰は否定する。」

「蠱毒コドクの類ではない、もとより呪詛はマキリの管轄外だ。彼らの行う術は必ず自らの肉体にかえるもの。呪いを仕掛けては共倒れだ」

人を呪わば……ってやつか。

「じゃあ、本当にそのまま虫を使い魔にするってことなのか……」

赤い世界を思い出す。桜が吐き出した鉤爪を持った奇怪な虫。あんなものを他にも沢山使役してることか。

「ああ。間桐臓硯は人の生き血を啜る妖怪だ。吸血鬼のように一個の存在として確立されたモノではない。数多くの虫を使役し、人の若さを吸い取り数百年の時を生きた、文字通り妖

怪なのだ」

「数百年……」

「今より六代前のマキリの魔術師だ。際立った虫使いだと聞いてはいたが、今も現役だったとはな。生きていたとしても裏で子孫を操るだけの隠居かと思いきや……認識を改めなくてはならん」

「……ずいぶん詳しいんだな」

「なに。凛の父親の受け売りに過ぎんよ。性格も性質も陰険で陰湿な、巨大な蛞蝓だ。既に日の下に出られない身体になってるらしいが、元気なことだ」

言峰は本気で臓硯のことを嫌っているらしい。

親父に対しては、自らを対極であり嫌っていたといっていたが、どこか認めてる様子があつた。しかし、臓硯に関して一切それがない。

「数百年生きてる昔の間桐の魔術師だつて言つてたけど、あの爺さんもマスターだったのか？」

「いや、間桐臓硯がマスターだった事はない。ヤツは間桐家の相談役の立場であり続けている。が、しかしなにぶん数百年と生きてる妖怪だ。我々の知らない方法でマスターになつていてもおかしくない」

「そっか……アサシンと契約してるとって思っていたんだけど、違う可能性もあるのか」



「さあな。だが気をつけるにこしたことはない。ヤツはこの数百年の間、常に闇に潜んできた。それが表舞台に出てきたのだから、勝算があったのだろう」

「勝算……か」

あの黒い影がそうだとするなら、臓硯が表舞台に出てくるのも分かる。アレは人が勝てる相手じゃない。

「参考になった。あの妖怪が動いているならば、監督役として非常事態に備えよう」と

「監督役か。つい昨日まで俺たちに内緒でマスターだったくせに」

「そう言うな。私がマスターになったのは聖杯を求めてではない。単に願いを持つ者に聖杯を与えたかっただけだ。既にランサーは消滅している。ならば後はマスター同士で決着をつければいい。……私の私情で言わせて貰うならば、お前か凜が聖杯を得ればいいと思ってる」

「――」  
思わず頭を抱えた。

今の言葉を、神父は本気で言っている。自分は聖杯を要らない。お前か凜のどちらかが手にいれろと言ってるのだ。

――そして、自分で使うつもりがなく、聖杯を誰かに与えたいという願いは俺と同一のものだ。

「アンタだって願いがあったからマスターになったんだろう？　なんだってそんなこと言い

出すんだよ。」

「そうだな。叶えたい望みなどはないが目的はあった。だが、それは聖杯で叶えるべきものではない。私の目的はそれほど真剣ではなく、私自身が叶えても意味がない」

「……なんだそれ。問答なら後回しにしてくれ」

「分からないならそれでいい。私とお前の願いは同一のものだ。明確な望みがない者同士、我々は聖杯を得ることに意味など感じない。何でも望みのかなう願望機などあった所で、自分で使うより自らが認める相応しい願いの持ち主にくれてやるだろう」

「言峰……お前……」

「私の話とはそのようなことだ。事前に知っていれば楽になると思ったのだが……また、余計な話をしてしまったか？」

言峰自身もそうと知ってて俺をけしかけろ。

どくと心臓が一つ鼓動を上げた。

「まあいい。これで私からは終わりだ。お前の聞きたい話はなんだ？」

「ああ——」

なんだか嫌な話を聞いてしまったようで、氣勢がそがれた。

言峰から得た臓硯の情報は大きい。なんとか気力を奮い起こして言葉を紡いでいく。

「その臓硯に関係してるかどうかは分からない。ただ、この前戦闘中に変なモノが出た」

「変？ いや、続ける」

「黒い影としか言えないものなんだけど、見ているだけで不快になる」

「……なに？」

訝しげに聞き返してくるが、俺だってそんなの同感だ。

あんなデタラメな存在、信じたくない。

「信じられないのは分かるけど——」

「いや、お前が言うならば事実だろう。しかし——いや、まさかな」

「なんだよ。覚えがあるなら言ってくれ」

「覚え……か、仮説ならあるが、それならばお前にもあるはずだ。見覚えと言った方が正しいか？」

見覚え？ 言峰は変な事を言う。

俺が見たものを話してるんだから、見覚えがあるのは当然だ。

「あの老人が何をしでかしたのかは分からんが、それがあの妖怪の強みだろう」

「わかるのか？」

「可能性の話だ。もう十年前も前では忘れてしまったか……？」

「十年——？ それって——」

炎に包まれた世界。

どこまでも紅い——思い出そうとして映像が途切れる。この先は何も無いと記憶が途切れ  
ていた。

「わからない……そんなのに見覚えは無い……はずだ」

「そうか。——こちらでも調べてみよう。また何か思い出したらくるといい」

「ああ……」

力の入らない足で椅子から立つ。

扉に手を掛けたところで、言峰に呼び止められた。

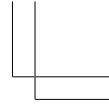
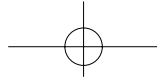
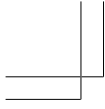
「記憶とは厄介なものだ。既に失われた過去の出来事だというのに、どれほど時が経とうと  
も人間をそこに縛り付ける。——あまりに強固な束縛は、穿たれた楔くわに等しい。あまりに強  
い楔はただの呪いだ。そこを起点とする限り、訪れるのは停滞でしかないだろう。……あの  
老人が何をしてくるかわからんが、付け込まれないように気をつける。ヤツは虫だ。虫ども  
が石の影に棲まうように、あの老人は人間の影を住处とする」

「……肝に銘じておく」

それだけを言っただけで教会から出た。

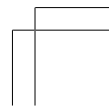
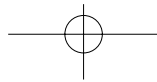
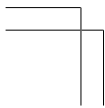
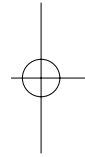
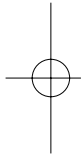
——冬の冷たい空気が肺に満たされる。それでも、アイツの言葉が脳裏に刻まれて気分は  
晴れなかった。

教会の広間でセイバーが待っている。



283

結局役にたつのか分からない答えにならない答えだったが、臧硯は気をつけなくてはいけ  
ないと新たに思い直し、彼女の元へと向かった。



## Interlude / 10 英雄王II

衛宮士郎が去り、僅かに時が流れた。

礼拝堂は元の静寂を取り戻した。どこに潜んでいたのか、後ろに現れた金髪の青年は言峰に感心した口ぶりで声をかけた。

「お前が説教とは驚いたぞ」

「なに。本職を忘れるわけにもいかんからな」

くつくつと青年は笑う。

「言峰。本当に望みはないのか？」

それは金髪青年とて知っている。

この場で聞くのは、衛宮士郎に向けて放った彼の言葉を揶揄してゐるに過ぎない。

「ない——それはお前とて同じだろうギルガメッシュ。我らに叶えたい願いなどなく、ただ目的のための聖杯があるに過ぎない。——それに、使用者の広義的な願いを曖昧に

叶える願望機など、手に入った所で無駄なものだ」

ギルガメッシュは鼻を鳴らした。そう——この男には真実望みなど無い。

彼の目的は追究のみ。聖杯は自己の望みに答えるだけのもの。自らに疑問が生じたとして、聖杯は自らがよしとする答えしか出せないのだ。

そのような「自らが望んだ答え」などに言峰は意味を見出さない。

「重ねて問うが、本当に聖杯に興味はないのだな？」

「願望機に用はない。お前の目的も私の願いも、真実願いなどと呼べるものではない。そうした方が楽だからという、徹底した快樂追及でしかない。願いとは自身で叶えるものだ。——しかし、自ら願いを叶えては人間は救われん」

ギルガメッシュの人類粛清も、彼ほどの能力ならば決して不可能なことではない。既に彼はこの世界に受肉している。

一人一人殺して周り、それが数十億回繰り返されればそれで望みはかなうのだ。

しかし、そのような事を彼が望むはずもない。徒勞は王の為すべきことではない。

「では何故マスターになどなった？ 望みがなければ聖杯など要らぬだろうに」

確かに、と言峰は頷く。

「願望機など用はない。ただその中身に興味があった。十年前に聖杯を求めようとしたのも、ただそれが在ったからだ。生まれ出でようとするモノを祝福するのは私の務めだからな」

「ふん。それが生まれてくるモノに微塵の関心もたなくともか」

「無論だ。生まれ出でさえるならそれでいい。ただ私は『この世全ての悪』と呼ばれる何者かに興味があったに過ぎない。人々に生み出されながら望まれることの無かった何者か——。聖杯では私の疑問は解けない。しかし、答えを出せる何者かを生み落とすとしたらどうする？」

「なに——？」

ギルガメッシュの眼が細められる。

「善悪もなく——ただ殻に閉じ込められた、孵る事のなかった雛鳥——それを産み落とすことこそが、私の望みなのかもしれんな」

「——」

彼は踵を返した。向う先は衛宮士郎がくぐった礼拝堂の出口。

扉に手をかけ立ち止まる。

「ランサーは倒れた。今さら我を止める気ではなからうな？」



「そのようなつもりは毛頭ない。後は好きにしろ」

だが——だからといって彼は何をするつもりだろうか？

英雄王は座し、サーヴァントの選別を待つと言っていた。彼が動くのはその後のはずである。気まぐれな男だが、焦りから行動を早める存在ではない。

「だが、お前はとうするのだ？ 自ら討って出てサーヴァントを倒して回るなど、趣味ではなからう」

「あの雑種が面白いことを言っていた。なに退屈しのぎの余興だ。零れ出でた雑霊と戯れてくるとしよう。——産み落とす前の中身とやらに好きに動き回られては邪魔になる」

「そうか……お前ならば負けることはあるまい。好きにしろ。いずれお前のものになる聖杯だ」

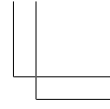
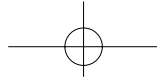
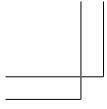
「ではな」

片手を振り、彼は教会を出ていった。

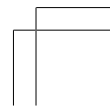
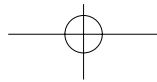
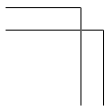
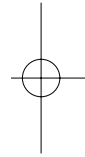
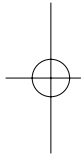
英雄王の力は抜きん出ている。どのような存在でも彼が負ける道理はない。

しかし——。

「ギルガメッシュ。仮にお前が打倒されることがあるならば、その油断ゆえにたろう王ならばこそ自ら慢心をよしとするその在り方こそが、最大の敵であると言峰は考える。全てにおいて凌駕する、英雄王のただ一つの弱みであろうと――」。



289



—— 日が沈んだ。  
さあ。  
今夜も探しにでかけよう——。

／ 2

水が染み出すように、彼は直立した。  
全身を苦痛が苛んでいる。  
この世界は、彼を蝕む要素が多すぎた。  
酸素が足りない。  
酸素が多すぎる。  
圧力が足りない。  
圧力が強すぎる。  
ゆらゆらと漂う深海のように、失われた繋がりを求めて彷徨い歩く。  
空腹を満たすには機能が足りない。

思考をするには知能が足りない。  
食事をするには餌が足りない。  
ありとあらゆる空白を抱え、本能により彷徨い続ける。  
現世に洩れ出でた黒色は、今宵も夜の街を跳梁する。

## §

「金羊毛皮はこの国の宝である」  
豪奢な石造りの部屋に、石鎚を落とす声が響いた。  
謁見の間である。  
広く日光を取り入れられた王宮は、その実、国の中枢としては他国より質素であった。  
しかしそれは西の国と並び比べてのこと——ならば山の中腹に建てられた王宮は絢爛豪華  
にして、異邦人を圧倒していた。  
「それゆえ、いかな音に聞こえし英雄殿と言えど、譲り渡す事はできぬ」

ここに王の裁定が下される。

——イアソンがコルクスに赴いて一月の時間が流れ、王に謁見を申し出て幾百。ようやく叶った願いは、僅か半刻を待たずに碎かれた。

「私は従兄の霊をお慰みするため、金羊毛皮を手に入れなければなりません」

「渡せぬ。——ペリアス王に何を言われたのか分からぬが、アレは人が手にして良いものではない」

王の言葉はどこまでも厳格だった。

仲間を集め、海を渡り、艱難辛苦を乗り越えてきた英雄に対し、一片の慈悲もない。

——それを、自らの財を惜しむに過ぎないのか、また王の言葉通りのモノであるが故に拒むのか、頭を垂れる若き英雄には判断がつかない。

「……………また参ります」

彼は搾り出すと、王の前を辞す。

そこに、

「無駄だ。幾百と訪れようと答は変わらん」

変わらない、岩石の堅さをもって響いていた。

先導する侍従に従い、彼は王宮を出る。

山間に建つコルキスの宮殿から、仲間達が待つアルゴアの船へは一日を要する。圧倒的な海抜を誇りながらも海に面した天然の要塞である。この国を攻め滅ぼすとして幾万の兵が必要だろうと、ふと考えた。

——無意味な想像だ。

例え何千万と兵を集めようと、難攻不落の王宮を攻め落とすのは不可能だろう。

天然自然に守られた要塞のみが障害なのではない。

この地には、噂に響く大魔女が住んでいる。

彼は夕暮れの山頂を見上げた。

山肌は朱に染まっている。——周囲を灰色に覆われたこの国を彼は好いてはいなかったが、

この時はただ、移りゆく風景に眼を奪われた。

山頂までは——遠い。

国の権威を示す王宮は、この国において中腹に位置している。ならば、天の頂には何が建つというのか。

そこには天と大地の娘にして、全ての力持つ<sup>カ</sup>魔女<sup>テ</sup>の神殿が建てられている——。

頂きの神殿よりコルクスを一望し、メディアは風になびく髪を抑えた。神殿の巫女として  
仕え、生まれ出でた時より魔術の鍛錬に身を割いている彼女にとつて、山頂より見下ろす景  
色は見慣れたものだ。

まだ年若い少女である。

成人までは遠く、同年齢の少女と比べても華奢な外見は小さく頼りない。肩口で切りそろ  
えられた青い髪は風に揺れ、ぱたぱたと頬にはためく。——それを手で抑え、彼女は一人、  
蒼穹を仰ぐ。

彼女の立つ位置は、神殿より真つ直ぐ歩み出た最初の分岐点。ここには左右に折れ曲がる  
階段がある。

——最も高い場所に彼女はいる。  
——最も高い場所に彼女はいる。

普段は雲に隠れてしまうそこは、穏やかなほど澄んでいた。

雲が出ておらず、空の青と遠くに映る海が天と地を二色の蒼に染めている。流れ行く風に  
揺れた髪も青——彼女はこの色が世界で二番目に好きだった。

もう少しで、空が変わる。

太陽は遠くの地平線に沈み、その時訪れる彩光を神殿の端より待っていた。



空が紫に変わっていく。待ち望んでいた色が天へと映し出された。

身を包むローブと同じ陽光は、最も天上に近い彼女を柔らかく包んでゆく。天気の良い限られた時間に共も連れずに一人眺めるのが、彼女のささやかな大冒険。

——侍従の者たちもそれを知ってか、メディアがうずうずと外を見ると気付かない振りをして側を離れる。

コルクスの姫であるメディアは花よ蝶よと大事にされていたが、決して軽んじられているわけではない。この国において偉大なる全ての術を統べる魔女を除き、メディアに敵う術者はいない。

それをコルクスの民の誰もが知り、また己の力を振るうことなく、誇示するのでもなく、優しく微笑む少女はこの国の全てから愛されていた。

時間と共に色彩が変わる。ここは世界の東の果てではあるが、少女は外界に想いを馳せるのではなくこの国からみえる風景こそ愛していた。

例えこの神殿より見える地平線、水平線の遥か向こうに伝え聞く黄金郷や全ての知識集う都があろうとも、生まれ育った岩と海に囲まれたコルクスが彼女の誇り。

外に出ようとも自分はここが帰る場所なのだと思っている。優れた魔術を操るメディアにとって、予感とは即ち確定された運命のことだ。

—だから、ここは世界の東の果て。

—私の在るべき場所。

—私はそれをいとおしく思っています。

外界よりやってくる英雄や商人たちは、こぞって彼女の美しさに目を奪われた。青い髪と同じ色の瞳。小さな身体は頼りなく華奢であるが、真つ直ぐ立つ姿は確かな強さを伴っている。

それを籠の中の鳥と捉える者。神代の魔女となるべく運命付けられた姫を哀れむ者。憧憬の念を抱く者——。

繰り返される誘いの言葉に、メディアは言葉を返す。

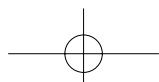
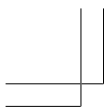
「外界を恐れるのでも、狭い籠に囚われているのでもなく——、この国に在ることが私の誇りなのです」

—束の間訪れる、暖かな光。

沈み行く陽光と黄金に輝く海の向こう——。このように海が光り輝いては大叔母<sup>キレダ</sup>様の住むティレニアの海はさぞかし眩しいのでしようと、彼女はくすりと眼を細める。

太陽が水面を弾き、陽光が閃く。

—光に目眩を覚え、山の灰色と森の緑に視線を移した。



数百メートルの高度を経て、二人の視線が交じり合う。決して届かぬはずの交差ほどの神秘の手捌きであろう。

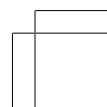
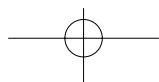
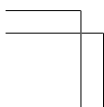
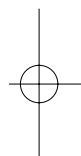
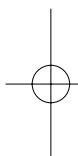
——その日、神のもたらした奇蹟に従い、彼女は生涯ただ一度の恋をした——。

## §

場面が変わった。意識が覚醒に向かっている。映像は曖昧と化し、写り変わる景色はさざめく水面のよう。昏い世界の中、穏やかに肉体へと戻っていく。体の目覚めが近い。意識が切り離されたその時、

——私は、帰りたいのです。

どこか遠い、少女の声を耳にした。



……眼が覚めた。

部屋に備えられた時計を見ると、夜八時を示している。夕食が終わり、部屋で少し休んでる間にうとうととしてしまったようだ。

気合を入れて立ち上がる。今夜から巡回を再開すると既にセイバーと打ち合わせてある。分からない夢を見たせいかな、なんだか胸の奥が痛い。

「顔でも洗ってくるか……」

何気なく頬に手を当てると、そこはよく分からない涙でぬれていた。

完全に眼が覚め居間に戻ると、テレビがついていた。

この家でテレビをつけっぱなしにするのは、一人しかない。

「藤ね……」

一言文句を言ってやろうとして、思い出した。ライダーの使った赤い世界は、学校に残っていた人たちを容赦なく巻き込んだ。

放課後とはいえ部活で残っている人々は、確実に何らかの被害を負っているだろう。それ

はセイバーから聞いた話で分かっていたが、こういう何気ない所で実感として伴ってしま  
う。

見舞いには行かない——行く事ができない。彼女と顔を合わせるのは暫く先だ。  
再会できるその時まで、全てを終わらせておこう……。

「——あら」

キッチンからキャスターが出てきた。

手にはお茶のお代わりらしい、そろそろ彼女専用になってきた湯呑みとお茶請けを持って  
いる。

よくよく観てみると、テレビに写っているのは日本で伝統に成りつつあるドラマだった。  
「……………」

彼女は慣れた様子で最も見やすい位置を陣取ると、煎餅を摘みつつ湯飲みを傾けている。  
ぼりぼりと平和な音が聞こえてくる。

俺が彼女に抱いていた——神代の魔術師であり、数々の強大な魔術を持つ彼女に抱いてい  
た神秘的なイメージは、ここにきてもはや完膚なきまでに壊滅的だった。

鉄球で粉砕しローラーで均してもこうはなるまい。

「……坊やも欲しいの？」

「いや、それうちのだから」

「あらそう」

どこ吹く風だ。

——まあ、いいか。

ここには争いの気配がない。聖杯戦争が続く中、そんなサーヴァントがいてもいいんじゃないかと思う。

「……ちよつと出かけてくる。留守番よろしく」

「ええ——」

それだけを言っつて、外に向う。

ふと居間を出る前に振り向くと、彼女はこちらを見ていた。

——部屋から居なくなるまで見送りをしてくれていたのだろう。彼女は決して献身的な性格ではないが——あるいはそれは、俺が本来のマスターでないから献身的な彼女に接する機会が無いだけなのかもしれないけど、ならばこそ彼女は律儀な所があると思う。

「……なに？」

先ほどみた、夢の少女がちらついた。

目の前の大人の女性とは比べるべくもなかったが……少女の儂げな姿に触発でもされたのだろうか。言わなくてもいい事をつい口にした。  
「ふと思ったんだけど」

また何か、と驚いたような身構えたような——あるいは何かを思い出して照れたような——そんな曖昧な表情になる。

瞬時に照れが移った——瞬間後悔しかけたが、逆にそれで意地でも言つて驚かせてやるか——って気分になる。

「物騒なことをしないアンタって、結構好きかもしんない」

「……………」

たっぷり十秒は固まった。

それにキャスターはふっと吐息をもらした。

「——それは残念ね。私は魔女ですから」

「そっか……そりゃ残念だ」

……驚いた。

単に維持や思いつきで言っただけなのに、今の俺は本気で残念に思ったのだ。キャスターは明言を避けたが、そこにどんな意味がこめられてるかは明らかだった。

じゃあ、と手を上げて中庭に出た。

「うん……」  
なにか、予感がして立ち止まった。

「どうしました？ サクラ」

傍らに佇むサーヴァント——ライダーが問う。

冷静な口ぶりではあるが、酷薄さは感じられない。間桐桜を真摯に案じているからこそ冷静なのだと既に知っていた。

「う、ううん……何でもない」

慣れた気配を感じた——ように思った。それが何かは分からないが、ただ間桐桜がこの前まで持っていたモノなのだと言感めいた確証がある。

——しかし、それは彼女にとって望むべきものではない。

だから——いつ捨てたのか分からないのだが——今手元には偶然に偶然を重ねた幸運に過ぎなくて、本来は当事者であったはずの彼女が、いつのまにか傍観者に回ってただけの事実が気付くことが出来なかった。  
役者は舞台から降ろされている。



——しかし、失われた役を探して彷徨う何かの姿がある。  
それを間桐桜は知らない。

——自身の持つ魔術では予感を判別することが出来ない。  
彼女の持つ属性は水。

間桐の使う魔術は自ら肉体に返るものであり、大概においてそれには虫や吸収の魔術が選ばれる。水気に属する虫を使うに最も相性のいい属性は、当然水である。故に間桐に入る以前より持っていたモノは邪魔であり、肉体の束縛も間桐に合うようにと老人に手を加えられた結果だ。そして、あのままでは彼女がいかにように変化したのか、その結果どうなるのかを知っている物は居ない。

もし知るものがあるとすれば、それは傍らに立つ自らのサーヴァント、ライダーだけであらう。

彼女は触媒を用いられずに召喚されたサーヴァントだ。何かを為すべき願いはなく、ただ『召喚者が間桐桜であった』という、その事実のみで召喚に応じた。

——故に、求める願いを持たない彼女は、かの剣の騎士のマスターと同じ。  
役割ではなく、願望ではなく、使命でもってこの世界に存在しつづけている。  
「良くない気配があります」

「……うん。早く先ば……遠坂先輩の所に戻らないと」

彼の所に行くことは、もう出来なかった。

遠坂凛は自分を守ろうとしてくれているし、——それに、彼はもう選んでしまっているから。

あの時、中庭で戦いながら告げた言葉は、隣人を守るといふ決意の表れだ。彼は間桐桜を大事に思うが故に、危険から遠ざけ、戦いを知らぬままにしようとした。

それは紛れもなく嬉しい言葉だった。

たった一年半——それは祖父の命によって監視するだけだった自分が彼と共に歩んだ時間であり、かけがえないものになっている。

彼もその時間を大事にしてくれているのだと思うと、胸の奥が暖かくなる。

それが何よりも嬉しく——また、悲しい。

間桐桜を大事に思い遠ざける心——それこそが、彼の持つ気持ちを表している。

彼は自分を共に歩く存在として見ていない。それがはつきり分かった瞬間だった。優しさではなく真なる願いによって繋ぎ止めるなら、全てを敵に回してでも自分を庇って欲しかったという想いがある。

しかし、それは果されず今後も叶えられる事はないだろう。

——ならばどうしよう、と桜は考える。

彼の立場は曖昧にして微妙だ。あくまで外野としか聖杯戦争に関っていないなかった桜にも、

それが手にとるようにわかっている。

キヤスターを敵視する遠坂凛は、屋上の一件で明確な敵対関係から若干変化が訪れたかもしれないが、あくまで認識に修正をいれただけであって気を許している訳ではないだろう。桜自身も——マスターであると知られる前だが——彼から遠ざけられており、マスターであることを隠していた件が引け目となり、素直に会い辛い気持ちがある。

だから、彼女は遠坂凛に協力しようと思っていた。

あくまで今の衛宮士郎への認識を聞いた上で判断するつもりだが、想像は間違っていないはずである。

それに、仮に再び両者が激突することになったとしても、近い位置にいた方が止められると思っただけだ。

——それは、今までの彼女にない頑迷さだ。

目覚めてから驚くほど体が軽い事に桜は気付いていた。

目の前のサーヴァントに通じるラインのほかに、もう一本の線がずっと自分の身体に埋まっていた——それが、今断たれている。

体内に巣食う虫がいるのは今も同じだが、それに掛けられた強制がなくなっている。今まではずっと体中の神経に網を張って、いつか喰らい尽くされてしまうまでの猶予でしかないはずだった。

全身をがんにがらめにされた自分に未来はなく、いつか人で無くなってしまふ失敗作だと  
言われ続けていた。

間桐に家に来てから未来はなく、僅かに訪れた平穏もただ無くなっていくだけ——そう、  
自身の破滅が約束されていたのに——。

糸が断ち切られた。

風に吹かれてゆく風船だと思う。

誰かの手にあつたとして、いずれ萎みゆくもの——風に流されれば広大な世界には今まで  
知らなかった危険が沢山ある。でもそんなの不安になんてなりつこない。そこには手に入ら  
ないと諦めた大空が、どこまでも遠く広がっているのだから——。

「私の姿は目立ちます。霊体化しますのでくれぐれも注意を」

「うん」

ライダーの姿が消える。

——時刻は夜。

そう遅い時間ではないはずなのに、街は静まり返っている。

人の気配がない——よくない風が吹いている。

昏睡事件に殺人事件とここ最近立て続けに街を騒がせ、滅多に人は外に出なくなった。

——その中を彼女は泳ぐように歩いていく。  
張り詰めた空気がある。

そこには、頭を屈め、亀のように閉じ籠って災害をやり過ごそうとする、人々の持つ不安のイメージが伴なわれていた。

——聖杯戦争のことを、冬木の街で行われている大儀式を知るものは少ない。

——それでも、生命としての本能が知っているのだろうか。

——ここは既に戦場である。

——いつ誰と出会い、殺し合いを始めてもおかしくない非日常。

見慣れた交差点にたどり着く。

通いなれた衛宮士郎の屋敷と、憧憬を持って見上げた遠坂凛の洋館へ至る中間点。

「ライダー……？」

漆黒の衣のサーヴァントが実体化する。

「サーヴァントの気配があります……どうやら戦闘中のようです」

眼帯越しに桜を見る。

戦いの気配を感じ取っていたからこそ、知らずに張り詰めていたのだと理解する。緊張に喉がなる——争いを好まない彼女の気性からするなら、撤退か黙殺こそ相応しい。

「……いきます」

しかし、その逆を選択する。

脳裏に二人の人物が浮かんだ。彼らは一度戦いを交えている——どちらも大切な人物であるゆえに、もしかしたらという思いが覆せない。

「——はい。先行します桜は後ろに」

領きを返すとライダーは地を蹴った。その背中が見る見る遠くなっていく。

——遅れないようにしないと。

しなやかな動きに、瞬間見惚れた。

自分のサーヴァントはここまで美しい存在だったのかと気付かされたように。

身体のうちには巢食う虫も、どうやら大人しいようだ。この調子ならばライダーを使役するのに支障はないはず……!!

静まり返った住宅街を駆け抜ける。深山街と新都を結ぶ大橋に公園がある。そこが目的のようだとあたりをつける。

知らずに足が震え、止まりそうになった。この静かな街並みにおいて戦慄を抱いていたのか。それは彼女がマスターだからに他ならない。

彼と姉を案ずる気持ちと共に、徐々に不安が沸き起こっていく。——もしかしたら、この先で戦いになるかもしれない……そのことがとてつもなく怖い。

視界が開ける。休日に賑わう公園は開けている。ライダーが一人の男と向かい合っている。その影を見たとき、衛宮士郎である可能性は捨てた。

「……………」

緊張に足が止まる。

そこに一人の青年がいた。

「ほう、お前か」

金髪に赤い眼の青年がいる。

以前に一度話し掛けられたことを、桜は思い出していた。

あの時の彼の言葉はそう――。

『今のうちに死んでおけよ。馴染んだら死ねなくなるぞ』

――桜に自殺しろと告げていた。

「余興のついでだ。杯へと至らなかつた未完成品に興味はないが……貴様のサーヴァントで器を満たそう」

「……………」

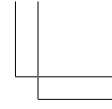
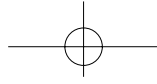
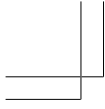
その意味はわからない。

ただ絶対的な殺意を持って、青年は桜に歩み寄る。  
彼女を庇うようにライダーが前に出た。

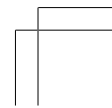
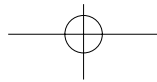
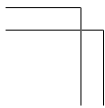
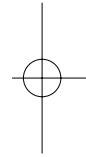
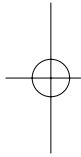
「蛇か。……なるほど。主同様、サーヴァントまで生き汚い」

青年は何の武装もせず、武器すら手に持っていない。  
しかし目の前にいる黄金のサーヴァントは、武装などなくても絶対的な強者だった。  
彼は無造作に左手を上げパチン——と指を弾いた。  
そこで始まったのは戦いではなく、戦争だった。





311



## Interlude / 11 悪夢、そして

彼は彷徨っていた。  
本来何者かであったもの。  
産み落とされるはずだった何か。  
いずれ完成すべき器の中より生まれ出る者——。  
器が欠けている。  
本来孔など見当たらずの器に、ぽっかりと空いた孔がある。  
不完全な容器は当り前のように中身を溢し、撒き散らした。零れ行く彼を掬い上げ、仮初の形を与えた者もいたように感じるが——そもそも、彼には記憶する機能が備わっていない。  
彼には知能が無い  
彼には身体が無い  
彼は餓えている  
彼は求めている  
彼は彷徨いつづけ——

「未だ何者でもない泥が姿を得たか。束の間の跳梁は楽しんだか？」

その人物に出会ってしまった。

怖い——怖い怖い怖い怖い怖い怖い……！！

感情すら持っていないはずなのに、本能により逃げた。

かつてヒトであったもの。人をに否定されたモノ。人から切り離された物——。

未だ産み出されている途中の彼は、まだ彼女無くしては存在しつづけられない。

——だから早く見つけないといけない。

脳髓も心臓もない影が本能により逃走する。

それは圧倒的強者による恐怖であり、自らの存在が消えゆく消滅の恐怖だ。

影の動きは早い。

鈍重でうな布めいた外見は深海魚を思わせる。この大気の中を掻き分けるように進み行く。

「止まれ」

ぱちんと青年が指を鳴らした。纏めて射出された武器が突き刺さる。爆音としか呼べない音が鳴り響き、布めいた全身を剣が、槍が、斧が、鞭が、弓が、矢が、石斧が——ありとあらゆる種別、十一の武器が貫いていく。

身体の無い影の動きが止まる。

肉体を構成する本体の魔力は無敵だとして、現界するために零れ落ちた力は限りがある。それがごっそりとなくなっている。

痛みはない。そのような機能はついていない。

だというのに——影はその身を這いつくばらせ、すすり泣くように身を震わせる。四体のサーヴァントを戦慄させた影は、たった一人の王の前に膝を屈した。

動きを止めた影の前に、ギルガメッシュは距離を置いた。

「つまらぬ。思った以上に呆気ない」

背後の空間から柄が伸びる。

それを右手で掴むと、一思いに振り下ろす。

飾り気のない曲刀が闇夜に半月を描いた。重くて堅い、鈍重な泥人形を切り裂いた音がし

て、影の動きは弱くなる。

——元々聖杯の中身で作られた泥人形。このようなものか。

アインツベルンの真似事をして生み出された聖杯は欠陥品であった。本来ありえない隙間から泥は漏れ出し、本体の無意識に手を伸ばして形を得た。

欠陥品でもいいと思って捨て置いたが、このような雑霊を産み出されるとは論外だ。

聖杯の中身はヒトに悪意を持っている。捨て置けば人を喰らい尽くす、貪欲なサーヴァントとして肉を得よう——人類の粛清は彼の快樂でもあるが、王の持つ権利に挑むモノは見過ごせぬ。

無差別殺戮が目的ではないのだ。

増えすぎたヒトという種の選別こそが、ギルガメッシュの目的である。

その結果、王が生きる価値無しと判断した人類全てが死に絶えようとも構わないのだ。王による選別が行われるか否かが重要であり、その中に王権に手を伸ばす雑霊が生き残って良い理由は存在しない。

「ふん」

背後の空間から柄が伸びた。

無差別に掴み、振るい、影を切り捨ててゆく。

既に反撃を行う力は残っていない。

最初の一撃で致命傷となるはずの攻撃から生き残ったのは、彼にとって意外ではあったが、影を構成する魔力の大部分は失われている。

——ならば少々手間が掛かるが、自らの手で剣を振るう。

戯れと思つたが、意外な手間に驚いた。

十回ほどで切り上げ、面倒とばかりに背を向ける。

既に見苦しく這う影には、一握りの魔力しか残されていない。

去りながら、掲げた左手の指が重ねられる——ただ二度、弾かれた指が高い音を鳴らした。

適当に選別した二十三の宝具が跳び、完膚なきまでに切り裂き、叩き潰し、磨り潰し、両断し、殲滅し尽くした。

爆撃をしたような、惨状が残っている。

——この状況下で生き残れる者などいまい。それが例え実体がなくとも。

そう判断し、今度こそ立ち去った。

「——つまりぬ余興だった。暇つぶしにもなりはしない」

こちらに近付いてくる気配がある。

戻るのは、その顔を見てからでも遅くは無い——。

「杯……？ 未完成品って……」

その言葉の意味がわからないというように、呟いた。

「そのように生み出された雑種だということだ」

青年が片手を上げる。

それを敵対する意志だと思ったのか――

「前に出ます。サクラは下がっててください。……近くに居ては邪魔になる」

「ライダー……？」

彼女に言われるまでもなく、知らず知らずに桜の足も下がっている。

「気をつけて」

「はい」

それだけをいい、踵を返した。

パチン――と青年が指を弾いた音がする。

次に聞こえたのは爆発したとしか思えない震動と、地面を揺さぶる衝撃だった。

「――え？」

思わず立ち止まる。

振り返ると、そこには公園の石畳に直立する武器の群れ。無造作に投げつけられたとしか思えないほど乱立している。

そこにはありとあらゆる武器があった。

長剣があり、斧があり、槍があり、矢があり、短剣があり、曲刀があり、矛があり、戟があり、刺突剣があり、石槌があった。

マスターである桜の目には、それが全て宝具であることが分かった。

「なん……で」

——宝具は英霊が生前持っていた武器だ。

——なのに、この金髪のサーヴァントは無尽蔵に武器を取り出してくる……？

それは本来ありえない光景だった。

英雄において宝具を複数持てることは、その英雄の格を示している。

豊穰の女神であり、神話に名高いメドゥーサをして、魔眼を含め片手に余るというのに、青年が取り出す宝具は既に二桁を越えている。

正体不明というのなら、青年こそが謎だった。本来ありえないはずの第八のサーヴァントにして、無尽蔵に宝具を持つ英雄である。

彼が挑む理由も、その正体も謎のまま。



困惑を隠せず、戦いを見守るのみ――。

目の前に迫り来る劍群。

「――っ！」

主と同じ困惑を持ちながらも、絶対の窮地において彼女は冷静だった。放たれた速度は早いものではない。電光のようなセイバーの一撃に比べると、遅すぎるといっても過言ではない。

――しかし、数が多い。

なおかつ全てが宝具で構成された十三の矢は、どれに当たっても致死性の一撃となる可能性を秘めている。

青年は表情を崩していない。

その一撃で決着がつくと核心している。それを――。

「ぬ」

軽快に石畳を爪先が弾く。

迫り来る全ての武器を前に、短剣も使わず、ただ速度だけかわしきった。逸らされた劍

は地面を次々と穿っていく。

石畳に軽々と穴をあける威力——どれもこれも名の在る武器に違いないと彼女はあたりを付ける。

青年は自身の放った必殺を避けられたことに動揺することなく、

「なかなか早いではないか。では次の課題だ」

再び左手を上げた。

背後の空間に武器が現れた。

刀身をこちらに向ける——その数は十七。

先より四ほど増えた数は問題にならない——ただ、入り混じる武器の種類が明確に変わっている。

先の矢は剣を基本としたモノで構成されていた。それが、今度は剣、短剣、斧、槌、槍と異なる種類で構成されている。

全てが目の前のサーヴァントの合図と共に投擲されるとして、武器による速度差は彼女を取り囲む檻となる。

未だ無傷の彼女は、地面に手をつき四足となる。

紫の髪が大地をすべる。そこには一匹の美しい蛇がいた。

「——いけ」

パチンと合図が放たれた。

迫り来る短剣を交わし、剣の後ろに隠れた刺突剣を見破る——曲線を描いて頭上から迫る石斧を背後に飛んで交わすと、真横から殴りつけるように槌が振るわれる。

この窮地においても、ライダーは短剣を使わない——否、使えないのである。全てが宝具で構成された武器を前に、ただの短剣では一撃の元に碎かれる——それが分かっているが故に、無手となって速度を上げる。

「蛇だと侮っていたが、なかなかどうして上手く避ける」

パチン——と三度宝具が放たれる。

ライダーに焦りが生まれる。このまま避けに徹するならば——そして、彼の武器が今のままならば、後数十分避けきる自信がある。

しかし、そのようなものでは攻防とは呼べない。

ただ武器をかわすだけなど、敗戦にもならない見戯だ——そして、いずれ避けきれなくなった時に全てが終わる。戯れに遊ばれるだけの戦闘で殺されるのは、彼女の矜持に合わない。

ならば、攻勢に打って出るか？

それは戦の常道であり、彼女の持つ敏捷を最大限に生かせる、生存への唯一の道であったが、この場において限りなく遙かな高みの望みだった。

青年のスタイルは、既に戦闘とは呼べない。

圧倒的な——その実、全てが致死性の一撃でもって、戦争を仕掛けてきている。

弾幕が尽きた時に勝機が見えると侮ると、確実に負ける。

——逆に、自身は遊ばれているが故に生かされてる。

そう考えるべきだと、ライダーは思った。

彼はライダーが避けられる範囲で攻撃を仕掛けている。彼女の瞬間的な行動半径は五十メートルをゆうに超える。その範囲内ならば武器が放たれたとて、自身の敏捷を超える速度でないなら避けることは容易い。

そして青年は宝具による攻撃を主体としたサーヴァントなのか、彼自身の能力はそこまで高くは感じない。

しかし——矢として放たれつつける宝具が、文字通り檻として放たれたらどうだろう？

彼女が動ける範囲——その全てを覆い尽くすほどに放たれた宝具を、避ける術は存在しているのだろうか？

——答えは否だ。

点は避けられても、面を多い尽くすほどに放たれば当るが必定。

彼の宝具から正体を探る事は出来ない——ただ、この圧倒的な物量。全てを破壊しつくさんと放たれるのなら、間違いなく対軍宝具だろうとあたりを付ける。

軍という群れる力に対し、個では立ち向かえない。  
直接青年本人を狙う術が無い限り、彼女に勝ち目は存在しない――。

距離を置いて戦いを見ていたが、ライダーは敗色濃厚で青年との戦力は絶望的だった。  
「あ……ああ……」

彼女は魔術師として育てられたことがない。  
――老人や父親として在ったモノは彼女をすぐに蟲倉に押し込み、身体を弄らせるだけの日々を送っていた。

桜自身がどのような能力を持ち、どのように知識を得ようとも省みる事は無い。  
肉体に間桐の文字を刻めばよいとばかりに、桜への教育は為されていた。  
それゆえ、サーヴァントを使役するマスターとなっても、彼女は魔術師足り得ない。こと  
ここにおいて、間桐桜と衛宮士郎は同列だった。

術を使う知識があっても戦いの経験がない。目の前でぶつかり合うサーヴァントを見た回数  
は僅か。自身のサーヴァントを圧倒する力の前に、震えを抑えきれないのも当然だった。  
「サクラ」

「――ッ、ライダー？」

声による会話ではない。サーヴァントとマスターを繋ぐラインを使用した簡単な念話だ。  
「宝具を使用します。よろしいですね」  
「……わかった。ライダーに任せます」  
「プツリと途切れる。――戦闘に全ての意識を傾けたのだ。」

彼女のサーヴァントは諦めていない。

――なんて無知だったのだろうか。

サーヴァントを信じるということさえ、今までの自分は知らなかったのだ。

§

「？」

ギルガメッシュは動きを止めた。

余興は終わった。後は目の前のサーヴァントが避けられぬ攻撃を放ち終わりとする。そのつもりであった。

全ての宝具の原典を持つ彼に負ける道理はなく、それはこの戦いとして同じこと。

圧倒的力の差を前に、目の前のサーヴァントは戦意を失うでもなく、更に速度を上げつつ

ける。

「蛇と侮ってはいたが、さすが抜け目のなさよ」

そろそろ首を刈り取り終わるとしよう――。

彼は無造作に間合いを詰め、踏み込んだ。虚空に手を伸ばす。そこには一本の柄がある。投擲ではなく、彼はソレを引き抜いた。

巨大な鎌があるでしょう。

――どのような用途で用いれば、この神器は作られるのだろうか。

鎌とは柄ではなく、刃に長さを持たせ滑らせることで刈り取る道具だ。それを武器として転用するにしても、扱いは同じのはず。

その作りこそ鎌だというなら、今ギルガメッシュが手にした物は当てはまらない。

刃ではなく、柄にこそ重点を置かれた武器であった。

柄が長い――長身である彼をしても遥かに長く、先端に備え付けられた刃は通常の大鎌と変わらない。刃が短いのではない。柄のサイズが桁違いだった。

もとよりヒトに振るうものではなく、このような鎌を用いて首を狩るなら、どれほど巨大な怪物だろう。

重たげな様子もなく、ギルガメッシュは横に一閃した。

目の前の女怪が予測したサーヴァントならば、この一撃は致死性となる。宝具の弾幕を前

に危うい綱渡りをしていたサーヴァントに、この攻撃を避ける術は存在しない。  
故に必殺。

必ず首を断つという、神より与えられし怪物殺しの鎌剣ハルペーによる一閃だった。

「む!？」

その動きが止まる。

捉えたはずの対象を、この時彼は見失っていた。

強烈に脳髓に訴える光がある。

目の前で魔力の嵐が吹き荒れていた。

「魔眼か……!？」

宝石に切り取られた虹彩から、何人たりとも瞳逸らす事あたわず。

英霊メドゥーサの象徴たる、魔眼キュベレイがその姿を表していた。

首元を狙う一閃を、ギリギリで捻ってかわした。

——ハルペー!？」



過去に怪物と化した彼女の首を断ち切った、神剣である。既に怪物とメドゥーサは別の存在であったが、あの特徴的な姿を忘れた事は無かった。

ハルペーとは英雄ベルセウスが所持していた鎌剣のことである。巨大なゴルゴンの首を断ち切るために鑄<sup>つ</sup>たれた鎌剣は柄が非常に長く特徴的な形をしている。——そのため、忘れようとも忘れる事などできない。

未だゴルゴンではないメドゥーサに対しては完全に致死性の一撃とならないが、かの武器が持つ特性は『屈折延命』。

不死性を持つ怪物退治に特化された神剣で、これに付けられた傷は自然治癒以外では治せなくなる。

——サーヴァントにおけるダメージとして、手足を断たれるのは重要ではない。

本質的な弱点は具現化の核たる心臓と頭、それらを繋ぐ首である。

この三箇所を潰されない限り即死することはなく、よほどダメージが蓄積しているか、魔力が枯渇していない限り、動脈を断たれたとしても出血死はありえない。

——しかし、そのサーヴァントにおける常識を覆すのがあの剣である。

自然治癒でしか治せない傷を負わせるということは、本来たいした枷にならない四肢を狙った攻撃が驚くほど有効になる。切り落とされた手足を再生する事はできず、仮に今生き残ったとして、欠損を抱えたまま戦いつづけることになる。

ライダーは目の前の鎌剣を、ゴルゴンとメドゥーサという属性のもつダメージの過多ではなく、純粹に厄介な武器として認識した。

既に魔眼は展開されている。

魔力を大量に消費してはいるが、マスターに制限が掛かっていた時とは違う——全力で敵を押し返して勝機を見出す——！

よほど高い魔術耐性が強運を持っているのか、石化そのものに対して抵抗されている。

——が、目の前のサーヴァントの動きは眼に見えて鈍い。

元々、身体的能力では特出する物がなく、剣技が得手というわけでもない。宝具の多彩さが異様ではあったが、このままなら基本能力の差で押し込めると確信する。

——両手に短剣を構える。

ジャラリと鎖が鳴り、鎌首をもたげた咆哮として響き渡る。

「——ちいい」

戦闘開始以後、初めて青年が舌打ちする。

それは自身の能力では、格闘戦で不利であることを悟っていることを意味している。ライダーは自分の狙いが的中したことを確信した。

後ろに飛び退いた金色のサーヴァントを、更に速度を上げて追撃する。

——この場でセイバーと戦ってから約一週。摩擦で燃え尽きよとばかりに速度を上げる彼

女は、過去、一刀の元に両断した剣の騎士をしても流星としか見えないだろう。

パチン——と指を弾くだけの動作が遅すぎる。

ギルガメッシュはそのことに苛立ち、背後の空間から剣を抜き放つ。無骨ながら美しいラインと黒い刀身を持つその剣はデュランダル。

聖騎士ローランの愛用した奇跡の剣であり、所有者の魔力と関係無く切れ味を保つ宝具である。

一息の元に出現し振るわれた動作は、それでも彼女の前で遅すぎた。

疾走するライダーの前に、ギルガメッシュは完全に間合いを詰められた。

「——雑種が……ッ！」

怒りもまれる。

目の前のサーヴァントを殺しつくさんと、虚空に次々と刀身が現れる。

しかし、それでも今から射出するには遅い。彼が間に合う道理は存在しない。

既に彼女は短剣を振り上げ——。

「なっ」

驚きは絶対的の有利と思われた、ライダーの口から発していた。

甲高い音を立て、短剣が止まった。

目の前のサーヴァントが持っていた黒い刀身の剣は、既に消失している。彼は無手となっ

ている。

ならばライダーの短剣を止めたのは――。

「――終わりだ。雑種」

パチンと指が弾かれた。

虚空から突き出したままの刀身に阻まれ、短剣を引く事ができない。――所詮はサーヴァントの武器である。魔力として還元し再度呼び出せば良いと手を離す。ここまで、彼が弾いた音が響くまでに終わっている。

後ろに下がるか、上に逃げるか――上空は危険だ。回避できなければ宝具の雨は容易く肉体を貫くだろう。――ならばと、後ろに跳んだ。

剣が次々と射出される。しかし敏捷においてライダーには絶対の自信がある。

全ての制限のない今において、突き出されるだけの剣より後退するライダーの方が勝っている――。

「――ふん」

再び指が弾かれた。

「――ッ！」

目のくらむような衝撃と共に、視界が跳びかかる。衝撃に脳が揺さぶられ意識を失いかけていた。

そのままの勢いで横殴りに吹き飛ばされた。彼女の身長を遥かに超える金槌が虚空より現れ、ひと薙ぎして消えていく。完全に不意打ちを食らったライダーは両足から着地をするが、未だ意識は朦朧とし、たたらを踏む。

短剣も失い無防備な彼女に向け、青年が虚空の柄を握った。

本来届かないはずの間合いを物ともせず、再び振るわれたそれは――。

「っ――！」

ハルペーの刃を今度こそかわしきれなかった。首の皮膚を裂いて切り込まれた刃に鮮血が滴る。

動脈、気管のいずれも傷つけられてはいないようだが、この首の傷はもはや治癒できない。完全に首を刈り取られるタイミングだった。それがかなわなかったのは、未だ魔眼の効果が青年を縛っていたからに他ならない。

――届かない……。

絶望的なまでに、ただの一撃も届かない……!!

「雑種にしては頑張るものだ。見直したぞ」

「――貴方にそのように呼ばれる謂れはありません」

「王である我からすれば、貴様のような蛇など雑種で充分よ。我に名を呼ばれる幸運を享受できる者など、この世界でも有数のみ」

「……傲慢な男ですね」

ライダーの痛烈な皮肉にも、眉一つ動かさずギルガメッシュは笑う。

「なに。それが王たる者の務めだ」

左手を上げ指を弾く。

——迷っている暇はない。

どれほど目立つ宝具だとして、他のマスターの目を避けるあまり自身が先に死んでは意味がない——秒にも満たない時間に彼女は決心する。

止めとばかりに宝具が打ち出される。

その数は三十を上回り、逃がさぬとばかりに勢いを増す。

「——！」

それを、焼け付きそうな両足で回避した——した、つもりだった。

ザクザクと腕に刀身が食い込む。交わしきれなかった剣が一つと短剣が一つ。短剣は右の

二の腕に刺さり、剣は片足を浅く切り裂いた。

——戦闘に支障はない。

——このような軽症で済んだ幸運に感謝を——。

「——！」

出血の止まらない首筋より流れ出した血が、真紅の魔方陣を描いている。

虚空に留まるそれが、大気中の魔力を吸い上げる。

「ッ」

青年の目が細められる。

指を鳴らす——倍化した数が襲いくる……！

「……ライダーっ！」

主の声が聞こえた。

既に魔方阵は完成している。

——いかな宝具であろうとも、この仔を貫けるものは存在しない……！！

ガシャン——と直撃した全ての宝具が砕け散った。

「な——に——!?!」

戦闘が始まって以後、ギルガメッシュが初めて驚愕を上げる。

地上から飛び立った白色の彗星は上空を旋回し、地上のギルガメッシュへと向けて一直線に舞い落ちる——。

「く」

指を弾く。宝具が打ち出される——白い彗星の正体は見切っている。ならば主共々串刺しになる姿を想像し——。

「……………」

その全てが破壊され、ギルガメッシュは弾き飛ばされた。

「……神代の時代より生き続ける天馬か。さすが怪物、珍しいモノを持つてるな」

「ならばその正体も知れましょう。——この仔を凌駕する宝具は存在しません」

「それこそ、思い上がりというものだ……！」

あの天馬は神話上から最も長く生きたものだと言われ、ギルガメッシュはあたりをつける。魔力の固まりである幻獣に対し、宝具の優位性は失われる。

ヒトの作り出した武器では、数千年の時を経た幻獣を前に打ち砕かれるのは必定だ。魔力はより大きなもので打ち砕かれ、神祕はより次元の高い物で塗り替えられる。

神代より生き続ける天馬は魔力量だけなら竜種に相当するだろう。出し惜しみしたつもりはなかったが、ことごとく宝具を砕かれたのがその証拠だ。

「——終わります。騎英の、手綱……！！」

その真名を持って、ライダーの姿が消える。

遙か超々高度に達した白い彗星は、視認できぬ隕石と化して地上のギルガメッシュを襲い尽くす。

宝具を持って開放された天馬の前に、一級の宝具だとして砕かれる。

彼が絶対の有利であった物量を封じ、ただの一撃——しかし、確殺する致死性の攻撃を伴ってライダーの白い彗星が地上を襲う。



青年に逃げる様子は無い。

ただ口元に笑みを浮かべ――。

「天の鎖」よ」

虚空より鎖が放たれる。

しかし、今さら鎖を呼び出したとて、彗星と化した彼女を止める術は存在しない。どのような宝具であろうとも、この威力を止められるモノは存在しない――。

地表に到達する。未だ鎖に捕まる事は無く、無防備なサーヴァントは蒸発する……！！

「なっ」

今度こそライダーは驚愕に震えた。

虚空より出現した鎖は、青年の前で次々と重なりあい、一つの網と化す。高高度より飛来する隕石を止めるには限りなく頼りない。だがソレはどのような神秘の具現なのか、今や完全に天馬の動きを拘束していた。

手綱を操り逃れようとするが、網と化した鎖は今や完全に天馬をがんにがらめに拘束している。不可思議なのは、宝具の威力まで打ち消されていることだ。

あれほどの勢い、あれほどの魔力ならば、余波だけで彼を巻き込んで焦土と化すだろうに……！！

ライダーの驚愕を眺め、ギルガメッシュは満足げに頷いた。

「天の牡牛を繋ぎ止めるほどの鎖だ。——惜しいな。それが年若い天馬であるなら、この鎖も破れたであろう」

高い神性——それこそ竜種に匹敵するほどの年代を経た神祕であるが故に、天の鎖は破れない。

しかし、あれほどの天馬でなければ宝具の投擲は避けられまい——どちらにしろ、彼と相対した時点でライダーの運命は決まっていた。

「雑種に我の剣を使う必要は無い——しかしなかなか楽しませてもらった。これは褒美だ」  
 そう言って抜き放った剣は原罪。

本来セイバー用として温存しておいた剣である。引き抜いた者を王とする選定の剣——セイバーに馴染み深い王権を象徴とする選定の剣は、北欧神話に伝わる英雄シグムントの魔劍グラムの更なる原型——！

余興の代金としては上等なものであろうと英雄王は一人頷く。

刀身が黄金の輝きを放つ。

逃れられぬ死の前に、ライダーは渾身の力を籠めて鎖を引き千切ると天馬の背を蹴った。

ライダーが彗星ならば、それは地上で爆発したフレアだ。

自らの鎖ごと天馬を焼き尽くし、それに留まらない光は宙へと消える。

直撃は避けたライダーにして、なお全身に火傷の跡がある。特に両足の傷が酷い。先端の爪先部分が顕著だ。アレはブーツの黒ではない。炭化しかかかっており一部が崩れかけている、既に元の速度は望めまい。

敏捷こそ武器にするライダーにとって、完全に致命傷足りえるダメージだ。

「ライダー……！」

サーヴァントの危機に桜が飛び出した。

無我夢中の行為である。——桜自身も駆け出していることに気付いていないのかもしれない。しかしこのサーヴァントの前では危険だ。彼には一片たりとも温情などありえない。

「いけま……せん……サクラ……！」

しかし、それを戻す力は、今のライダーに存在しない。

止めを刺そうとギルガメッシュは歩み寄り——。

「邪魔だ」

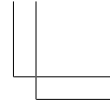
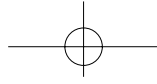
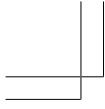
すれ違う間桐桜を袈裟懸けに切り下ろした。

「あ」

灼熱が走った。

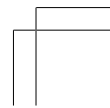
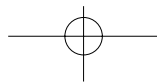
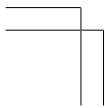
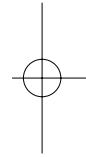
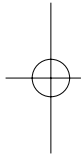
刃が通った後は鋭く、熱く——それから、思い出したように痛みがきた。

「ふむ……終わりか。余興にしては楽しめた」



338

頭上より酷薄な声がする。  
一拍遅れて、肉を貫く音がした。痛みはない——自らが受けた傷ではない。  
地面に倒れた音に現実味が無い。それはどこか遠い音だった。



「サク……ラ。サ……クラ……」

ライダーの声が遠い。

繋がりが弱くなっている。どこを攻撃されたのか分からないが、このままでは数分と経たずしてライダーは消えるだろう——今まで感じていた繋がりがとても弱くなっているのがその証明……。

そこまで思考して——それよりもなお、まだ自分が生きていることに驚いた。

声は一言たりとも出ないくせに、思考だけはくるくる回る。

指を動かそうとしてみると物凄い激痛が走るくせに、意識は痛みごと覚醒したまま。——

いっせ、眠ってしまえば楽になるというのに……！

……頭にきた。

なんで自分は弱いんだろう。

——間桐の家にやってきた時にも、よくそんなことを思っていた。

例えば与えられた蟲倉がイヤで泣いた時——お爺さまはその顔こそを見ることこそが愉快なのだど悦び、更に身体をいじった。

—死のうと思った。  
—毎日死にかけた。  
鏡を見つめて、どうやったらキレイに死ねるかって考えていた。  
でも死ぬのは怖くて、一人はいやで、誰かに認めて欲しくて——そして今、死にかけてい  
る。

「あ」

目元が熱い。

あんなに流せなかった涙を、死の間際で流してるんだ……。

—どくん、と心臓が一つ鼓動を上げた。

悔しい……。

だってそんなの悔しすぎる……！

地獄のような間桐の家で暮して、降って沸いたような幸運で束縛が無くなって、じゃあこ  
れから……と思ったんだ。

その矢先に——こんなことに……。

悔しさと自らの弱さに泣けてしまう。

こんな事で力を使って、更に寿命まで圧迫する——なんて、弱さ。

幸運を生かすことも、強くなることも、生き延びることさえ出来なかった……！

なんて、自分はバカなんだろうと思う。

必死になって、それこそ全身全霊の力を使って目を開けると、金髪の青年は腕組みして見下ろしている。

「……………」

彼は死に行く自分たちを観察しているのだと、それで気付いた。

目の前の死ぬ人間が自分のお眼鏡にかなうかどうかを見て、死んだ後でそのヒトの価値を認めるのだ……………!

今の人間は頑張るヤツだった。他にもいるかもしれないとカミサマ気取りで。

絶対的に強い相手になろう人間がいる訳ない。だから、それは選ばれた人だけが持てる趣味で、選ばれなかった人間には抗う術すらなくて……………。

意識が混濁していく。

ああ……………もうここまでなんだな。と思った。

姉の姿が脳裏をよぎる……………いつも懂れていた。

衛宮士郎……………ずっと見ていた。彼は、いつだって……………。

「あ……………」

そして気付いた。

——バカだ。

バカだバカだバカだ……！！

私って本当にバカだったんだ。

幸運なんかどこにもない。——目の前で見ていたのに、それにすら目を背けていたんだ。彼は絶対かなわない相手を前にして、一步も引かなかった——それは、あの遠い放課後。不可能な事に挑戦しつづけて、不可能だって納得するまで繰り返してた。それは屋上。

バカな自分を助けるために、ボロボロになってもサーヴァントの前に立っていた。

あの赤い世界。

自分が危険だつていうのに、助けようと必死で戦ってくれてたんだ……っ！

幸運じゃない。

幸運なんてどこにもない。そんなもの最初から存在なんてしていなかった。

——先輩が、彼が全て掴み取ってくれたんだってことに、今まで気がつきもしなかった。死にたいなんて嘘だ。死にたくない——誰かに助けて欲しいってずっと思っていた……でも、いざ人に助けられても気付かなかったなら、私はどこで間違っていたんだろう……？

「、——」  
ライダーの声が遠くなった。



彼女は今も自分に呼びかけている。——消え行く体で、後何分も持たないのに。

自分は……今、何をしているのだろうか……？

ライダーと同じで、どれだけ生きられるか分からないのに、今もこうして泣いているだけ。

「——わ、わたし……そんな……知ら……った」

「——ほう。まだ息があつたか」

頑張つて……本当に頑張つて、目を開けた。

視界は滲んでいたけれど、なんとか見える。

指先に力をいれた——すごく痛いけど、動かないわけじゃない。身体の魔力はまだ残ってる——心臓が血液を生み出して、循環した物を魔力回路が生成する——なら身体で作りだした魔力なんて命と同じだ。だから分け与えてライダーの身体を修復する。

「ライダーを形づくる核は破壊した。もう後数分も持たんぞ」

「知つて……ます」

声は驚くほどすんなり出た。

「サクラ……？」

足に力を籠める。

切られたところから血がどぼどぼ出てきたけれど、何度か滑って頭を地面にぶつけたけれど、それでも立てそうな感じがした。

「今さら自らの無能を知ったか」

金髪の彼は存外に付き合いがいいと思った。

血が沢山無くなつたから、思考が驚くほどクリアになつてる。

彼は止めを刺すのではなく、私のことを見ている。死ぬ前に何をするつもりなのか、興味を持つているのだろう。

「そうです……」

ふらふらと立ち上がって——ようやく私は、二本の足で立ち上がった。

「それで、次はどうするのだ？」

「……これ、です」

左手を掲げる。そこには、ライダーの紋章を形づくる最後の令呪が光っている——。

「——ぬ？」

なんとか手を伸ばして、倒れ伏すライダーの手を握った。

彼はこうして何度も立ち上がり、決して諦めなかつた——それを幸運だというのなら、それこそが未来だというのなら——

「傷つき倒れても前に進むのがヒトだというなら、——私はきつと、そんなことすら知らなかつた」

ただ逃げるだけの自分。戦わない自分。悔やむだけの自分。  
——私が見ていたもの、私が見たいと思っただけのもの。

これが戦争だというなら、これからの私が戦つていこう。  
最後の令呪に命を下そうと、彼女の手をぎゅっと握つて……。

「——え？」  
金髪のサーヴァントの後方——よくないものを見た。

「な——に——!?」

完全に意識を私に奪われていた彼は、ここにきて反応できなかった。  
すごく薄っぺらい影が、横に広がって立ちふさがっている。

墨を薄めたような外見が、紙のように吹かれながらもそこにいた。正面にたつ金色のサーヴァントを包み込むように、横に縦に広がって風呂敷のように折れ曲がってくる。

金髪の彼は、それに呑まれた。

「サクラ……!!」

「うん……っ」

「ごぼ——と血を吐いたけど、これこそが幸運なんだと、これが私の掴み取れた運なんだと実感した。」

「令呪よ……「跳んで」」

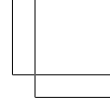
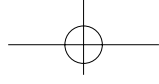
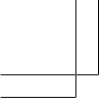
ありったけの魔力を令呪に注ぎ込んだ。左手が熱い——まだ熱いと感じられることが嬉しい。

ライダーに瞬間活力が戻る。

私を抱き上げ、ここから冬木市を二分する大河の向こうへ——文字通り、跳んだ。意識が闇に落ちていく。

もし幸運があつて、この先再び目を覚ますことができたなら。

——その時こそ、自分の生き方を探してみよう——。



## — Next Prologue Episode —

夜闇を引き裂いて、金色の光が虚空へ走った。

「セイバー……！」

「河の方です」

新都の中ほど——中央公園から大橋に向うには時間がかかる。もし深山町で誰かが戦っているなら、約一時間の遅れになってしまう。

「くそ……なんだってんだ」

「あの光……、いや、まさか」

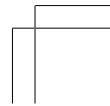
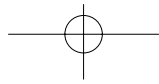
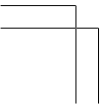
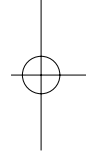
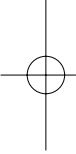
「何か知ってるのか……？」

セイバーは走りながらも、俯いて考え込んでいる。——こんな時になんだが、どこか器用な仕草だと感心した。

「川沿いに出よう。何か見えるかもしれない」

「はい」

話しながら、大橋方面へ目指して左に曲がった。一瞬のことだったが、あの光は臨海公園



のあたりから出ていたように思う。

なら、川沿いに出て海方面に移動した方が早いだろう。

臨海公園の対岸は港になる。あそこは人気の少ない場所だ、あの辺りもいざれ見てこないといけない。

「シロウ、サーヴァントが接近しています」

「な——」

そいつも俺たちと同じ方向を指しているらしい。指と視線で位置を教える。

次の接触は——あそこの交差点か。

タイミングを合わせる。手にした木刀に強化を送り込む。

セイバーとタイミング計って——。

「そこで動くな……!!」

「そこで止まちなさい……!!」

木刀を振りかざす俺と、左手を上げる遠坂の声が見事にハマった。

二人して固まる——つとこんな場合じゃないのを思い出し、木刀を下ろした。

「……同じ方向？」

「遠坂たちもか……」

停止した時間は僅か。セイバーと頷きあうと大橋目指して走り出す。

「あ、こら！ 待ちなさい！」

一拍遅れて遠坂がついてくる。

今の所仕掛けてくる様子もない——まあ、あんなモノを見た後なんだから当然だろう。

大魔術だとしてもあそこまで威力を發揮できるものなのかどうか、怪しい物だ。だとしたらやはり宝具だろうか——？ その可能性の方が高そうだ。

「遠坂、さっきのアレ何かわかるか？」

「わかるわけではないでしょう。だから見に行くんじゃない」

「——ごもつとも」

何にせよ行けばわかる——と速度を上げる。

「シロウ」

「ん？」

「前方にサーヴァントの気配です。……すごく微弱です」

「どういうことだ……？」

「先行します、といい残しセイバーは速度を上げる。——その速度は野性の豹だ。もう人間ではとてもじゃないが追いつけない。見る見るうちに背中が小さくなっていく。」

「アーチャーもいつて」

彼は一度だけ俺を見ると、駆ける速度を上げた。

風の音が強い。  
緊張に知らずに汗をかいていた。ただ無我夢中で走りつづけて数分——。  
港の手前に彼女達はいた。

「はあはあ——うそ——桜……？」

荒い息をついて、遠坂が膝を着く。

ライダーに外傷は無いが、魔力が微弱になっておりトレードマークだった眼帯もない。何があったのか分からないが、サーヴァントとしての彼女は既に死に体だった。

そして——。

「……………」

ライダーに抱かれた桜。どちらが重症といえれば間違い無くこつちだろう。

肩口から入った傷痕は胸の辺りまで到達している。傷そのものは浅いが出血が酷い——そんなの傷が軽症のはずはなく、単に千切れるまで刃が至ってないというのが正しい。

それにコレは明らかに刀傷だ。剣を武器に使うサーヴァントなんてもう残っていないはずなのに……。



「早く、サクラを」

「ああ——」

遠坂がハ——と立ち上がる。

「アーチャー。教会に。……私もすぐ行くわ」

「承知」

桜を抱いたアーチャーが駆ける。

その速度は先ほどの比ではない。セイバーもかくやという早さで、瞬時に姿が見えなくなる。

「ライダー、何があったのですか？」

「私も長くは持たない——そのまま聞いて下さい」

無言で頷く。

質問を挟むなつてことだろう——。確かに今の彼女に受け答えしている時間はなさそうだ。

それにしても死期を前に落ち着き払ってるのが彼女らしい。

「八人目のサーヴァントがいます。……金髪の男で、妙な宝具を使います」

「——金髪？」

「武器の数が多すぎてどこかの英雄か特定できませんでした……ただ、恐ろしく強い。あの影に呑まれましたが、遭遇したら気をつけてください」

「まさか——」

セイバーの顔色が変わる。ここにきて何かに思い至ったようだ。

「それとリン」

「……なに？」

「サクラは貴女を本当に慕っています。よろしくお願いします」

「……。わかった」

遠坂の返答を見て、ライダーがふっと笑みを浮かべた。

それは冷たいイメージがついて回った彼女にして、びっくりするくらい可憐な笑みだ。

「先に逝きます。——後はよろしくお願いします」

そうして、消える。

キャスターのように魔術で影を作り出したのではない。今ここに、ライダーというサーヴァントが表舞台から姿を消した。

「後を頼む——か。皮肉なものです。私たちは互いに消しあうために召喚されたというのに」  
セイバーの言葉が耳に残っていた——。

これで残りのサーヴァントは五人。ライダーの言う八人目というのが分からないが、いずれ正体も明らかになるだろう。  
「教会に行くわ」

「ああ。——なあ、遠坂……それと」

「……分かってる。今回の聖杯戦争はどこがおかしい。少なくともライダーの言った金髪が見つかるまで潰しあつてる場合じゃない」

「それで……いいか？」

「——頼まれちゃったしね。とりあえずアンタたちとは最後まで戦わないで居てあげるから、そちらも用心しなさい」

休戦まではいつても、協定とはいかない——今はこれが遠坂の最大限の譲歩なのだろう。

「わかった」

じゃ——と振り向きかけて、遠坂は立ち止まった。

「貴方達はこれからどうするの？」

「桜のことが気になるけど——家に戻るよ。後で容態教えて欲しい」

「そうしてくれると助かるわ」

敵でも味方でもない関係に戻ったとはいえ、ずっと側にいるのも出来ないだろう。俺は自分で桜を拒絶したのだから。

それじゃ——と今度こそ遠坂は去っていった。

」

そして一人立ち嫌んだままの彼女に声をかける。

「……セイバー、どうしたんだ？ 何か気になることでも？」

——言って気がついた。この状況下でおかしな事っていったら一つしかない。

どうやら俺は、自分で思ってる以上に混乱して焦っているらしい。  
そんなの当然だ……。血まみれの桜。消滅したライダー。状況がめまぐるしく変わっている——いろいろなことが混乱してぐちゃぐちゃだ。

「——似たサーヴァントを一人知っています。……いえ、ですがありえない。彼が存在していたのは十年前です」

「……前の聖杯戦争か」

「そうです。……前回のアーチャー。彼も多種多様な宝具を使う正体不明のサーヴァントでした」

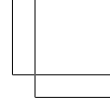
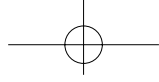
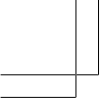
「どういうコトなのだろうか……？ いや、判断が出来ない。一度キャスターも交えて相談した方がいい。」

それと——。

「シロウにも気がかりなことが？」

「ああ……」

絶対に反対される——もしかしたらキャスターまで含めて二人がかりで反対されそうだが、



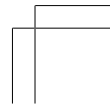
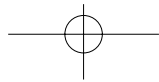
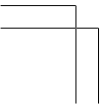
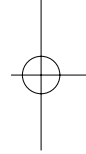
そんなのもう覚悟の上だ。それでなくても彼女のことは心配だったんだから。  
「今回の聖杯戦争がおかしいっていうなら、一つ行っておきたい所がある」  
「どこでしょう？」

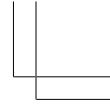
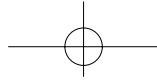
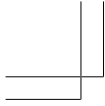
気安い調子で彼女は言う。

この後に雷が落ちるかもしれない。

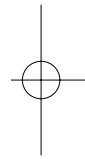
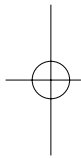
でもこれは必要なことなんだと覚悟をいれて、俺は告げた。

「アインツベルンの城——イリヤに。バーサーカーのマスターに会っておきたい」

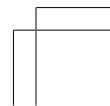
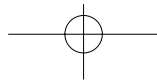
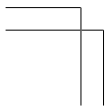


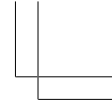
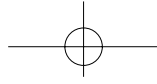
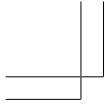


356

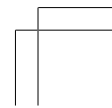
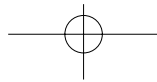
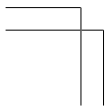
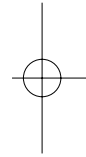
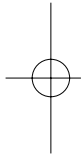


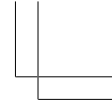
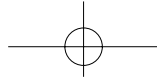
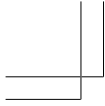
closed 「Eternity Linell」



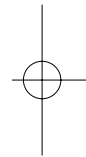
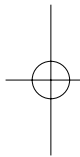


357

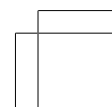
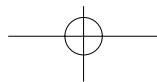
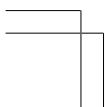




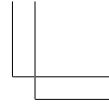
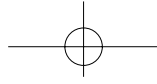
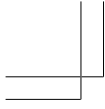
358



continue NextEpisode 「Eternity LineIII」  
2006/summer

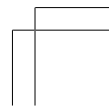
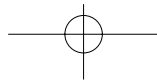
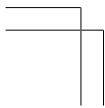
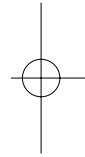
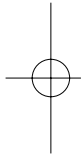






359

あとがき



こんにちは。桐月です。

この度は新刊「Eternity LineII」をお手にとっていただきありがとうございます。

HPでも告知した通り、前巻の後書きで「上下巻」で出す、と書いていながら、速攻で上下下になっていきます。

「本当に終わるのかヨ！」と多数の方から突っ込みを戴きました。その読みは大いに正しいです。知らぬは一卷を書いていた時の自分ばかりです。

最終巻(予定)の「Eternity LineIII」ですが、こちらは来年の夏コミ予定となっております。

春のイベントでも時期的に出せそうなのですが、このシリーズ特有の問題点がありまして、ある程度大きなイベントでないと新刊が出せません。

そのため、春にはまた別の一冊完結の短い中々長編を考えています。

この後書きを読者様に読まれている頃には、Fate/ollow ataraxiaも発売されてクリアーした人も増えてくる頃でしょうか。

この長編シリーズは基本路線を**Fate**本編より使用していますが、所々で**holiow**の設定を使っている部分があります。

今巻のメディア王女のシーンなどはその際たる物です。

しかしながらギリシヤ神話はあまりに本や伝わり方によつて解釈や名称が分かれてしまつていて、読んでいて混乱すると思われまふ。

そこで蛇足ながら、創作のオリジナル設定として以下に追記させていただきます。

**holiow**のネタバレは含んでいませんが、とりあえず見ないように……とか、興味ねーよという人は読み飛ばしてください。

#### コルキス

黒海東沿岸の王国。現在のグルジア。この国が栄えていたのは紀元前5世紀頃で、かなり大昔ではありますが、ギリギルの紀元前1900年頃に比べるとまだまだ新しい国です。

標高5000m以上の高山が多く、いくつかの山頂は万年雪と氷河に覆われている。

魔女の中の魔女 とも、全ての魔術の神とも言われる「ヘカテ」を信仰していて、メデアはこのヘカテの巫女。

メデア王女に魔術を教えたのは叔母であるキルケというのが一般的ですが、*holiow*だとヘカテの名前しか出てこないなので、併記してあるのが二次創作設定です。

#### ヘカテ

魔女の中の魔女、全ての魔術を司る神として言われていますが、諸説様々で由来については良く分かりません。名前には「遠くまで力を及ぼす」という意味があるそうです。

ギリシャ神話のヘラの別名とか、大地の女神であるとか、そのようにも言われています。三叉路の女神としてヨーロッパの各地に像があります。三叉路に三面をもつ異形の像があつたら、それがヘカテの像です。

絵画のメデア王女が、三叉路の真ん中にたつて魔術を使う絵などがあります。

全ての黒魔術の母として扱われて、現在のミサやサバトで彼女に生贄を捧げたりするそうなので、愛弟子のメデアの能力がいかにトンデモかわかるエピソードです。

## ●天馬

Fateの2ルートで最大の名場面とも言われるライダーの宝具の「騎英の手綱」、プレイ後時間経つと忘れがちになりますが、天馬そのものは宝具でもなんでもなく、天馬の能力を跳ね上げる手綱こそが宝具です。かくいう自分も忘れかけてました。

慎二がマスターだったために、魔力が足りないはずのLateルートの学校で召喚できたのはそのためと解釈します。

Fate世界では幻獣は高い位置付けをされており、Fate本編でもただの突進でセイバーの対魔抵抗の防御をぶち抜いています。

天馬の周囲に張られる魔力の壁こそが突進時にダメージを与えるということで、今巻で出てきましたので改めて解説をば。

神話のペガサスは、メドゥーサの血液から生まれた後、アンドロメダを助けたりとかペルセウスの愛馬として大活躍です。

そのペルセウスが白銀聖闘士で、ペガサスとアンドロメダが青銅聖闘士なのは格付けとしては間違っていないですが、能力設定がおかしいと思います。

今巻で伏線でもなんでもなく、解説しておく内容としては、以上でしょうか。  
 後は（あくまで二次創作の範囲として）次巻以降の伏線やらなにやらになっていきます。同人誌でコミケ3回に分けて発行というのはちよつと分散しすぎな感じがあるので、なんとか次で決着をつけたい所です。

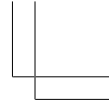
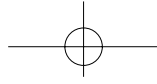
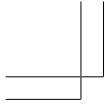
ですが、中途半端な打ち切りっぽく終わらせるのも難なので、二冊同時刊行やページ数いっそのこと増やしてしまつて……というのを考えています。

Howで大幅にシーン追加あつて悦び勇んでいたのですが、キヤスターのような本編で日常シーンの無かったキャラとか書いてると、楽しくてしようがないです。

一卷を出した時に「キヤスターさん、可愛いけどちよつと可愛らしすぎじゃない？」といわれたのですが、Howは完膚なきまでにやってくれました。いざTYPE-MOONスバラシイ！

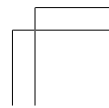
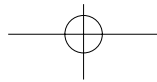
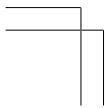
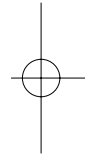
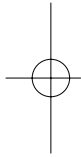
さて、今回も表紙絵で美しいイラストを描いてくださったバハムートチョさん。いつもありがとうございます。

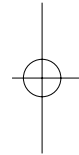
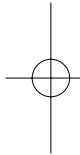
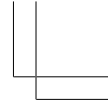
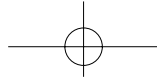
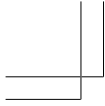
表紙絵をサイトで告知した時に、ライダーや桜よりギルガメッシュに人が集中したのは忘れていません。さすが英雄王のカリスマ悔りがたし。



では、長々とした後書きになりましたが、これにて終わります。  
また次のイベントでお会いしましょう。

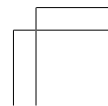
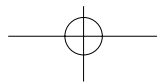
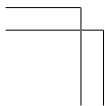
2005年某日  
桐月



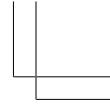
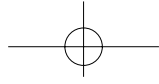
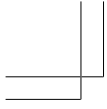


この作品はTYPE-MOON製作のPCゲーム「Fate/stay night」の  
設定、世界観を使用した二次創作作品です。

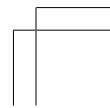
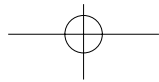
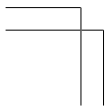
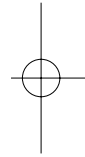
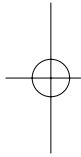
名称、団体などは全て原作ゲームに基づく物であり、実在の団  
体などとは一切関わりありません。

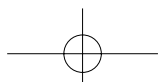
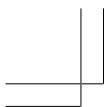






367





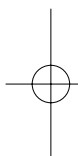
368

## Eternity Line I I

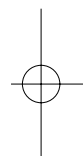
初出：2005/12/30

発行元：桐文堂

発行者：桐月



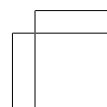
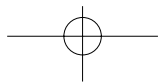
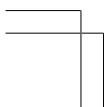
印刷：パワープリント

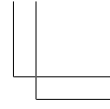
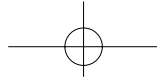
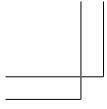


私立桐月図書館

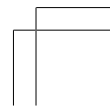
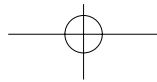
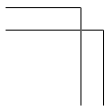
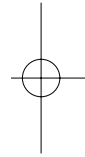
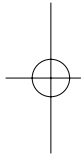
<http://misawahanei.cool.ne.jp/kiduki/>

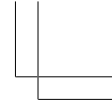
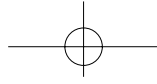
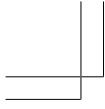
本書の内容の無断転載などはおやめください。





369





370

